

岩橋千塚古墳群

－大谷山 27 号墳・28 号墳 発掘調査報告書－

2018 年 3 月

和歌山県教育委員会



1. 大谷山 27 号墳 横穴式石室



2. 大谷山 27 号墳 横穴式石室 (羨道)



1. 大谷山 27 号墳 東側くびれ部円筒埴輪輪列



2. 大谷山 27 号墳 前方部前端円筒埴輪輪列



1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室



2. 大谷山 28 号墳 横穴式石室 (玄室)



1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室 玄門及び扉石



2. 大谷山 28 号墳 箱式石棺

序 文

和歌山県の北部を西流する紀ノ川の下流域には、肥沃な和歌山平野が形成され、平野部やその周辺には、古くから人々が生活を営んできたことを示す数多くの遺跡が残されています。このうち、岩橋千塚古墳群は当地域の古墳時代を代表する遺跡であり、紀ノ川下流域南岸の岩橋山塊に位置し、5世紀初頭頃から7世紀に至るまで、総数約850基の古墳が築造された全国有数の群集墳として知られています。

岩橋千塚古墳群は、その一部が昭和6年に史跡、昭和27年に特別史跡に指定され、昭和63年、平成12年及び平成28年の追加指定を経て、現在は約62万㎡の指定地の中に430基を越す古墳が保存されています。昭和46年に古墳群の保存と活用を目的として開園した和歌山県立紀伊風土記の丘には、現在、年間約20万人の人々が訪れています。

岩橋千塚古墳群の調査の歴史は古く、明治時代に東京帝国大学の犬野雲外によって行われた調査は、明治41年のN. G. マンローの著書“PREHISTORIC JAPAN”で広く海外に紹介され、さらに大正時代には「岩橋千塚第一期調査」が行われました。また、昭和30年代に入り、市街地拡大に伴う周辺部の開発で指定地外の古墳の保存問題が生じたことを契機に、昭和37年から和歌山市教育委員会が大学、地元研究者等の協力を得て分布調査や発掘調査を行い、重要な成果が蓄積されました。

そして、和歌山県立紀伊風土記の丘開園後は、特別史跡の追加指定や、保存・活用を目的とした整備に伴う発掘調査が現在まで続けられています。

本報告書は、平成28・29年度に実施した大谷山27号墳・28号墳出土遺物等の再整理事業の成果をまとめたものです。これら2基の古墳は、昭和48年度に開発計画に伴い発掘調査が実施され、いずれも岩橋型石室と呼ばれる横穴式石室をもつ小型の前方後円墳であることが明らかとなりました。残念ながら古墳は当時の調査後に失われましたが、その調査記録や出土遺物は岩橋千塚古墳群の価値付けにとって欠かすことのできないものです。本報告書は、これらの発掘調査成果を、再整理事業によって得られた新たな知見を加え、まとめたものです。

本書が研究資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、史跡や埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

結びに、報告書の刊行に至るまで御指導並びに御協力をいただきました関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成30年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 宮下和己

例 言

- 1 本書は和歌山県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）が実施した和歌山市岩橋に所在する大谷山 27 号墳・28 号墳の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は昭和 48 年 5 月～8 月に県教育委員会が社団法人和歌山県文化財研究会に委託して実施した。
- 3 本書は発掘調査当時の所見に、平成 28・29 年度に実施した大谷山 27 号墳・28 号墳出土遺物等再整理事業によって得られた新たな知見を加えてまとめたものである。
- 4 出土遺物等再整理事業は、平成 28・29 年度に県立紀伊風土記の丘が実施した。
- 5 本書の執筆は、和歌山県立紀伊風土記の丘学芸課員がおこなった。執筆分担は、目次に（ ）で示した。
- 6 遺物の実測・トレースについては整理補助員が行い、遺物写真撮影は山本光俊が行った。
- 7 本書の編集は萩野谷正宏が行った。
- 8 発掘調査及び再整理事業で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料及び出土遺物は県立紀伊風土記の丘が保管している。
- 9 報告書刊行にあたり、下記の方々と機関からご指導・ご協力を賜った。
文化庁、公益財団法人和歌山県文化財センター、和歌山市教育委員会、横穴式石室研究会
太田宏明・金澤雄太・河内一浩・木許守・笹栗拓・杉井健・鈴木一有・辻川哲朗・辻林浩・
廣瀬時習・藤井幸司・堀真人・松田度

凡 例

- 1 本報告の図中の北方位は磁北 (M.N.) を示す。
- 2 標高は東京湾平均海面 (T.P.) の数値であり、単位はmを使用している。
- 3 発掘調査時の土層の色調は、調査担当者などが任意の判断で行っている。
土器などの色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』(平成 26 年版) に拠り記述を使用した。
- 4 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。
- 5 再整理事業で使用した調査コードは、以下のとおりである。
73-01・185-99 (1973 年度 - 和歌山市・岩橋千塚古墳群 - 大谷山 27 号墳)
73-01・185-100 (1973 年度 - 和歌山市・岩橋千塚古墳群 - 大谷山 28 号墳)
出土遺物及び記録資料はこのコードを用いて管理している。
- 6 本書掲載地図は、和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(平成 26 年 9 月 15 日現在) に加筆して使用した。

調査組織

発掘調査（昭和48年度）

和歌山県教育委員会 教育長 井上光雄

社団法人和歌山県文化財研究会 会長 和中金助

調査委員 羯磨正信（県文化財課専門員）

巽三郎（県文化財専門審議委員）

坪井清足（奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部長）

藤沢一夫（帝塚山大学講師）

調査担当者 藤丸詔八郎

辻林浩

再整理事業（平成28・29年度）

和歌山県教育委員会 教育長 宮下和己

生涯学習局長 楠義隆（平成28年度） 木皮享（平成29年度）

文化遺産課 文化遺産課長 水上勇人（平成28年度） 坂口真史（平成29年度）

副課長 坂口真史（平成28年度） 栗生好人（平成29年度）

主幹 黒石哲夫

主査 丹野拓 高橋智也

副主査 田中元浩 仲辻慧大（平成29年度）

技師 仲辻慧大（平成28年度）

紀伊風土記の丘 館長 水田義一（平成28年度） 中村浩道（平成29年度）

副館長 米田良博

総務課長 嶋田功伺

主任 井上佳典

主査 川崎康弘

副主査 小碓有利子（平成28年度） 額田誠規（平成28年度）

主事 沖直弥（平成29年度）

学芸課長 佐々木宏治

主査学芸員 萩野谷正宏 瀬谷今日子（平成29年度）

学芸員 瀬谷今日子（平成28年度） 藤森寛志 山本光俊

副主査 富加見泰彦

本文目次

巻頭カラー写真

第1章 経緯と経過	(萩野谷正宏)
第1節 発掘調査事業	1
第2節 出土遺物等整理事業	1
第2章 遺跡の位置と環境	(山本光俊)
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	
(1) 周辺の歴史的環境	3
(2) 岩橋千塚古墳群周辺の古墳	4
(3) 岩橋千塚古墳群	5
第3章 大谷山27号墳	(萩野谷)
第1節 発掘調査	
(1) 調査の概要	11
(2) 墳丘	12
(3) 埋葬施設	17
第2節 出土遺物	
(1) 埴輪	18
(2) 土器類	20
(3) 装身具類	(佐々木宏治) 20
第3節 まとめ	27
出土遺物観察表	29
第4章 大谷山28号墳	(萩野谷)
第1節 発掘調査	
(1) 調査の概要	37
(2) 墳丘	37
(3) 埋葬施設	42
第2節 出土遺物	
(1) 埴輪	52
(2) 土器類	53
第3節 まとめ	59
出土遺物観察表	61
第5章 総括	(萩野谷)
第1節 大谷山27号墳・28号墳の評価	65
第2節 大谷山28号墳の横穴式石室	
(1) 岩橋型石室の検討	66
(2) 大谷山28号墳の岩橋型石室の評価	70

参考文献

写真図版

挿 図 目 次

- 第1図 周辺遺跡分布図
- 第2図 特別史跡岩橋千塚古墳群分布図
- 第3図 大谷山27号墳 前方部前端 円筒埴輪列平面図 (S=1/30)
- 第4図 大谷山27号墳 東側くびれ部 円筒埴輪列平面図 (S=1/30)
- 第5図 大谷山27号墳 調査区土層断面図 (S=1/80)
- 第6図 大谷山27号墳 横穴式石室実測図 (S=1/40)
- 第7図 大谷山27号墳出土 円筒埴輪 (1)
- 第8図 大谷山27号墳出土 円筒埴輪 (2)
- 第9図 大谷山27号墳出土 円筒埴輪 (3)
- 第10図 大谷山27号墳出土 円筒埴輪 (4)
- 第11図 大谷山27号墳出土 形象埴輪
- 第12図 大谷山27号墳出土 土器類
- 第13図 大谷山27号墳出土 装身具 (S=1/1)
- 第14図 大谷山27号墳 墳丘復元図 (S=1/200)
- 第15図 大谷山27号墳・28号墳 墳丘測量図 (S=1/200)
- 第16図 大谷山27号墳・28号墳 トレンチ配置図 (S=1/200)
- 第17図 大谷山28号墳 調査区土層断面図(1) (S=1/80)
- 第18図 大谷山28号墳 調査区土層断面図(2) (S=1/80)
- 第19図 大谷山28号墳 横穴式石室実測図(1) (S=1/40)
- 第20図 大谷山28号墳 横穴式石室実測図(2) (S=1/40)
- 第21図 大谷山28号墳 箱式石棺実測図 (S=1/20)
- 第22図 大谷山28号墳 墳丘断面図 (S=1/100)
- 第23図 大谷山28号墳出土 円筒埴輪 (1)
- 第24図 大谷山28号墳出土 円筒埴輪 (2)
- 第25図 大谷山28号墳出土 円筒埴輪 (3)
- 第26図 大谷山28号墳出土 形象埴輪
- 第27図 大谷山28号墳出土 土器類
- 第28図 大谷山28号墳 墳丘復元図 (S=1/200)
- 第29図 岩橋型石室の袖部・玄室前道基石の分類 (S=1/80)
- 第30図 岩橋千塚古墳群の横穴式石室 (S=1/200)

表 目 次

- 第1表 大谷山27号墳・28号墳発掘調査・出土遺物等整理工程表
第2表 大谷山27号墳出土遺物観察表
第3表 大谷山28号墳出土遺物観察表
第4表 岩橋千塚古墳群の主な横穴式石室（大型石室）
第5表 岩橋千塚古墳群の主な横穴式石室（中・小型石室）

巻頭図版目次

- 巻頭写真1 1. 大谷山27号墳 横穴式石室
2. 大谷山27号墳 横穴式石室（羨道）
巻頭写真2 1. 大谷山27号墳 東側くびれ部円筒埴輪列
2. 大谷山27号墳 前方部前端円筒埴輪列
巻頭写真3 1. 大谷山28号墳 横穴式石室
2. 大谷山28号墳 横穴式石室（玄室）
巻頭写真4 1. 大谷山28号墳 横穴式石室玄門及び扉石
2. 大谷山28号墳 箱式石棺

挿 図 目 次

写真図版1

1. 大谷山27号墳・28号墳 遠景（西から）
2. 大谷山27号墳・28号墳 近景（西から）

写真図版2

1. 大谷山27号墳 墳丘（北から後円部を望む）
2. 大谷山27号墳 東側くびれ部（南東から）

写真図版3

1. 大谷山27号墳 東側くびれ部（南から）
2. 東側くびれ部（北東から）

写真図版4

1. 大谷山27号墳 東側くびれ部円筒埴輪検出状況（東から）
2. 大谷山27号墳 前方部前端（東から）
3. 前方部前端円筒埴輪検出状況（東から）

写真図版5

1. 大谷山27号墳 前方部前端円筒埴輪検出状況（南から）
2. 前方部前端円筒埴輪検出状況（南西から）

写真図版6

1. 大谷山27号墳 円筒埴輪（前方部4・5・6）検出状況
2. 円筒埴輪（前方部1・2）検出状況
3. 円筒埴輪（前方部5）検出状況
4. 後円部西トレンチ南壁土層断面
5. 後円部西トレンチ南壁土層断面（部分）

写真図版7

1. 大谷山27号墳 横穴式石室全景（北西から）
2. 横穴式石室全景（羨道排水溝検出後）（南西から）

写真図版8

1. 大谷山27号墳 横穴式石室全景（東から）
2. 玄室奥壁（東から）

写真図版9

1. 大谷山27号墳 横穴式石室玄室（北から）
2. 玄室（前壁石積最下段検出後）（北から）

写真図版10

1. 大谷山 27 号墳 横穴式石室玄室（西から）
2. 玄室（前壁石積最下段検出後）（西から）

写真図版 11

1. 玄室奥壁掘方検出状況
2. 羨道（排水溝検出後）（西から）

写真図版 12

1. 羨道（排水溝検出後）（南から）
2. 羨道排水溝検出状況①（東から）
3. 羨道排水溝検出状況②（東から）

写真図版 13

1. 大谷山 27 号墳 円筒埴輪①

写真図版 14

1. 大谷山 27 号墳 円筒埴輪②

写真図版 15

1. 大谷山 27 号墳 円筒埴輪③

写真図版 16

1. 大谷山 27 号墳 円筒埴輪④

写真図版 17

1. 大谷山 27 号墳 円筒埴輪⑤

写真図版 18

1. 大谷山 27 号墳 円筒埴輪⑥
2. 大谷山 27 号墳 形象埴輪①

写真図版 19

1. 大谷山 27 号墳 形象埴輪②

写真図版 20

1. 大谷山 27 号墳 須恵器・装身具（金製垂飾金具）

写真図版 21

1. 大谷山 28 号墳 全景（南東から）
2. 大谷山 28 号墳 前方部前端（東から）

写真図版 22

1. 大谷山 28 号墳 近景（西から）
2. 大谷山 28 号墳 全景（南から）
3. 大谷山 28 号墳 前方部前端（西から）
4. 前方部前端円筒埴輪検出状況（南西から）
5. 円筒埴輪（前方部西）
6. 円筒埴輪（前方部東）

写真図版 23

1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室（西から）

写真図版 24

1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室玄室（東から）
2. 玄室（東から）

写真図版 25

1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室玄室（西から）
2. 玄室（東から）

写真図版 26

1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室玄室右側壁（北から）
2. 玄室左側壁（南から）

写真図版 27

1. 屍床仕切石検出状況①
2. 屍床仕切石検出状況②
3. 屍床仕切石検出状況③
4. 屍床仕切石検出状況④
5. 玄室前壁（西から）

写真図版 28

1. 羨道左側壁①
2. 羨道左側壁②
3. 羨道右側壁
4. 羨道南トレンチ西壁
5. 羨道扉石閉塞状況（東から）

写真図版 29

1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室羨道（東から）
2. 羨道（排水溝石蓋除去後）（東から）

写真図版 30

1. 羨道排水溝検出状況（西から）
2. 排水溝検出状況（扉石付近）
3. 排水溝末端部付近
4. 羨道排水溝検出状況（蓋石除去後）（西から）
5. 羨道排水溝検出状況（蓋石除去後）（東から）

写真図版 31

1. 後円部西トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況①
2. 後円部西トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況②
3. 後円部西トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況③
4. 後円部西トレンチ 南壁土層断面
5. 羨道北トレンチ 西壁土層断面①
6. 羨道北トレンチ 西壁土層断面②

7. 羨道北トレンチ 西壁土層断面③

写真図版 32

1. 大谷山 28 号墳 箱式石棺（西から）
2. 箱式石棺（東から）

写真図版 33

1. 大谷山 28 号墳 箱式石棺（蓋石除去後）（西から）
2. 箱式石棺（蓋石除去後）（北から）
3. 墳丘主軸トレンチ西壁土層断面①
4. 墳丘主軸トレンチ西壁土層断面②

写真図版 34

1. 後円部北トレンチ全景（南から）
2. 後円部北トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況①
3. 後円部北トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況②
4. 後円部北トレンチ 西壁土層断面①

5. 後円部北トレンチ 西壁土層断面②

6. 後円部北トレンチ全景（北西から）

7. 墳丘主軸トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況

写真図版 35

1. 大谷山 28 号墳 円筒埴輪①

写真図版 36

1. 大谷山 28 号墳 円筒埴輪②

写真図版 37

1. 大谷山 28 号墳 円筒埴輪③

写真図版 38

1. 大谷山 28 号墳 形象埴輪

写真図版 39

1. 大谷山 28 号墳 須恵器

写真図版 40

1. 大谷山 28 号墳 須恵器・土師器

第1章 経緯と経過

第1節 発掘調査事業

今回発掘調査が実施された大谷山27号墳・28号墳は、岩橋千塚古墳群の大谷山地区にあり、岩橋丘陵の西端に位置する大谷山の北側に立地する。所在地は和歌山市岩橋字前山1825番地11である。

岩橋千塚古墳群の大谷山地区とその周辺は、昭和46年の和歌山県立紀伊風土記の丘開園の前後より、複数回にわたる開発が計画され、古墳群保存への影響が危惧されるようになった。

昭和47年には大谷山北側の丘陵端部で民間事業者による土砂採取工事が計画され、計画地に所在する大谷山4・5・6・39号墳は、同年の発掘調査の結果、大谷山4・5・6号墳が計画変更により現状保存となり、その後公有地化と特別史跡追加指定による保護措置が図られたものの、大谷山39号墳は現状保存が図られずに調査後に消滅した。

大谷山27号墳・28号墳は、上述の大谷山4・5・6号墳が所在する尾根の東側、谷を隔てて対峙する尾根上に立地する。この地点は、大谷山4・5・6号墳の所在する地点が現状保存となった代替として、新たに土砂採取工事の計画地とされた範囲に含まれることとなり、昭和48年2月に事業者により土木工事による発掘届出が提出された。上述の経緯から、工事対象地における古墳の現状保存は極めて困難であることから、大谷山27号墳・28号墳は記録保存の発掘調査が実施されることとなり、残念ながら開発により消滅する結果となった。

大谷山27号墳・28号墳の発掘調査は、昭和48年5月15日付けで和歌山県教育委員会より文化庁長官あてに埋蔵文化財発掘調査届出書が提出された後、県教育委員会からの委託を受けた社団法人和歌山県文化財研究会によって実施された。

調査は5月15日付けで着手し、8月15日に完了した。樹木伐採後に測量調査及びトレンチによる発掘調査が行われ、調査の結果、大谷山27号墳は横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳、28号墳は横穴式石室及び箱式石棺を埋葬施設とする前方後円墳であることが明らかとなった。

なお、昭和48年8月14日には発掘調査の現地説明会が実施された。

第2節 出土遺物等整理事業

発掘調査終了後、調査報告書を刊行する必要があったが、予算面等において報告書作成に必要な条件を整備することができないまま40年以上が経過し、発掘調査の記録は、『和歌山県史 考古資料』（昭和58年和歌山県発行）にその概略がわずかに掲載されるのみであった。

特別史跡岩橋千塚古墳群の整備及び管理運営を行なう和歌山県立紀伊風土記の丘では、岩橋千塚古墳群の価値を再確認し、今後の保存及び活用に活かすために、未報告資料の再整理事業を実施することとした。大谷山27号墳・28号墳は平成28年度と29年度の2カ年計画で出土遺物及び記録類の再整理と報告書の刊行を行った。なお、事業は国宝重要文化財保存整備費補助金（県内遺跡発掘調査等事業）を活用し実施した。

	昭和 48 年度					平成 28 年度				平成 29 年度			
現地調査												
準備												
測量・発掘調査												
出土遺物等整理・報告書刊行												

第1表 大谷山 27 号墳・28 号墳発掘調査・出土遺物等整理工程表



大谷山 28 号墳石室実測作業 (1)



大谷山 28 号墳石室実測作業 (2)



大谷山 28 号墳調査状況



大谷山 27 号墳石室調査状況

昭和 48 年度発掘調査状況 (大野嶺夫氏撮影)



出土遺物接合作業



遺構トレース作業

平成 28・29 年度出土遺物等整理状況

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

岩橋千塚古墳群周辺の地形は中央構造線が東西に横断し、これによって北側の西南日本内帯、南側の西南日本外帯に分けられる。この中央構造線の南に紀ノ川が西流しており、和歌山市を紀ノ川北岸と南岸に二分している。紀ノ川は、奈良県と三重県の県境に位置する大台ヶ原を源流とし、紀伊水道に注ぐ延長136kmの一級河川であり、運ばれてきた土砂により和歌山平野が形成されている。北岸には内帯に属する和泉山脈があり、領家変成帯の西南端にあたる。堆積岩である礫岩・砂岩・泥岩の互層をなす和泉層群で構成される。南岸には外帯に属する龍門山脈があり、変成岩である結晶片岩を主体とする三波川変成帯（長瀨変成帯）にあたる。龍門山脈は、結晶片岩中に貫入した蛇紋岩からなる龍門山（756 m）が主峰となり、西側へ標高を減じながら、途中紀ノ川支流の貴志川に分断されるが、岩橋山塊まで続く。岩橋山塊は和歌山市市街地の東にある丘陵で、標高140～150 mの結晶片岩類で構成される山塊である。東から天王塚山（152 m）・大日山（142 m）と連なり、北端の花山（77 m）や西端の福飯ヶ峯（101 m）へと小山塊が続く。この岩橋山塊に岩橋千塚古墳群は位置する。

第2節 歴史的環境

（1）周辺の歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、岩橋山塊近辺では確認されていないが、紀の川市の平池遺跡で細石器と細石刃核が出土している。

縄文時代の遺跡は、明治28年（1895）に近畿地方で初めて発見された貝塚であり、抜歯した若い女性を伸展葬で埋葬した土坑墓などが検出された鳴神貝塚、イノシシの牙を利用したナイフが出土した瀬宜貝塚のほか、吉礼貝塚、岡崎遺跡などが岩橋山塊周辺で確認されている。

弥生時代の遺跡は、紀ノ川南岸では前期の溝が確認された太田・黒田遺跡、紀ノ川北岸では後期の竪穴建物内から蛇紋岩製の勾玉・管玉の原石・未成品・完成品が出土した吉田遺跡や、田屋遺跡、西田井遺跡、北田井遺跡、宇田森遺跡、川辺遺跡などの集落が紀ノ川沿いの沖積低地に立地する。岩橋山塊南西側の菖蒲谷遺跡では中期の台状墓が検出されている。中期末葉～後期前半には平野部の集落が激減し、岩橋山塊の天王塚山遺跡や滝ヶ峯遺跡などの高地性集落が出現する。岩橋山塊南西部の井辺遺跡と神前遺跡では、弥生時代後期の自然流路や溝から多量の土器や木製品が出土している。銅鐸は県内で約40点発見されており、紀ノ川下流域では有本銅鐸など銅鐸6点が発見されている。

古墳時代の遺跡は、岩橋山塊西側で旧谷川から滑石製模造品や鳥形土器などが出土し、水辺の祭祀跡と考えられる大日山Ⅰ遺跡や、灌漑用水と考えられる大溝が確認された鳴神Ⅱ遺跡や鳴神地区遺跡が立地する。紀ノ川北岸では古墳時代中期の大型倉庫7棟が並んで確認された鳴滝遺跡や、陶質土器が多数出土した楠見遺跡、埴輪窯が2基確認された平井遺跡が知られている。

奈良時代以降の遺跡は、紀伊国一宮の日前・国懸神宮に隣接して、奈良～室町時代の官衙的な施設と考えられる掘立柱建物が確認された秋月遺跡が立地する。室町時代には和歌山平野に太田城が築城される。周囲では16世紀の濠状遺構が確認され、近くに太田城水攻め堤跡が残る。

(2) 岩橋千塚古墳群周辺の古墳

紀ノ川南岸では、岩橋山塊西側では県内最古の前方後円墳と考えられる秋月1号墳が築造され、隣接して円墳・方墳が6世紀代まで造られる。

岩橋山塊東側では、鳩羽山の北斜面に明楽、小倉、小倉神社、モント塚、宮山、東国山、寺山、奥山田古墳群、南斜面に七ツ塚、具束壺古墳群など後期から終末期にかけての古墳群が形成されている。明楽古墳群は14基の円墳で構成され、4・5号墳は岩橋型横穴式石室に類似した玄室前道が確認されているが、玄門部分に相違点があり別形態の石室と考えられる。小倉古墳群は9基の円墳で構成され、1・8号墳は横穴式石室で、1号墳は玄門に立柱石を用いている。8号墳は石柵をもつ岩橋型横穴式石室である。東国山古墳群は5基の円墳で構成され、1号墳では未盗掘の竪穴式石室が調査された。2体の人骨が発見されており、一方は付近から鉄刀や鉄鏃が出土していることから男性、もう一方は付近から玉類と刀子が出土していることから女性と推定されている。

寺山古墳群は3基の方墳を含む約20基の古墳で構成され、6世紀末から7世紀代の古墳群である。奥山田古墳群は7基の円墳で構成され、6世紀から7世紀代の古墳群である。七ツ塚古墳群は13基の円墳で構成され、7世紀前半を中心に築造された終末期の古墳群である。具束壺古墳群は5基の円墳で構成され、1号墳から3号墳は7世紀の横穴式石室である。

岩橋山塊南東側の貴志川流域の平野部では、古墳時代中期～後期にかけて円墳（罐子塚古墳、丸山古墳、三味塚古墳）や前方後円墳（双子三味塚古墳、平池1号墳）が造営される。丸山古墳は副室を持つ箱式石棺や墳丘から鉄鋌・鉄鉢などの鉄製品、玉類、琴柱形石製品などが発見された。平池1号墳は、東側くびれ部に陸橋が付設されている。

紀ノ川と貴志川の合流地点付近の丘陵上では、船戸山古墳群・船戸箱山古墳が造営される。船戸山3号墳は、2基の横穴式石室と竪穴式石室が確認されている。船戸山6号墳は、横穴式石室と箱式石棺が確認されている。船戸山2号墳、3号墳2号石室は石柵を有する。船戸箱山古墳は、石柵を有する2基の横穴式石室と3基の竪穴式石室が確認されている。墳丘には埴輪列が確認された。

岩橋山塊南側から海南市にかけても数多くの古墳が造営されている。伊太祁曾神社1号墳は石柵・石梁をもつ岩橋型横穴式石室である。城ノ前1号墳は玄室側壁を小口積みで構築するが、奥壁は巨石を使用するなど岩橋型横穴式石室とは相違点がある。室山古墳群は7基の円墳で構成され、6世紀中葉～7世紀前半の古墳群で、1・2号墳は石柵・石梁をもつ岩橋型横穴式石室である。山崎山古墳群は16基の古墳で構成され、1号墳では6世紀末から7世紀初頭の石柵をもつ横穴式石室が確認された。5号墳は5世紀前半の造出を有する墳長45mの前方後円墳である。紀ノ川南岸には一墳丘多葬の古墳が少なくなく、岩橋千塚古墳群の中・小型前方後円墳や小型円墳と共通する特徴がある。また、多様な埋葬施設を用いる点も特徴と言える。

紀ノ川北岸では、釜山古墳群は3基の古墳で構成されており、車駕之古址古墳は調査の結果、段築、盾形周濠、造出を備えた5世紀後半の全長100m以上の前方後円墳と判明し、国内唯一の金製勾玉などが出土した。晒山古墳群は10基の古墳で構成され、晒山1号墳は古墳群で最も古い4世紀末、墳長70mの前方後円墳の大谷古墳は5世紀末であることが確認された。大谷古墳では、組合式家形石棺が検出され、鉄製馬冑・馬甲などの豊富な副葬品が出土している。鳴滝古墳群は10基の古墳で構成され、1号墳は石柵を有する岩橋型横穴式石室で、6・7号墳は古墳群で最も古い5世紀末であることが確認された。園部円山古墳からは金銅装大刀や馬具が出土し

た。六十谷2号墳では埴輪列・葺石が確認されており、4世紀末の前方後円墳で紀ノ川下流域北岸において最古の古墳の一つである。八王子山古墳群は前方後円墳3基を含む約20基の古墳群で構成されている。

(3) 岩橋千塚古墳群

岩橋千塚古墳群の概要

岩橋千塚古墳群は明治時代以降たびたび調査が行われており、古墳群の範囲についてはその都度認識が変化してきた。和歌山県教育委員会が発行している『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』では、岩橋山塊西寄りの古墳が群在する前山A地区・前山B地区・大日山・大谷山・井辺地区に寺内地区の一部と天王塚古墳を足した範囲を岩橋千塚古墳群の範囲としており、古墳総数は472基である。

広く認識されている岩橋千塚古墳群の範囲は、地形区分から花山地区(84基)・大谷山地区(23基)・大日山地区(53基)・前山A地区(152基)・前山B地区(290基)・和佐地区(14基)・井辺前山地区(88基)・井辺地区(28基)・寺内地区(88基)・山東地区(28基)の10地区(合計848基)に区分できる。

特別史跡岩橋千塚古墳群の指定範囲は、前山A地区・前山B地区・大谷山地区・大日山地区の4地区が大部分を占めており、東西約1300m、南北約700m、総面積619,538.51㎡の範囲に430基を越す古墳が密集している。

岩橋山塊北側の平野部の地名が「岩橋」であり、この地域に面した山塊北斜面を岩橋前山と呼んでおり、大正7年(1918)から和歌山県によって調査された範囲を前山A地区、その西を前山B地区と呼称している。前山A地区では、小型の前方後円墳や方墳が多数確認されている。

前山B地区は、岩橋千塚古墳群の中で古墳の密度が最も高い地区である。岩橋山塊主稜線上には將軍塚・知事塚・郡長塚といった大型の前方後円墳が並び、尾根と標高20～150mの緩斜面に円墳が群集する。

大谷山地区は、標高約132mの大谷山の山頂から北斜面に5世紀末～6世紀前半の前方後円墳、円墳が分布している。大谷山山頂には南側に造り出しをもつ全長80m、墳長68mの前方後円墳の大谷山22号墳が築かれ、標高約86mの斜面地に初期の岩橋型横穴式石室をもつ大谷山6号墳が築かれている。

大日山地区は、標高約141mの大日山頂に全長105m、墳長86mの前方後円墳の大日山35号墳を中心に、前方後円墳、円墳が分布し、東に隣接する前山B地区とは谷筋などで区切られている。大日山35号墳は東西の造り出しから出土した多くの埴輪の中に両面人物埴輪や翼を広げた鳥形埴輪など独自性の強い埴輪が認められる。

このように岩橋千塚古墳群では、岩橋山塊の最高所と東西方向の主稜線上に大型の前方後円墳が造られ、そこから派生する南北方向の尾根から裾部にかけて中・小型の前方後円墳や円墳が造られている。

岩橋千塚古墳群での古墳の築造は4世紀末に始まり、標高約77mの花山山頂に前方後円墳の花山8号墳が築かれ、6世紀初頭まで花山地区が古墳群の中心であった。その他の地区では、5世紀前半に大谷山39号墳や寺内63号墳などの円墳や、5世紀中頃に前山A地区で方墳が築造されるが活発ではなかった。その後、花山地区の南方に連なる大谷山地区には大谷山22号墳、大日山地区には大日山35号墳、井辺前山地区には井辺八幡山古墳といった6世紀前半の大型の前

方後円墳が造られ、その周辺に中・小型古墳が築かれて群集墳が形成される。6世紀中頃には、前山A・B地区においても中・小型古墳が密集して築造される。6世紀中頃以降の首長墓は墳長88mの天王塚古墳、岩橋山塊主稜線上に位置する墳長42mの將軍塚古墳、前方後円墳の築造が停止した後の6世紀後半頃の大型円墳である寺内57号墳、大日山南斜面に位置する7世紀初頭の方墳である井辺1号墳と続き、7世紀後半頃には岩橋千塚古墳群において古墳の築造が終了する。

このように岩橋千塚古墳群は長期間にわたり、岩橋山塊という同一墓域に大型の前方後円墳から中・小型の前方後円墳、円墳、方墳まで、多様な規模と形態の古墳が築造されるという特徴がある。

また、岩橋千塚古墳群は埋葬施設にも特徴があり、粘土槨、箱式石棺、竪穴式石室、横穴式石室など多様な埋葬施設が用いられている。特に、結晶片岩の板石を積み上げて石室を構築し、石柵・石梁をもつ岩橋型横穴式石室は岩橋千塚古墳群を中心に分布する特徴的な石室である。また、一墳丘多葬が中・小型の古墳に認められることも大きな特徴である。

岩橋千塚古墳群は、その独自性から紀ノ川下流域の在地勢力により築かれた古墳群であると考えられる。大型古墳の被葬者は、地域首長に比定され、中・小型古墳の被葬者は、地域首長の支配体制に組み込まれた下位の階層の集団と考えられる。これらの古墳間の被葬者たちは、地域首長を頂点とした強い結びつきをもった同族集団と考えられ、文献の記述における豪族「紀氏」との密接な関わりが想定される。

岩橋千塚古墳群の調査

江戸時代には、岩橋千塚古墳群の周辺は紀州藩附家老の安藤家の領地となっており、天保10年(1839)に編纂された『紀伊続風土記』の岩橋村の項に「村の南山に古墳の跡多し誰の墳なるや詳ならず」と記載されるなど存在が知られていた。

明治39年(1906)に、東京帝国大学の坪井正五郎と交友のあった紀州徳川家の当主・徳川頼倫が古墳群の踏査を行っており、この翌年の明治40年(1907)には、東京帝国大学人類学教室の大野雲外が、岩橋千塚古墳群で出土した装飾付き須恵器や天王塚古墳・將軍塚古墳・前山A17号墳の石室構造について報告している。前山A17号墳では発掘調査が実施され、箱式石棺の副室から衝角付冑が出土した。明治44年(1911)には、イギリス人のN.G.マンローが『Prehistoric Japan』で岩橋千塚古墳群の石室を海外に紹介している。この頃、岩橋千塚古墳群の石室や副葬品が広く知られるようになるとともに、盗掘も行われるようになっていった。

大正7年(1918)からは、和歌山県が岩橋千塚第一期調査を行っている。東京帝国大学の黒板勝美の指導のもと岩井武俊・田澤金吾らが前山A地区を調査し、大正10年(1921)に『和歌山県史跡名勝天然記念物調査会報告書第一輯』として報告している。この報告には前山A地区の古墳分布図のほか、古墳の図面と写真が多数掲載されている。報告された古墳は前山A46号墳や前山A67号墳など27基にのぼり、このうち11基の古墳は、現在紀伊風土記の丘の石室公開古墳として活用されている。

岩橋千塚古墳群は、当時の西和佐村の共有林で現在の前山A・B地区にあたる範囲が昭和6年(1931)7月31日、内務省告示第275号をもって史跡指定を受けている。昭和7年(1932)に刊行された『和歌山県史跡名勝天然記念物調査会報告第十二輯』には、大日山35号墳の石室に大日如来が祀られ、多くの参拝者が出入りしていたことが記述されている。また、東方隣接地の整

地中に石室が発見され、石室内から鏡などが出土したと報告されているが、大日山 35 号墳との関係は不明である。

第二次世界大戦の終わる昭和 20 年頃には防空壕と考えられる溝の掘削などにより古墳の破壊が進行している。戦後間もない昭和 23 年頃には食糧難による岩橋千塚古墳群の開墾計画が持ち上がったが、田中敬忠・宮田啓二氏らの尽力により古墳群は保存された。古墳群の保存運動として全国でも初期の例として知られ、その後既史跡指定地も昭和 27 年（1952）3 月 29 日に特別史跡に指定されている。しかし、昭和 30～40 年代になると、岩橋千塚古墳群周辺では市街化が進み、古墳群は存亡の危機に立たされた。市街地に近い花山・大谷山・井辺前山等の地区では、開発と文化財保護の折り合いが付かず、花山 10 号墳や花山 44 号墳、井辺前山 6 号墳など岩橋千塚古墳群の主要な前方後円墳までもが消滅している。

このような中で、和歌山市教育委員会は関西大学・同志社大学に委嘱して、古墳群の実態調査に乗り出した。調査成果は『岩橋千塚』や『井辺八幡山古墳』にまとめられ、古墳の分布や、主要古墳の規模・形状や石室、出土遺物等が紹介された。また、和歌山県教育委員会では昭和 44 年（1969）に特別史跡岩橋千塚古墳群の県有地化を進め、昭和 46 年（1971）8 月に和歌山県立紀伊風土記の丘として開園した。紀伊風土記の丘開園後の昭和 47～48 年（1972～1973）には、隣接する大谷山地区において粘土槨をもつ大谷山 39 号墳の調査や初期の横穴式石室をもつ大谷山 6 号墳などの調査を実施した。また、昭和 50 年度には紀伊風土記の丘園内にて、花木園・花木園東地区の発掘調査と墳丘の復元整備を行っている。昭和 63 年（1988）には、特別史跡の追加指定が行われ、周辺地の古墳の保存が図られた。

平成 7～10 年度には、特別史跡岩橋千塚古墳群の周辺部において古墳の分布踏査と発掘調査が行われ、岩橋千塚全体の把握が進み、大谷山 12～17・38 号墳の周辺は平成 12 年度に特別史跡に追加指定された。

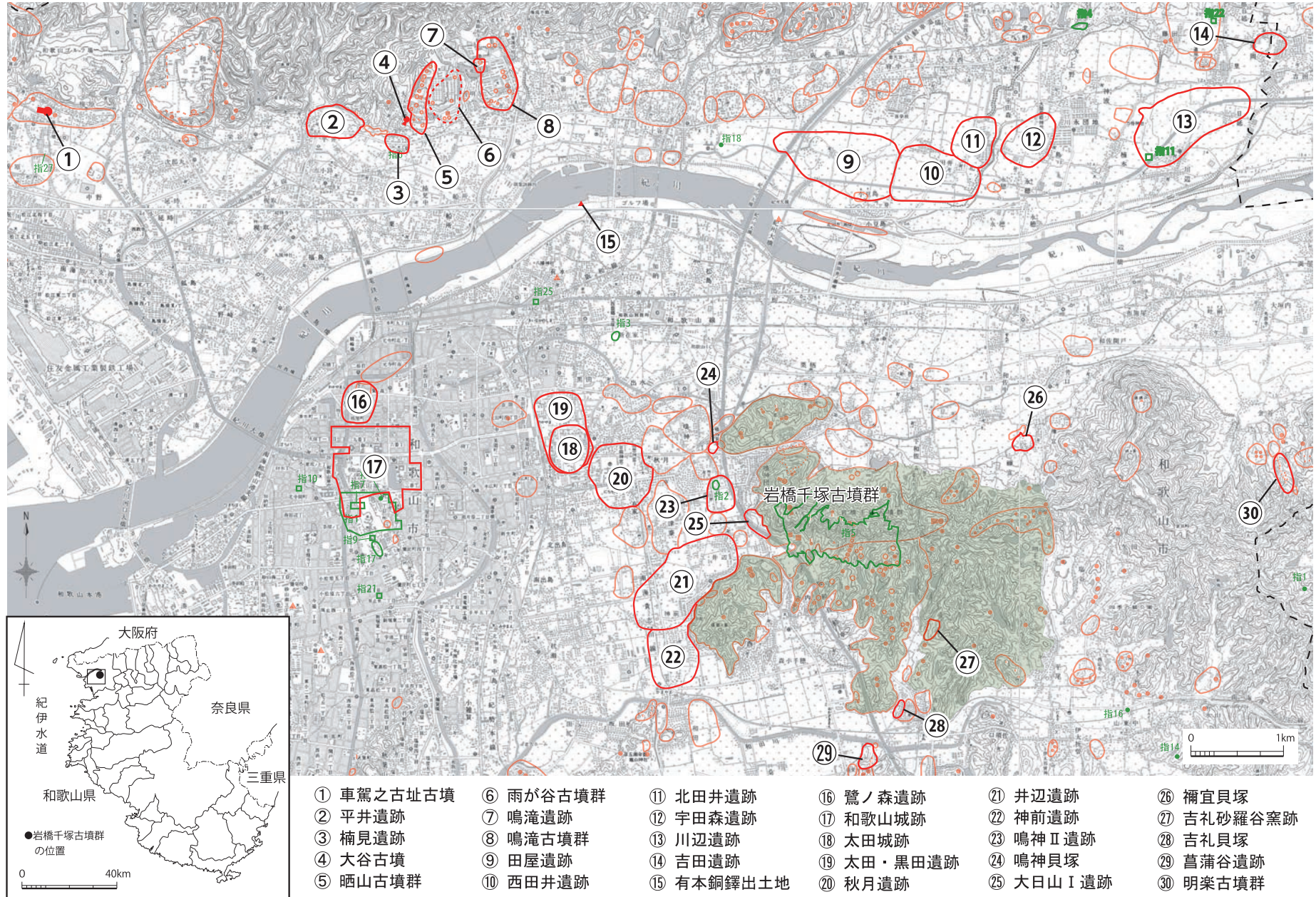
和歌山県では、岩橋千塚古墳群の保存と活用をより充実させるために特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業を実施している。平成 15 年度から平成 26 年度までの第 1 期整備では、大日山 35 号墳、前山 A 2 号墳、前山 B 41 号墳、前山 A 67 号墳、前山 A 13 号墳、前山 A 17 号墳、前山 A 9 号墳、前山 A 58 号墳の発掘調査及び整備と、知事塚古墳を含む 9 基の古墳の測量を実施した。また、崩落が激しい石室の埋戻し及び修景、支障木の伐採、統一したサインの設置、石室照明の設置、排水路の改修等を実施した。

平成 26・27 年度には特別史跡指定範囲外であった大谷山 22 号墳及び天王塚古墳の発掘調査が実施され、両古墳は平成 28 年度に特別史跡へ追加指定された。また、天王塚古墳については、今後の整備方針策定のための情報収集を目的として平成 29 年度に横穴式石室の再発掘調査と墳丘の発掘調査を実施している。

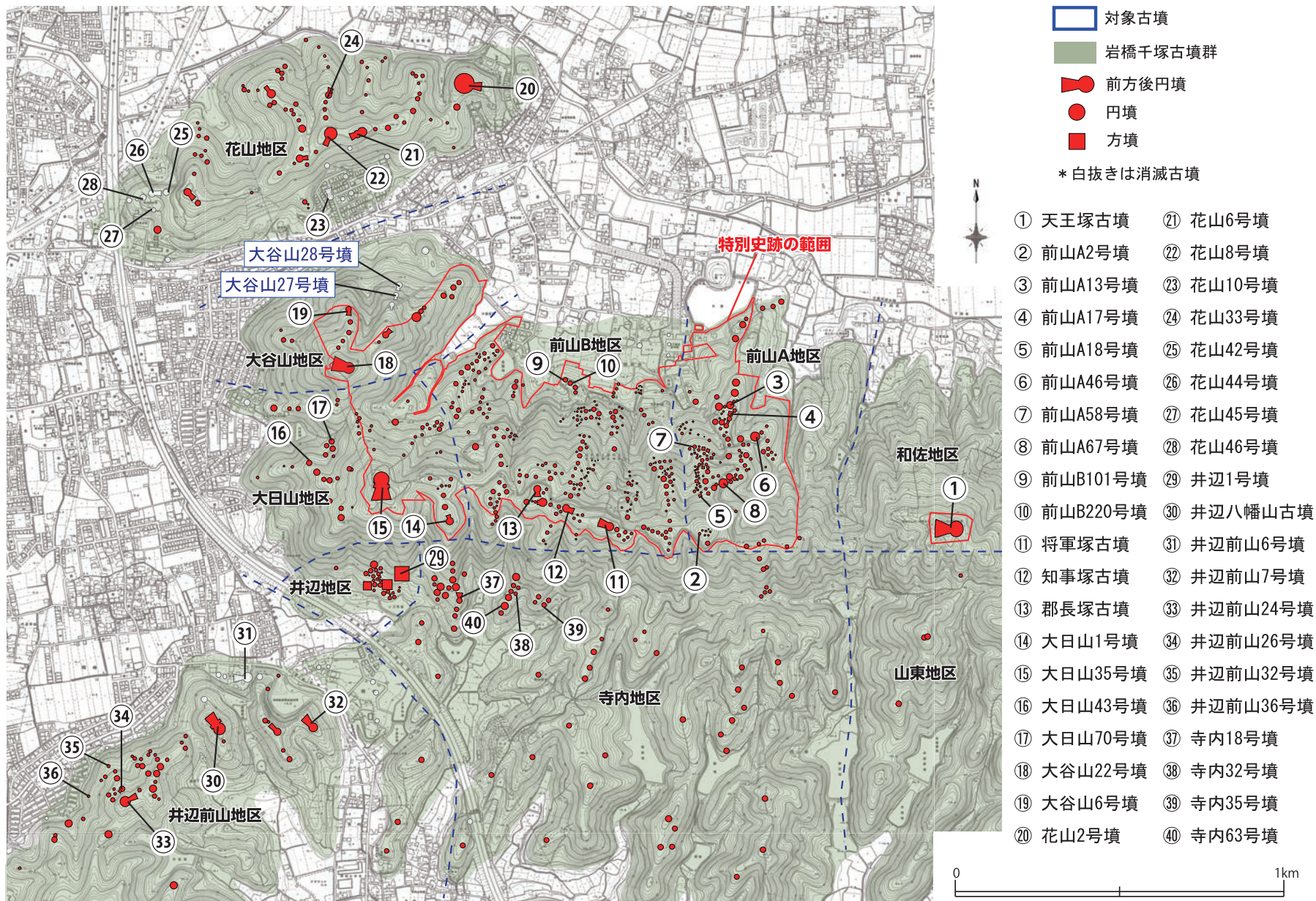
平成 27 年度からの第 2 期整備では、第 1 期整備に引き続き崩落が激しい石室の埋戻し及び修景、支障木の伐採、排水路の改修等を実施している。

【引用・参考文献】

- 金谷克巳 1955 『紀伊の古墳 1』 紀伊考古学研究会
金谷克巳 1956 『紀伊の古墳 2』 綜藝舎
金谷克巳 1960 『紀伊の古墳 3』 日本考古学研究会
関西大学文学部考古学研究室 1967 『岩橋千塚』
関西大学考古学研究室編 1967 『花山西部地区古墳』
和歌山県文化財研究会 1967 「和歌山市鳴滝古墳群の調査」 『和歌山県文化財学術調査報告第二冊』
大野嶺夫 1971 「明楽山山塊の古墳群について」 『古代学研究』 62
関西大学考古学研究室編 1972 『和歌山市における古墳文化』
同志社大学考古学研究室編 1972 『井辺八幡山古墳』
和歌山県教育委員会 1972 『近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財調査報告』
同志社大学文学部文化学科考古学研究室 1973 『和歌山市楠見雨が谷古墳群調査報告』
和歌山県教育委員会 1978 『山崎山古墳群緊急発掘調査報告書』
紀伊風土記の丘管理事務所 1981 『岩橋千塚とその周辺』
和歌山県史編纂委員会 1983 『和歌山県史』 考古資料
和歌山県史編纂委員会 1993 『和歌山県史』 原始・古代
和歌山県教育委員会 1984 『鳴滝遺跡発掘調査報告書』
和歌山県教育委員会 1984 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』
和歌山県教育委員会 1987 『広域遺跡群詳細分布調査 1 井辺前山古墳群とその関連遺跡』
園部円山古墳保存会 1989 『和歌山市指定文化財（史跡）園部円山古墳調査概報』
財団法人和歌山県文化財センター 1990 『田屋遺跡』
和歌山市教育委員会 1991 『六十谷古墳群発掘調査報告書』
和歌山市教育委員会 1993 『車駕之古址古墳 発掘調査概報』
財団法人和歌山県文化財センター 1994 『秋月遺跡』
和歌山県教育委員会 2000 『岩橋千塚周辺古墳緊急確認調査報告書』
大野嶺夫 2003 『岩橋千塚ところ・どころ』
和歌山県教育委員会 2005 『緊急雇用対策特別基金事業に係る発掘調査資料整理概報』
財団法人和歌山県文化財センター 2006 『楠見遺跡』
和歌山県立紀伊風土記の丘 2008 『岩橋千塚』
和歌山県教育委員会 2010 『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 1』
和歌山県教育委員会 2013 『大日山 35 号墳発掘調査報告書－特別史跡岩橋千塚古墳群発掘調査・保存整備事業報告書 2－』
和歌山県教育委員会 2015 『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 3
－大日山 35 号墳・前山 A 13 号墳、前山 A 58 号墳発掘調査報告書－』
和歌山県教育委員会 2016 『大谷山 22 号墳、天王塚古墳－特別史跡岩橋千塚古墳群追加指定に伴う発掘調査報告書－』
和歌山県立紀伊風土記の丘 2016 『岩橋千塚とその時代－紀ノ川流域の古墳文化－』
和歌山県教育委員会 2017 『特別史跡岩橋千塚古墳群－大谷山 4・5・6・39 号墳発掘調査報告書－』



第1図 周辺遺跡分布図



第2図 特別史跡岩橋千塚古墳群分布図

第3章 大谷山27号墳

第1節 発掘調査

(1) 調査の概要

大谷山27号墳は、岩橋千塚古墳群の大谷山地区にあり、大谷山22号墳が位置する大谷山山頂（標高約132m）から、北東に派生する尾根上の緩斜面に立地する。後円部を北東に向けた墳長約22mの前方後円墳で、埋葬施設は後円部に構築された横穴式石室である（第15図）。古墳の標高は、前方部頂で90.73m、後円部頂で約89.75mである。同一尾根上には、大谷山27号墳の南側に大谷山26号墳、北側に大谷山28号墳が立地している。

発掘調査では、墳形及び埋葬施設の確認を目的としてトレンチ調査を行った（第16図）。

トレンチは、墳丘の確認を目的として、後円部から前方部にかけて墳丘主軸方向のトレンチを設定し（後円部北トレンチ・墳丘主軸トレンチ）、さらにこれに直交する方向のトレンチを後円部に設定した（後円部西トレンチ・後円部東トレンチ）。このうち後円部東トレンチは、横穴式石室及び前庭部の確認も目的としている。また、前方部前端的確認を目的として前方部東西トレンチを設定し、さらに西側くびれ部にもトレンチを追加して設定した。これらのトレンチは、調査の進捗に応じて拡張をおこなった。

横穴式石室は、人為的な攪乱を受けて著しく毀損しており、特に羨道は基底石の大部分が取り除かれていた。横穴式石室の調査は、石室内の崩落土等を除去して玄室及び羨道を検出し、床面まで掘削した。その後、各壁体の石積みを除去して排水溝の検出を行った。また、平面図、立面図等の記録作成を行った。

墳丘は、前方部墳頂の一部で攪乱が認められるものの、調査所見によれば地形改変は少なくおおむね旧状を保っていたとみられる。

墳丘の調査では、前方部東西トレンチで円筒埴輪列を、東側くびれ部付近で円筒埴輪列と須恵器大甕が検出され、一部の円筒埴輪は基底部付近が樹立した状態で検出された。これらの円筒埴輪列については、調査時において個体識別のために各々の円筒埴輪に番号を付与している。しかし前方部東西トレンチと東側くびれ部では、各々の埴輪列ともに1番から順に番号を付与していたことから、本報告においては両者の混同を回避するために、前方部1号・、東側くびれ部1号・というように調査位置を番号に冠して呼び分けることとした。

円筒埴輪列については出土状況図を作成し、原則としてすべての取り上げを行っている。ただし、東側くびれ部で検出された須恵器大甕については、調査中に何者かによって持ち去られ所在不明となっており、墳丘測量図における出土位置記録を除いて、出土状況を示す写真及び図面などの記録が残されていない。

また、円筒埴輪についても、前方部1・2・5号の基底部3個体と東側くびれ部の基底部1個体（欠番個体）については写真及び出土状況図等の記録が残されているものの、当該資料は調査時ないし調査後に所在が不明となっている。このため、本報告では当該資料の図化作業を行うことができなかった。

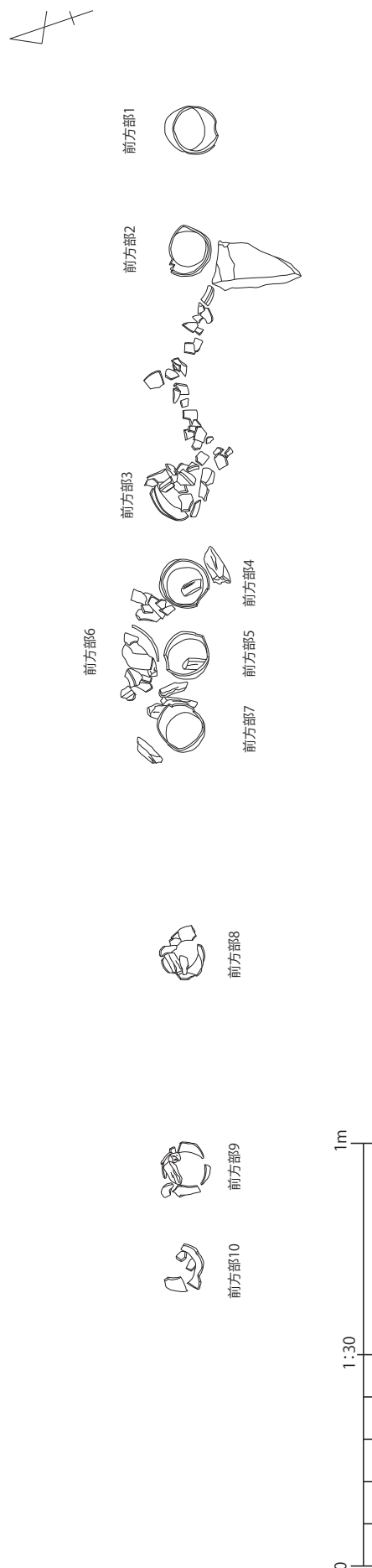
(2) 墳丘

前方部 前方部は、前端付近に設定した前方部東西トレンチにおいて、樹立する円筒埴輪列を確認した（第3図）。これら前方部前端の円筒埴輪には前方部1号から10号の番号を付与した。このうち6号円筒埴輪は、5号の北側で出土し、体部から口縁部の複数個体の破片で基底部を含まないことから、樹立する円筒埴輪ではないと判断される。円筒埴輪基底部付近の標高は、前方部1号で89.90 m、前方部3号で90.21 m、7号で90.32 m、8号で90.39 m、10号で90.34 mであり、おおむね西側に向かって標高を上げている。

調査時の所見によれば、樹立する円筒埴輪の基底部内側には礫が検出されており、また周囲を囲うように複数の礫が据えられたものがあった。なお、前方部前端では10号円筒埴輪よりも西側において埴輪の樹立は確認できなかったが、本来は連続して樹立していた可能性がある。

墳丘主軸上に設定した墳丘主軸トレンチは、長さ約13 mの調査区である。西壁土層断面では（第5図）、2層の性格は不明であるが、3～8層と10層が後円部付近の盛土、9層が前方部付近の盛土と考えられる。12層は調査時の所見がないが、周辺調査区の土層堆積状況から地山ないし岩盤である可能性がある。墳丘は、南から北へ緩やかに標高を下げる地形に盛土を施しており、前方部墳頂は後円部に向かって緩やかに傾斜していたとみられる。

東側くびれ部 東側くびれ部では、樹立する円筒埴輪列と須恵器大甕が検出され、このうち円筒埴輪は4個体分の基底部が確認された（第4図）。そのうち2個体が樹立した状態で検出され、他の2個体は破損していたものの出土状況から原位置を大きくは移動していないものと考えられる。



第3図 大谷山27号墳 前方部前端 円筒埴輪列平面図 (S=1/30)

これら円筒埴輪については北から、東側くびれ部1号、欠番個体、2号、3号の順に番号を付与している。円筒埴輪は、1号と欠番個体の2個体が後円部側に、2号と3号が前方部側に樹立されたと推定される。

なお、2号と3号の間で円筒埴輪の破片がまとまって出土し、普通円筒及び朝顔形埴輪の複数個体の破片を含んでいた（第7図6～10、第8図12～14）。このため、付近には朝顔形埴輪が樹立されていた可能性が高く、円筒埴輪列には、普通円筒の間に朝顔形埴輪が組み込まれ樹立していたものと考えられる。

須恵器の大甕は、測量図の記録から1号円筒埴輪の西側で出土しており、出土位置は後円部側とみられる。くびれ部における大甕の出土は重要な情報ではあるが、前述のように調査中に所在不明となり詳細な記録が残されていないことから、出土状況を含めて検討することができない。なお、円筒埴輪列付近では、甕の胴部片（第12図80）と、壺の口縁部片（79）が出土している。

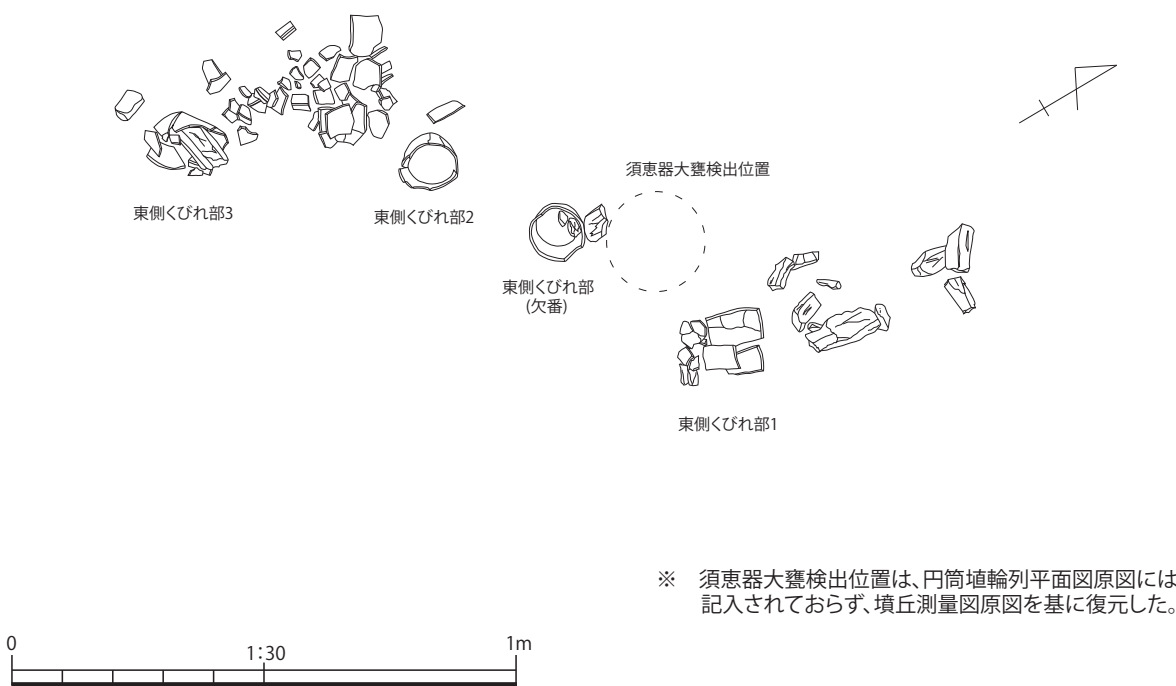
後円部 後円部は、後円部北トレンチ及び後円部西トレンチで土層堆積状況を確認した（第5図）。

後円部北トレンチでは、岩盤が段状に整形された後に盛土が施される状況が確認される。岩盤は、22層の北端付近を境に北側へ標高を下げ自然地形に至るとみられ、当該付近が墳丘裾と考えられる。その標高は87.55mである。

後円部西トレンチは、29層の調査時の所見がないが、写真及び後円部北トレンチ土層断面との比較から岩盤と考えられ、その上部に盛土が施される。27層の西端付近が墳丘裾に相当すると考えられ、その標高は88.35mである。

以上の各調査区における所見から、大谷山27号墳の墳丘は以下のように復元される。

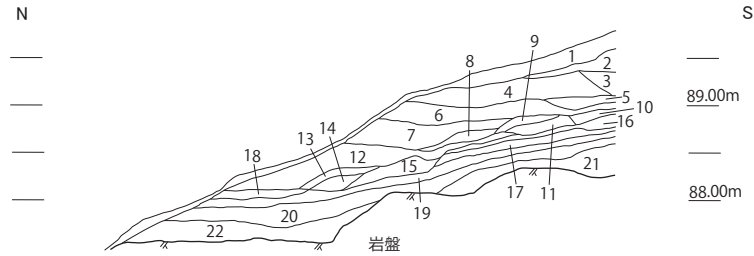
後円部の規模は、後円部各トレンチの土層断面から推測される墳丘裾から、直径約14m前後と考えられる。また、前方部については墳丘裾の位置を確認できる記録がないが、前方部前端付



※ 須恵器大甕検出位置は、円筒埴輪列平面図原図には記入されておらず、墳丘測量図原図を基に復元した。

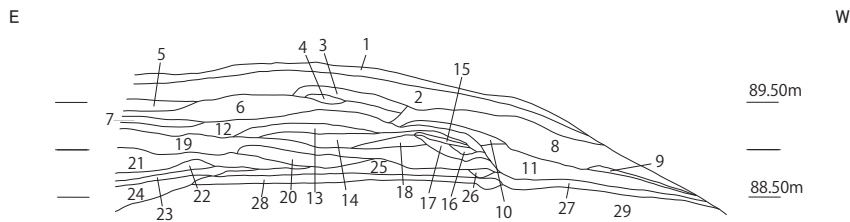
第4図 大谷山27号墳 東側クビレ部 円筒埴輪列平面図(S=1/30)

- | | |
|-----------------------|-------------------------------------|
| 1 腐植土 | 12 淡黄褐色土(填丘面に近くなるにしたがって角礫が大きく、多くなる) |
| 2 淡黄褐色土(角礫少量含む) | 13 黒色バンド |
| 3 淡黄褐色土(角石を多く含む) | 14 褐色土(土石混合) |
| 4 赤褐色土(小角礫を含む) | 15 角礫層(黄褐色) |
| 5 淡褐色土(角礫含む) | 16 黒色バンド |
| 6 赤褐色土(上層に比してやや青みがある) | 17 黄褐色土 |
| 7 赤褐色土(上層に比してやや黄み強い) | 18 褐色土(角礫含まない) |
| 8 赤黄褐色土(細かい角礫含む) | 19 黒色バンド |
| 9 淡黄褐色土(角礫含む) | 20 淡黄褐色土(角礫含まない) |
| 10 赤黄褐色土(角礫含まない) | 21 赤黄褐色土(角礫少量含む) |
| 11 淡黄褐色土(角礫含まない) | 22 赤黄褐色土 |



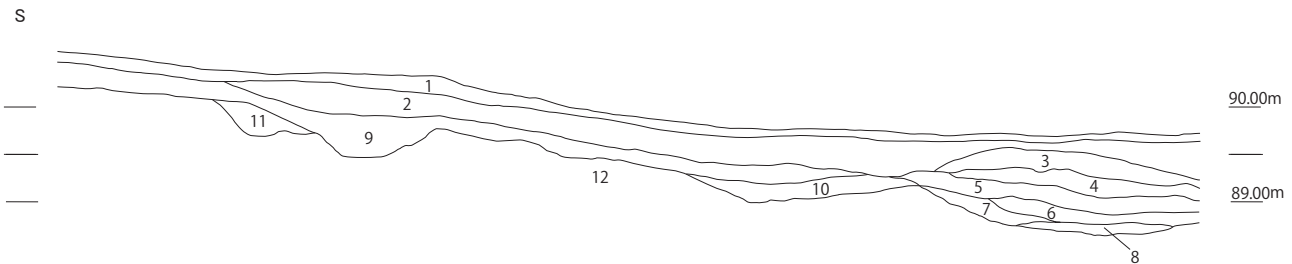
後部北トレンチ東壁

- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| 1 腐植土 | 15 粘質暗褐色土(角礫を含まない) |
| 2 粘質黄褐色土(角礫含む。比較的大きいが部分的) | 16 粘質赤褐色土 |
| 3 粘質淡黄褐色土(角礫をほとんど含まない) | 17 粘質淡褐色土(部分的に角礫を含む) |
| 4 粘質赤褐色土(3層に類似するが赤色のやわらかい石片を含む) | 18 粘質赤黄褐色土 |
| 5 粘質淡黄褐色土(角礫をほとんど含まない) | 19 粘質赤褐色土(角礫層を非常に多く含む) |
| 6 粘質淡黄褐色土(細かい角礫含む。青みあり) | 20 粘質淡黄褐色土(角礫を含まない) |
| 7 粘質淡褐色土(角礫を含まない) | 21 粘質赤黄褐色土(細かい角礫を含む) |
| 8 粘質赤黄褐色土(角礫が多く含む。しまりなし) | 22 粘質淡黄褐色土(細かい角礫を含む) |
| 9 粘質暗褐色土 | 23 粘質暗褐色土(角礫は含まない) |
| 10 粘質黄褐色土(やや青味あり。角礫多量に含む) | 24 (記載なし) |
| 11 粘質黄褐色土(やや赤味あり。角礫少量含む) | 25 粘質淡黄褐色土(角礫を多く含む。やや赤味あり) |
| 12 粘質赤黄褐色土(赤褐色土に黄褐色土が混じる。角礫多く含む) | 26 (記載なし) |
| 13 粘質赤褐色土(角礫多く含む) | 27 粘質黄褐色土(角礫を少量含む) |
| 14 (記載なし) | 28 粘質黒褐色土(角礫は含まない) |
| | 29 (記載なし) |

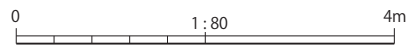


後部西トレンチ南壁

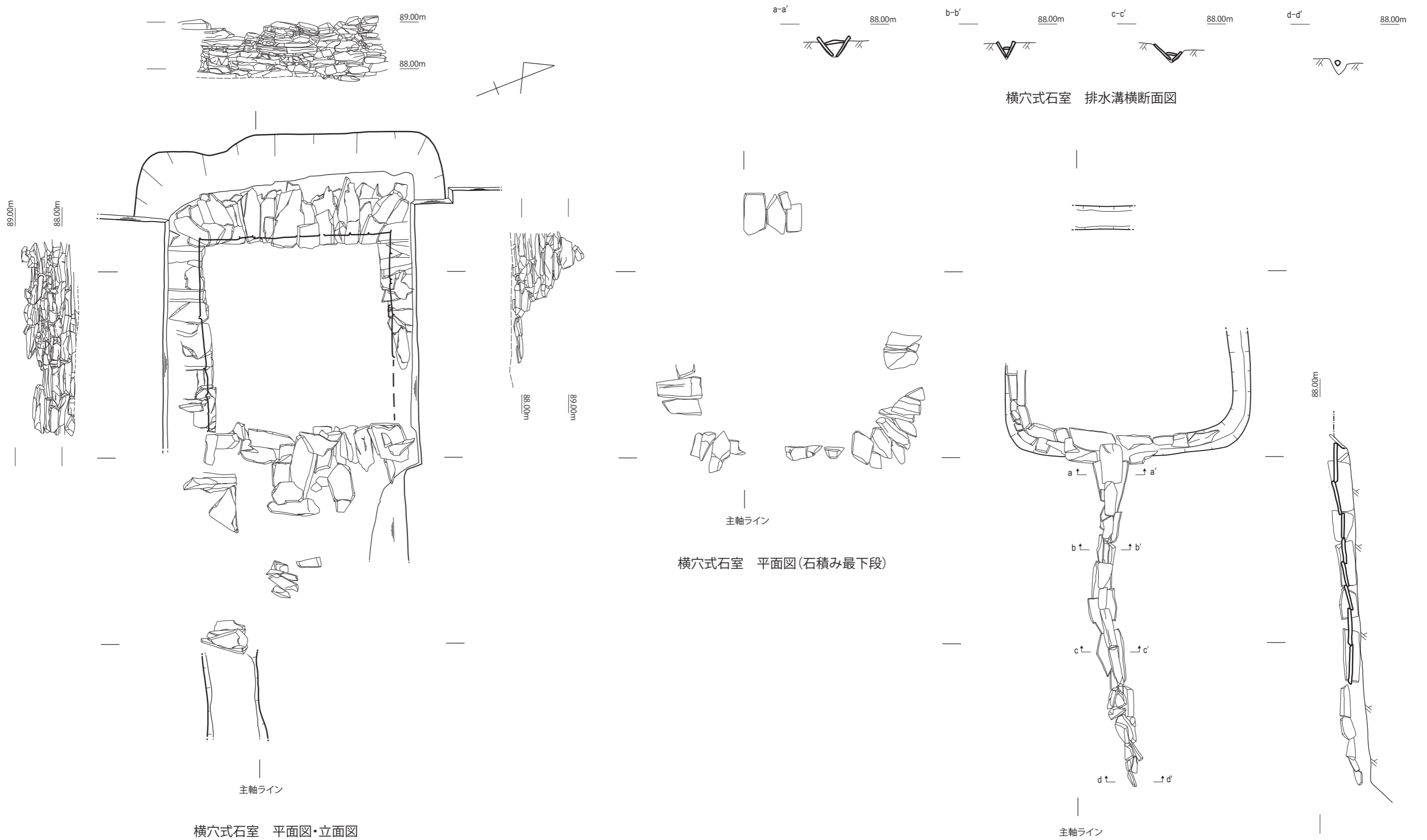
- | | |
|--------------------|------------------------|
| 1 腐植土 | 7 黄褐色土(黒みをおびる。角礫を含まない) |
| 2 淡黄褐色土(角礫少量含む) | 8 黄褐色土(角礫を含まない) |
| 3 黄褐色土(細かい角礫を少量含む) | 9 黄褐色土(角礫を含む) |
| 4 黄褐色土(角礫を含む) | 10 赤黄褐色土(角礫多くを含む) |
| 5 赤褐色土(角礫を非常に多く含む) | 11 赤褐色土(角礫を含む) |
| 6 暗黄褐色土(角礫を含まない) | 12 (記載なし) |



墳丘主軸トレンチ西壁



第5図 大谷山27号墳 調査区土層断面図 (S=1/80)



第6図 大谷山27号墳 横穴式実測図(S=1/40)

近の墳丘裾は、前方部東西トレンチで確認された円筒埴輪列よりもやや南側に位置していたと推定される。

円筒埴輪は、東側くびれ部で検出された円筒埴輪列の配置から推測すると、後円部で埴輪が検出されなかった範囲においても、本来は1号円筒埴輪から連続して後円部をめぐるように樹立していた可能性がある。また、3号円筒埴輪から前方部前端方向へも、本来は円筒埴輪が連続して樹立していたとみられ、前方部前端の円筒埴輪列へと接続すると考えられる。

以上の情報と、墳丘測量図の等高線から推測される墳丘主軸や前方部の形状を加味して復元される大谷山27号墳の平面形態及び円筒埴輪配列は、第14図のとおりである。この復元に基づけば、大谷山27号墳は、後円部径約14m、くびれ部から前方部前端までの長さが約8.5m、全長約22mの前方後円墳と推定される。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は、後円部の中央よりやや東よりに構築された横穴式石室である(第6図)。石室は東南東方向に開口する。石室主軸は、墳丘主軸に対しておおむね直交すると考えられる。また、玄室奥壁の西側で岩盤の落ち込みが確認され、墓坑の堀方と考えられることから、後円部付近の岩盤を整形して、墓坑を構築していることが明らかとなった。

石室は、前述のように著しく毀損して内部には崩落後の堆積土が確認された。玄室は天井石を含む上部が欠失しており、奥壁及び側壁の壁体の一部が確認された。壁体の残存高は奥壁で約1.2mである。羨道は基底部付近の一部を除き大部分の石材が取り除かれていた。

石室は玄室と羨道から構成され、また遺存状況が不良で詳細は明らかにできないが玄室前道をもつ可能性がある。また、前壁の両側に袖部をもつ両袖式の構造であるが、左袖部に比して右袖部は短く、玄室前道ないし羨道は奥壁からみて右寄りに接続する。

玄室の法量は、長さ2.1m、奥壁幅2.04mで正方形に近い平面形を呈している。また、前壁の毀損状況が著しいが、右袖部は約0.3m、左袖部は約1.3m以上と推定される。羨道長は不明であるが、残存する右側壁の石積みより2.3m以上と考えられる。玄室で検出した床面の標高は、奥壁で87.90～87.92m、右側壁で87.82m～87.86m、左側壁で87.89mである。

奥壁及び側壁は、扁平な石材を用いて小口積を主体に各壁体を構築している。ただし、部分的に横長の石材が確認され、一部で平積も併用しているとみられる。例えば、右側壁東端においては、扁平な石材の長軸を石室主軸と平行させており、平積をおこなっていることが平面図及び写真から確認できる。

前壁は、玄門付近の遺存状況が不良であるが、左袖部では小口積を主体とする一方、右袖部で確認された石材は長軸を石室主軸に直交させており平積とみられる。また、この石材は羨道右側壁の壁面ラインよりもやや内側に突出しており、玄門ないし玄室前道を構成する可能性がある。なお、玄室前道基石に相当する石材は確認されておらず、その有無は不明である。

羨道は、右側壁及び左側壁の基底部とみられる石材がわずかに残存する。両側壁より推定される羨道幅は0.4mと著しく狭い。これらの羨道両側壁は、右側壁で一部平積も認められるが、おおむね小口積により壁体を構築していると考えられる。

玄室及び羨道の石室石材を除去した結果、直下で排水溝を検出した。排水溝は玄室の壁体の下部を口の字形にめぐり、羨道左側壁下に位置する排水溝へ接続する。溝は岩盤を断面V字形に整形しており、玄室西半の状況は詳細な調査記録が残されていないが、玄室東半ではこの溝内に

板石をV字形に据えた構造をとる。また、羨道部の排水溝は長さ3.4 mを測り、このうち玄門側から2.8 mまでの範囲はV字形に据えた板石に加え、上部に蓋石を施している。羨道部の排水溝底部の標高は、第6図 a-a' ラインで87.66 m、b-b' ラインで87.61 m、c-c' ラインで87.56 m、d-d' ラインで87.44 mであり、東方向へ緩やかに標高を下げる。排水溝の末端であるd-d' ライン付近より、岩盤は東方向へ大きく標高を下げて傾斜する。

遺物は、玄室床面付近から垂飾金具が1点出土した。また、玄室及び羨道の攪乱土から須恵器及び円筒埴輪片が出土したが、原位置を保つものではないと考えられる。このうち、円筒埴輪は墳丘上に樹立していたものが石室内に転落したものとみられる。須恵器についても、同様のものが含まれる可能性もある。

第2節 出土遺物

(1) 埴輪

埴輪は、円筒埴輪と、家形埴輪、器財埴輪等の形象埴輪が確認された。

円筒埴輪と形象埴輪は、色調は多くが橙色を呈し、一部に明赤褐色のものがあること、胎土に砂粒を多く含み一部に結晶片岩を含むこと、全体的に軟質で表面の摩滅が著しい例が多いことなどの共通した特徴をもつ。

本節では、円筒埴輪については樹立埴輪のほか、包含層出土資料の一部について図化・掲載をおこない、これらの全体的特徴について項目ごとに記述した。また、形象埴輪は器種ごとに各資料の特徴について記述する。なお、各資料の調整、胎土、色調、焼成等の諸属性は、第2表の遺物観察表にまとめた。

円筒埴輪・朝顔形埴輪（第7～10図）

出土した円筒埴輪は、普通円筒と朝顔形埴輪がある。各調査区で出土した円筒埴輪のうち、口縁部形態や調整等の確認できる資料はすべてIV群系円筒埴輪（紀伊型・環畿内南部型）の特徴をもつ。このことから、墳丘に樹立される円筒埴輪は、IV群系埴輪に限られる可能性が高い。

以下、出土した円筒埴輪についての全体的特徴について各属性別に記述する。

①器形・法量

円筒埴輪の全体を復元できた個体がなく、器高や突帯の段数等は不明である。

32は基底部分を欠失するが、口径が復元径36cmで、直線的に開く逆台形を呈する形態と推定され、口縁部は三角形に突出しIV群系埴輪の特徴をもつ。また、残存範囲では二条の突帯が認められ、下方の突帯下には透孔が穿孔される。別個体の基底部分を参考にとると、以下は最下段突帯と基底部がつづく形態と考えられ、推定される器高は45cm前後、3条4段程度の構成をとる可能性がある。

この他、基底部のみが残存する個体では、底部径は、約16～20cmの個体が認められ、特に約18～19cmの個体が多い。普通円筒の口径は、6は復元径31cm、28は復元径32cmで、上述32の復元径36cmとあわせて、口径30cm以上となる個体が多いと推定される。

②調整

器面の摩滅が著しく調整等の観察が困難なものが多いが、外面調整は1次調整にタテハケ、ナメハケを施し、2次調整にヨコハケを施すことを基本とする。ヨコハケは口縁部から体部にかけて施され、下段突帯よりも下位に及ぶ例(36)は少ない。

内面調整は、ユビナデないしナデを基本とするが、タテハケないしナメハケを残す例もある。

また、口縁部付近でヨコハケを施す例（41・42）が確認される。

③基底部調整

基底部の外面調整は、ナデが観察される例が多いが、1次調整のハケメが残存する例もある。また、29・33・37・51等は、倒立して板状工具により押さえたとみられる板オサエが底面に明瞭に認められる。内面調整は、ユビナデが明瞭に認められるものが多く、一部はハケメが残存する。

④突帯

口縁部端部から最上段の突帯までの間隔は、6は8.0cm、28は8.0cm、32は9.4cmである。また、32における1段目と2段目の突帯間隔は、9.5cmである。

底面から下段突帯までの高さは、おおむね約16～17cm前後の一群（2・5・10・12・29）と、約19～20cmの一群（2・11・26）を認めることができる。

突帯の断面形態は、M字状となるもの（3・30・31・32・36）と、台形状を呈するものがあるが、比較的后者が多い。32は強いヨコナデにより明瞭にM字状となり、突出も比較的高い。

⑤口縁部

口縁部は、端部が肥厚して外側に突出するIV群系円筒埴輪の特徴をもつ。これらは、端部内面をヨコナデによりわずかに凹ませ、外面を強いヨコナデにより外方へ突出させることを原則とするが、内面のヨコナデは顕著ではなく外方のみ突出させた例（6・17・18・19）もある。

なお、3・48・49は朝顔形埴輪の口縁部である。

⑦胎土・色調

色調は、橙色～明赤褐色を呈するものを主体とする。胎土は7～10mm前後の結晶片岩や、5mm前後の赤色酸化した砂粒を含むものが多い。

⑧その他

6・17・28・41・46はヘラ記号が認められる。一条の沈線によるもので、波状を呈すると推定される。
形象埴輪（第11図）

形象埴輪は、器財埴輪、家形埴輪があり、その他、器種の特定が困難な形象埴輪がある。

53・54は石見型埴輪ないし盾である。前方部東西トレンチより出土した。いずれも石見型埴輪ないし盾の形象部とみられ形象部ないし盾面には、二条一括の沈線により線刻が施される。文様の構成は不明であるが、直弧文の表現である可能性がある。

55は、家形埴輪とみられ、屋根部の破風の可能性がある。下方の端部は強いヨコナデによって凹む。東側くびれ部より出土した。

56～61は器種の特定の難しい不明形象埴輪である。56は端部に面をもち、蓋の笠部の笠縁付近の可能性がある。57は粘土帯を貼り付けており、馬などの動物埴輪や、人物埴輪である可能性がある。58～61はいずれも小破片であり、各々数条の沈線が確認される。

62～67は形象埴輪の基部である。62～66は前方部東西トレンチから出土し、胎土・色調から同一個体の可能性が高い。67はにぶい横橙色を呈し焼成は堅緻であり、須恵質に近い。外面はヨコナデ後にハケメが施される。色調・胎土の特徴は他の出土埴輪とは異なっている。東側くびれ部から出土した。

68・69は、本調査終了後の表面採集資料であり、大谷山27号墳で採集された可能性があると思われる個体であり参考に掲載した。いずれも蓋の立飾部である。二条一括の沈線により線刻が施されている。

(2) 土器類

土器類は、横穴式石室及び墳丘の各調査区より須恵器が出土した(第12図)。須恵器の器種は、蓋杯、高杯、壺、甕、装飾付須恵器(小壺)が確認される。

70～78は横穴式石室からの出土である。このうち70、71は玄室の攪乱土層から、72は玄室及び羨道の攪乱土層から、また、73～78は羨道の攪乱土層から出土した。横穴式石室は後世の攪乱を受け大きく毀損していたことから、原位置を保つものではないと考えられる。また、79・80は東側くびれ部円筒埴輪列付近より出土した。

70は装飾付須恵器の小壺である。復元口径2.5cm、残存高3.0cmで小壺のなかでも比較的小形であり、口縁部は短く立ち上がり端部を丸くおさめる。装飾付須恵器の器種は不明であるが、岩橋千塚古墳群出土の類例から、装飾付壺ないし高杯形器台である可能性が高い。

71・77・78は高杯である。71は高杯の脚部で、長脚で3方向に透孔をもち、脚端部は屈曲して丸くおさめる。脚端部径6.8cm、残存高8.4cmである。脚部78は4方向に透孔をもち、脚端部は肥厚する。外面はカキメ調整が施される。脚端部径6.8cm、残存高5.0cmである。77は無蓋高杯の杯部である。杯部はやや深く、口縁部と底部の境界に明瞭な突出部をもつ。口径は12.4cmである。

72～74は杯身である。72は口径12.8cmで、口縁部端部は内傾して面をもつ。73は口径12.6cm、器高5.1cmで、口縁部がやや垂直気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。74は口径12.5cmで、比較的厚みがある。口縁部端部は内傾して浅く凹む。

75・76は杯蓋で、いずれも小破片である。稜線がやや丸みをもち突出はにぶい。端部は、75が内傾して浅い凹みを有し、76は内傾して面をもつ。

79は壺の口縁部である。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は不良である。口径は16.5cmで、口縁端部はやや外側に突出する。頸部の中位には浅い沈線が認められる。

80は甕の胴部片で、外面にタタキ成形が、内面には当て具痕が認められる。

以上の須恵器は、高杯78の脚部が陶邑窯跡群における編年のMT15型式期の特徴をもち、また、杯身72～74や杯蓋75・76などはおおむねMT15～TK10型式期の特徴をもつと考えられる。したがって、大谷山27号墳出土須恵器は、MT15型式期からTK10型式期に該当する資料を中心としていると考えられる。

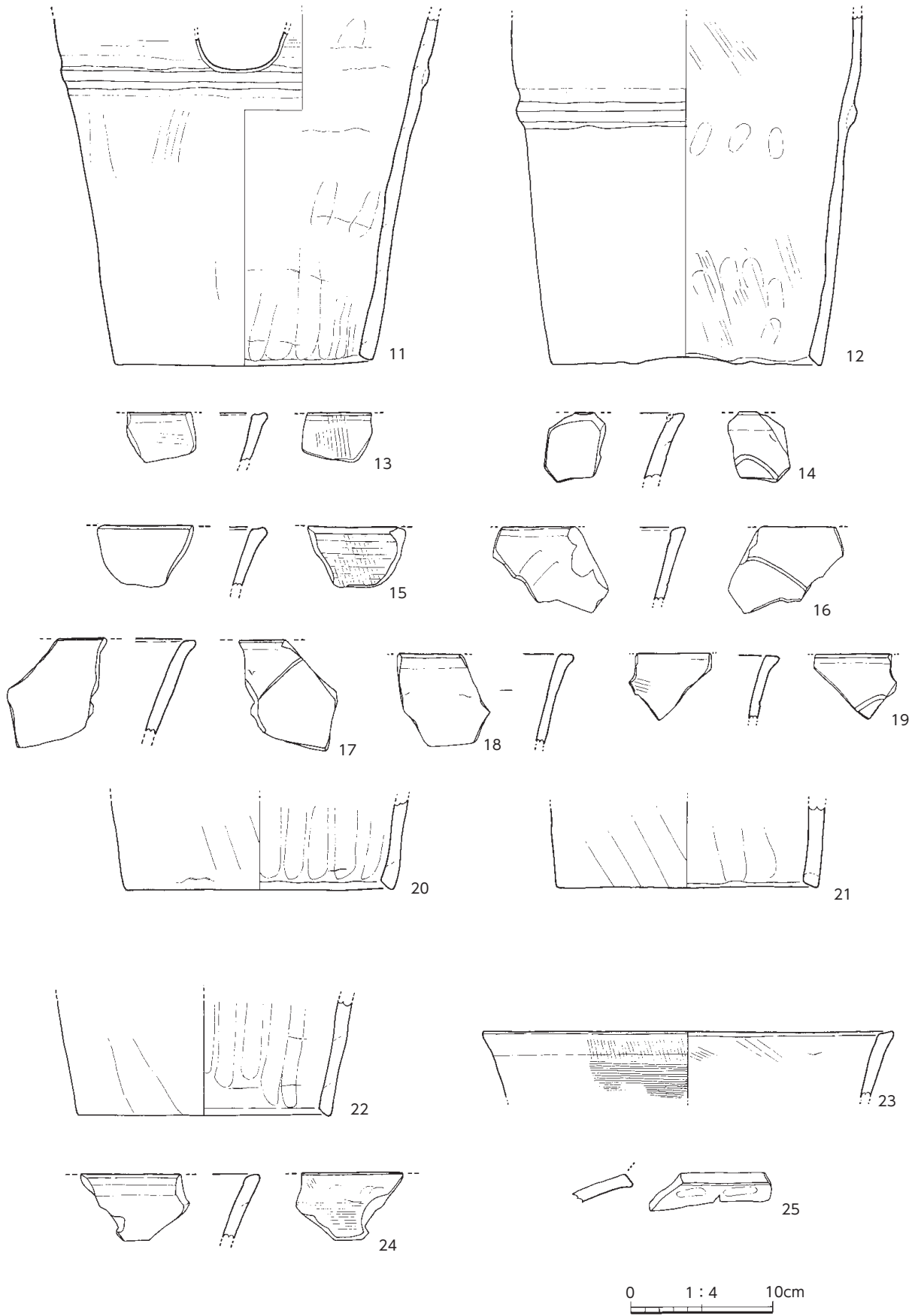
(3) 装身具類

横穴式石室の玄室床面より、垂飾金具が出土した。

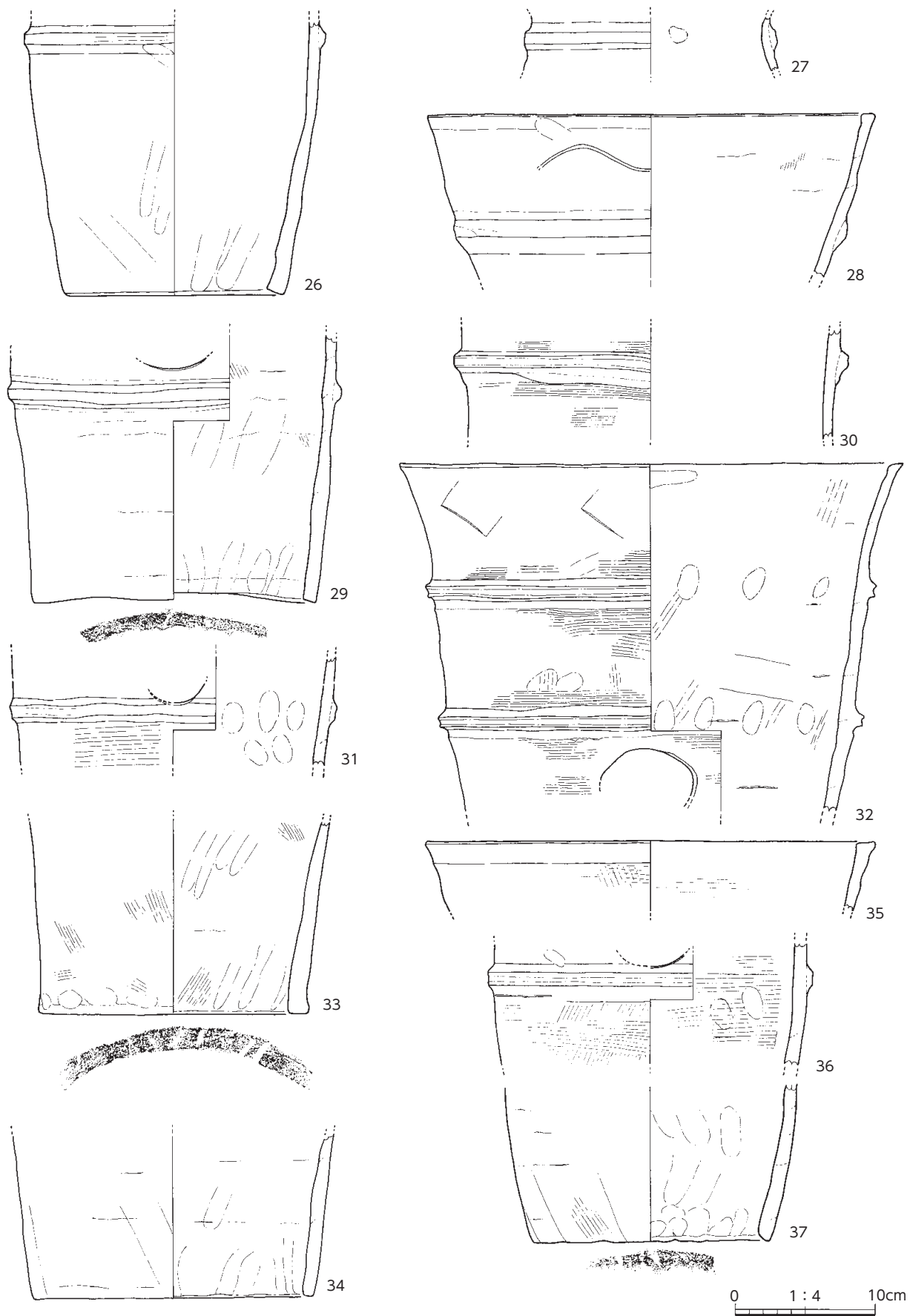
第13図は金製垂飾金具の一部と考えられる。環はやや歪み、合わせ目の位置は一致せず0.5mm程度直径が異なる。両端間にはわずかな隙間がある。また、断面は不正円形で稜をもち、端部付近で細くなる。法量は、外径11.4mm～11.9mm、内径8.8mm～9.4mm、断面径1.2mm～1.4mmで重さ0.58gを測る。



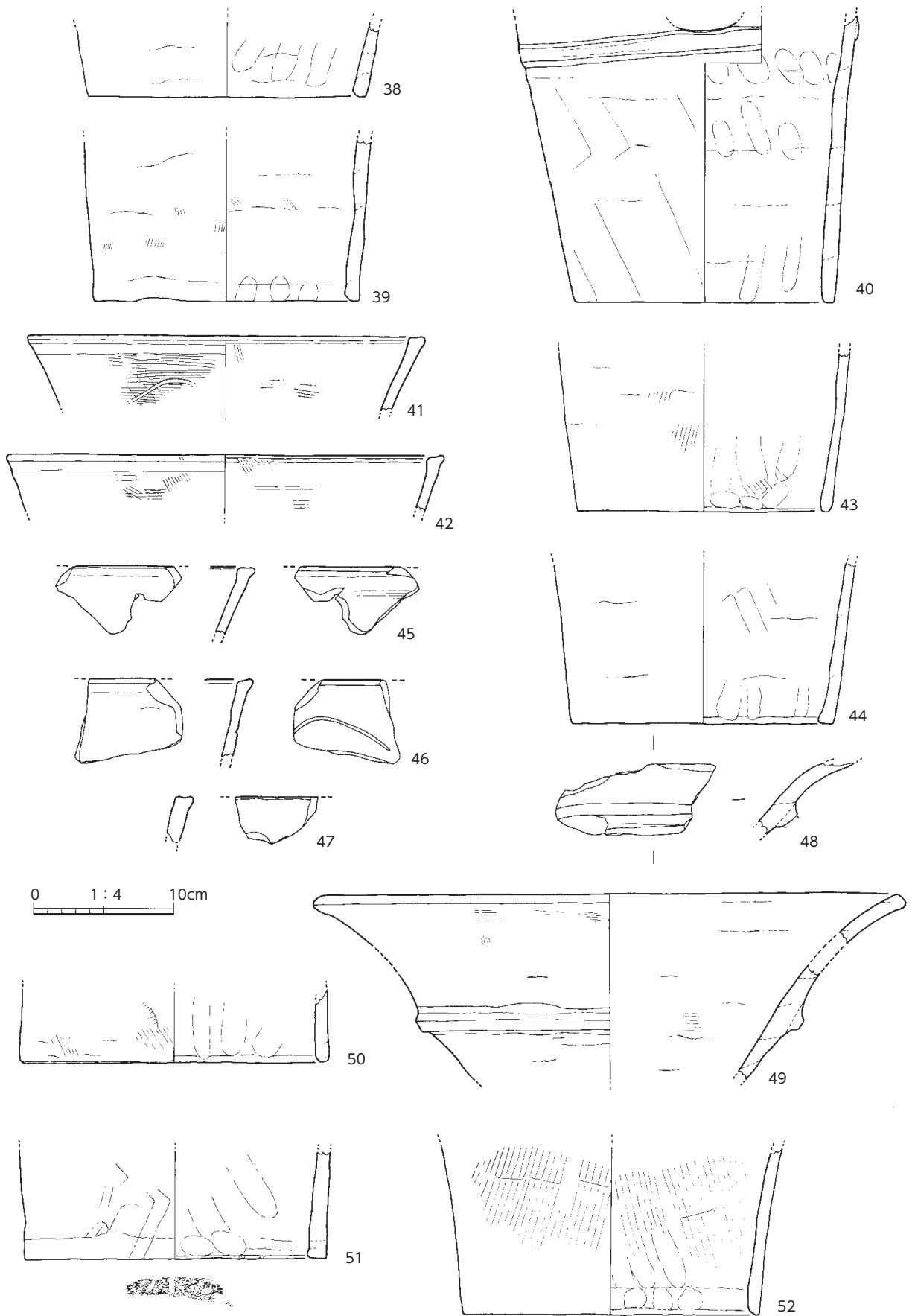
第7図 大谷山27号墳出土 円筒埴輪 (1)



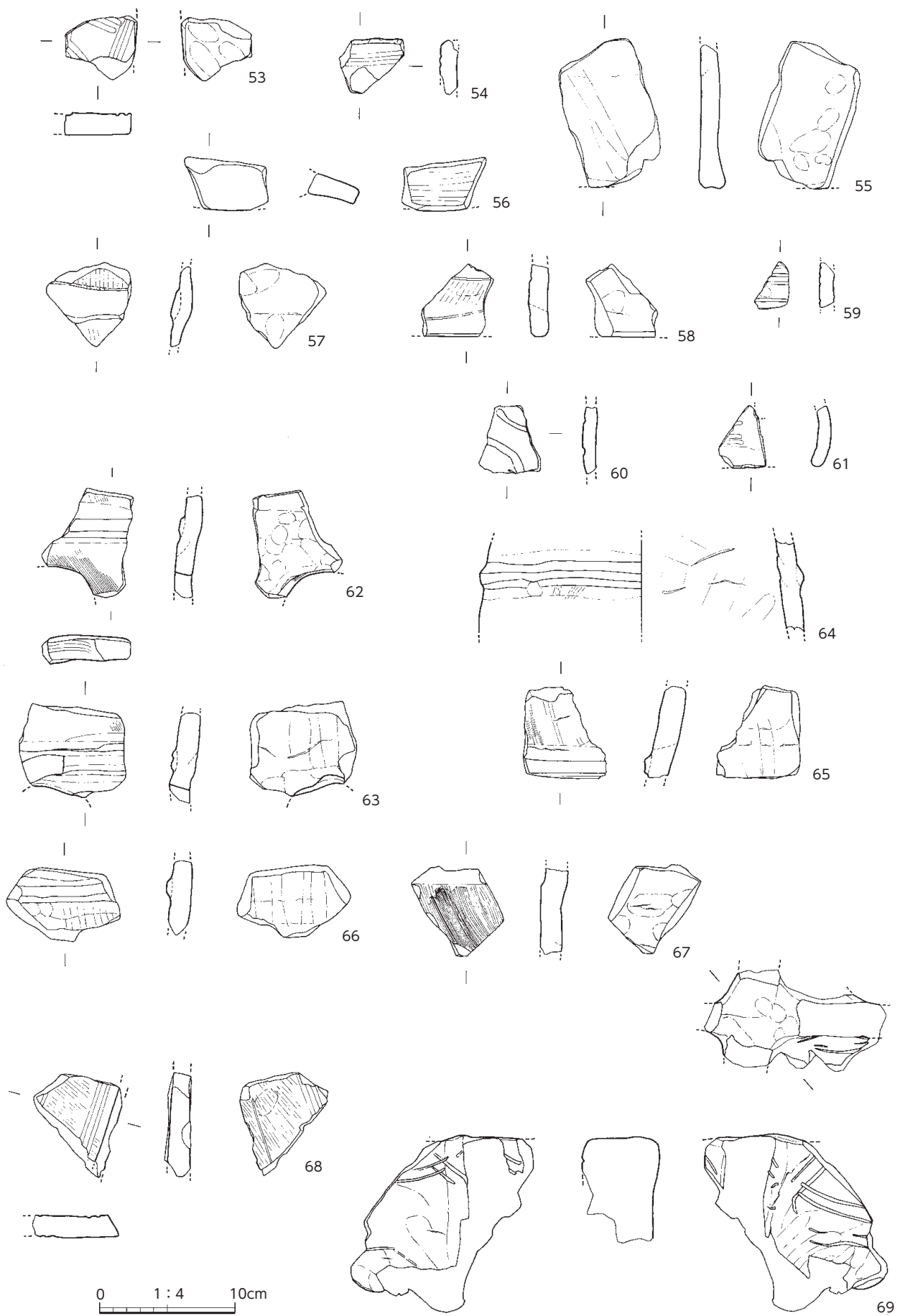
第8図 大谷山27号墳出土 円筒埴輪(2)



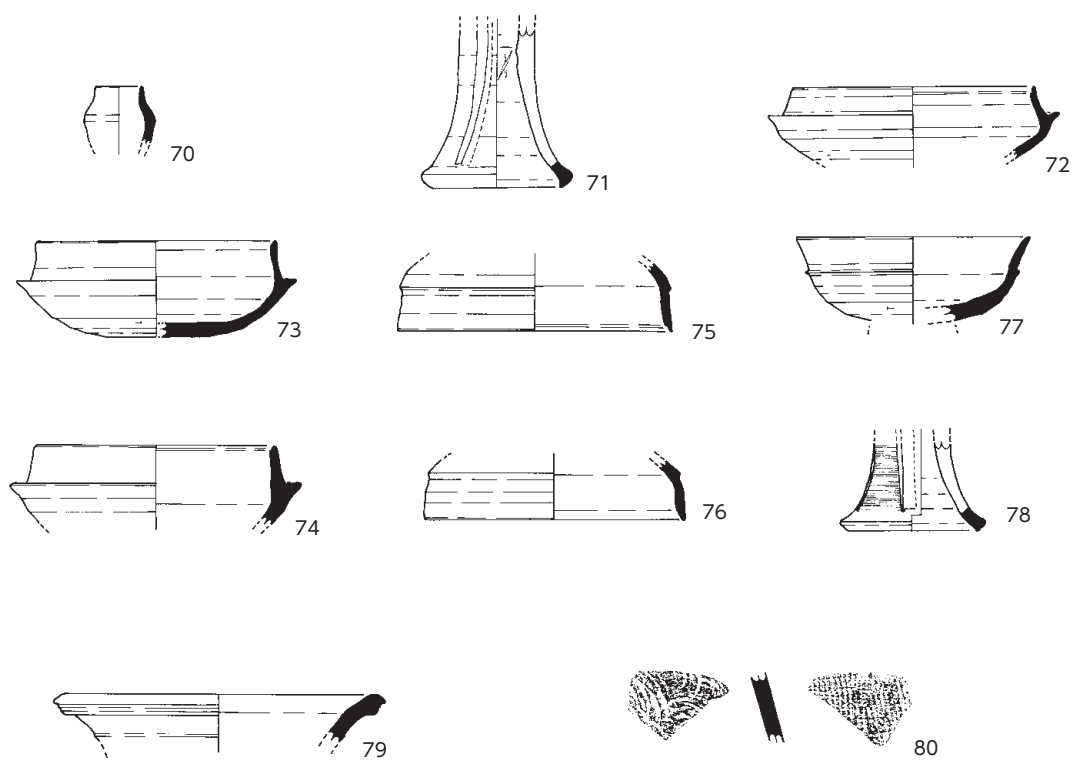
第9図 大谷山27号墳出土 円筒埴輪(3)



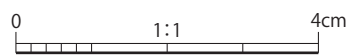
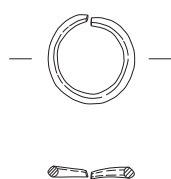
第10図 大谷山27号墳出土 円筒埴輪(4)



第 11 图 大谷山 27 号墳出土 形象埴輪



第12図 大谷山27号墳出土 土器類



第13図 大谷山27号墳出土 装身具(S=1/1)

第3節 まとめ

発掘調査の結果、大谷山27号墳は、墳長約22mの前方後円墳であることが明らかとなった（第14図）。

古墳は北側へ傾斜する尾根上に後円部を北東に向けて立地し、地山ないし岩盤を整形して盛土を施すことにより墳丘を構築していると考えられる。また、横穴式石室の墓坑は、後円部付近の岩盤を整形して構築している。

また、墳丘には一部で円筒埴輪列が確認され、少なくとも円筒埴輪は後円部及び東側くびれ部、前方部東側から前端にかけて連続して樹立していたと推測され、さらに墳丘を圍繞していた可能性がある。なお、出土した円筒埴輪は全てIV群系埴輪であった。

また、前方部東西トレンチや東側くびれ部で形象埴輪片が出土した。これらは小破片で樹立位置等は不明であるが、盾ないし石見型埴輪などの器財埴輪や家形埴輪等が墳丘上に樹立していたものと考えられる。また、東側くびれ部では、須恵器大甕のほか、壺の小破片が出土した。

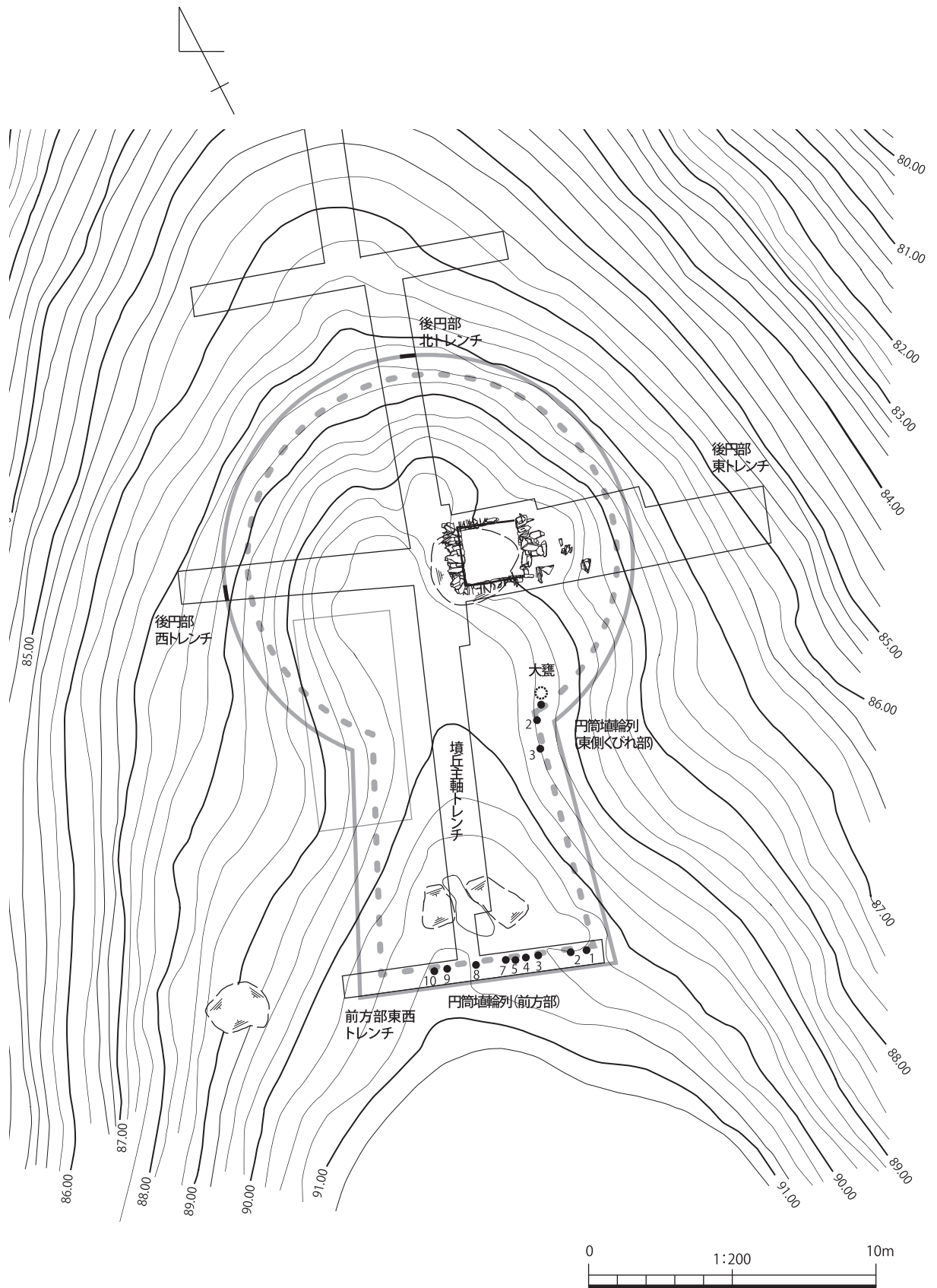
埋葬施設は、後円部の中央やや東よりに構築された横穴式石室で、東南東方向に開口する。石室主軸は、墳丘主軸におおむね直交するとみられる。

横穴式石室は毀損が著しいため不明な点が多いが、前述のように玄室前道を有する可能性があり、岩橋型石室と考えられる。大谷山27号墳の横穴式石室の特徴は、両袖式の形態をとるが羨道が奥壁から見て右寄りに位置すること、玄室が正方形を呈し小型であること、羨道の幅が著しく狭いこと、壁体は小口積みを主体とするが、一部に平積も併用していること、排水溝は玄室各壁体及び羨道左側壁下に設置されていることなどを列挙することができる。また玄門部の石材が内側に突出する可能性があり、玄室前道である可能性が高いが、遺存状況が不良であり玄室前道基石の有無は不明である。

石室から出土した須恵器は原位置を保つものはないが、蓋杯、高杯の他に、小破片ではあるが装飾付須恵器の小壺が出土したことが特筆される。この他、玄室床面より金製垂飾の金具が出土した。

築造時期は、石室より出土した須恵器がM15型式期～TK10型式期を主体とすることから、6世紀前半頃と推測される。

大谷山27号墳は、大谷山地区に所在する小型の前方後円墳であり、今回の調査成果は、大谷山28号墳と並んで、岩橋千塚古墳群における小型前方後円墳の特徴を明らかにする上で貴重なデータになると考えられる。



第14図 大谷山27号墳 墳丘復元図(S=1/200)

第2表 大谷山 27号墳 遺物観察表

(埴輪・土器類)

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1	図版13	円筒埴輪	東側くびれ部1号円筒埴輪	-	器面磨滅。内面は指オサエ。突帯は断面台形状。	外・内)5YR6/4にぶい橙 断)7.5YR6/6橙	3mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	30%	1・2は同一個体か。
2	図版13	円筒埴輪	東側くびれ部1号円筒埴輪	底径16.0cm	器面磨滅。外面タテハケで突帯下に一部ヨコハケあり。内面はナデと縦方向の強い指ナデ。底端部内面に指オサエ。下段突帯の断面はややM字状で、底面からの高さ17.0cm。ハケの密度は4本/1cm。	外・内)2.5YR5/8明赤褐色～7.5YR6/6橙 断)7.5YR6/6橙	1cm以下の赤色酸化粒を少量含む、4mm以下の小石をまばらに含む、その他砂粒を多量に含む	良好	70%	1・2は同一個体か。
3	図版13	朝顔形埴輪	東側くびれ部2号円筒埴輪	-	朝顔形埴輪の口縁部。器面磨滅。突帯は強いヨコナデにより断面M字状。	外)5YR6/6橙 内)5YR6/8橙 断)10YR6/2灰黄褐	3mm以下の石粒と砂粒を含む、8mm大の片岩1個が含まれていた跡が認められる	良好	-	3～5は2号として取り上げ。ただし3・4は別個体。
4	図版13	円筒埴輪	東側くびれ部2号円筒埴輪	-	器面磨滅。口縁端部は内外の強いヨコナデにより外方へ突出した形態。	外・内・断)7.5YR6/4にぶい橙	砂粒が多量含まれる、4mm以下の赤色酸化粒をまばらに含む	良好	-	3～5は2号として取り上げ。ただし3・4は別個体。
5	図版13	円筒埴輪	東側くびれ部2号円筒埴輪	底径18.7cm	外面はタテハケ。工具痕は板オサエか。内面は指オサエとナデ。下段突帯は断面山形状で、底面からの高さ17.5cm。ハケの密度は4本/1cm。	外・内・断)2.5YR6/6橙	6mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	100%	基底部分が樹立して出土。3・4も2号として取り上げている。
6	図版13	円筒埴輪	東側くびれ部2・3号円筒埴輪西側	口径31.0cm(復元)	器面磨滅。口縁端部は断面三角形だがやや丸みをもつ。内面は指オサエ。突帯の断面はややM字状で、口縁からの高さ8.0cm。外面にヘラ記号。	外)5YR5/6赤褐色 内・断)5YR6/6橙	4mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	-	
7	図版13	朝顔形埴輪	東側くびれ部2・3号円筒埴輪西側	-	朝顔形埴輪の体部上半。器面磨滅。突帯はヨコナデにより断面はややM字状。	外・内・断)5YR6/6橙	3mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	-	
8	図版14	円筒埴輪	東側くびれ部2・3号円筒埴輪西側	-	外面はナデ。内面は器面磨滅。突帯は断面台形状。	外・内・断)5YR6/8橙	2mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	30%	
9	図版14	円筒埴輪	東側くびれ部2・3号円筒埴輪西側	-	外面はタテハケ。内面はタテハケのちナデ・指オサエ。突帯は断面台形状。下段突帯下に透孔。ハケの密度は4本/1cm。	外)5YR6/6橙 内・断)5YR6/8橙	5mm以下の砂粒を多く含む、3mm以下の赤色酸化粒を含む	良好	-	
10	図版14	円筒埴輪	東側くびれ部2・3号円筒埴輪西側	底径18.4cm(復元)	器面磨滅。内面は指オサエとナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ15.8cm。下から2段目の突帯は断面台形状。突帯間隔は7.4cm。下段突帯の上に透孔。	外・内・断)5YR6/8橙	6mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	20%	
11	図版14	円筒埴輪	東側くびれ部3号円筒埴輪	底径18.0cm	器面磨滅。外面タテハケ。下段突帯より上はヨコハケ。内面は指オサエとナデ。底端部はナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ20.5cm。下段突帯の上に透孔。	外・内・断)2.5YR5/8明赤褐～5YR6/6橙	1.2cm以上の片岩?が1個、1cm以下の片岩・その他小石・赤色酸化粒をまばらに含む	良好	80%	
12	図版14	円筒埴輪	東側くびれ部2・3号円筒埴輪西側	底径19.0cm	外面は下段突帯下は磨滅、上はナデ。内面は指オサエとナデとハケ。底端部はヨコナデ。下段突帯の断面はややM字状で、底面からの高さ17.5cm。	外)5YR6/8橙 内)5YR6/6橙 断)10YR6/3にぶい黄橙	5mm以下の片岩、その他石粒を多量含む	良好	20%	
13	図版15	円筒埴輪	東側くびれ部2・3号円筒埴輪西側	-	口縁端部は内外面を強いヨコナデ。丸みをもつ。外面はタテハケ。ハケの密度は4本/1cm。	外・内)5YR6/6橙 内)10YR7/4にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を多量含む	良好	-	
14	図版15	円筒埴輪	東側くびれ部2・3号円筒埴輪西側	-	器面磨滅。口縁部付近はヨコナデ。外面にヘラ記号。	外)5YR5/6明赤褐 内)2.5YR5/6明赤褐 断)7.5YR6/4にぶい橙	4mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	-	
15	図版15	円筒埴輪	東側くびれ部円筒埴輪列付近	-	口縁端部は外側と端面とヨコナデ。丸みをもつ。外面はハケ。内面は磨滅。ハケの密度は4本/1cm。	外・内)10YR5/8明赤褐 断)10YR7/3にぶい黄橙	7mm以下の片岩とその他石粒を多量含む	良好	-	
16	図版15	円筒埴輪	墳丘東側	-	器面磨滅。口縁端部は丸みをもつ。ヘラ記号。	外)2.5YR5/6明赤褐 内・断)7.5YR6/6橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	-	
17	図版15	円筒埴輪	東側くびれ部円筒埴輪列付近	-	器面磨滅。口縁端部は丸みをもつ。ヘラ記号。	外・内)2.5YR5/6明赤褐 断)10YR6/4にぶい黄橙	5mm以下の砂粒を多量含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	-	
18	図版15	円筒埴輪	東側くびれ部円筒埴輪列付近	-	器面磨滅。口縁端部は断面三角形形状。	外・内)2.5YR5/6明赤褐 断)7.5YR6/6橙	5mm以下の砂粒を多量含む、片岩を含む	良好	-	
19	図版15	円筒埴輪	墳丘東側	-	外面は磨滅。内面はハケ。口縁端部は断面三角形形状。外面にヘラ記号。ハケの密度は4本/1cm。	外)5YR5/6明赤褐 内・断)2.5YR5/6明赤褐	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
20	図版15	円筒埴輪	東側くびれ部円筒埴輪列付近	底径18.8cm(復元)	外面ナデ。内面は縦方向のナデ。	外)7.5YR6/6橙 内・断)5YR6/8橙	1.4cm大の小石が1個、4mm以下の石粒が微量、その他砂粒を含む	良好	25%	
21	図版15	円筒埴輪	東側くびれ部円筒埴輪列付近	底径18.2cm	外面板オサエ。内面はナデ。	外・内)7.5YR6/6橙～5YR6/6橙 断)10YR6/4にぶい黄橙	1mm以下の砂粒を含む	良好	17%	

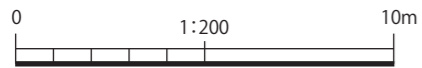
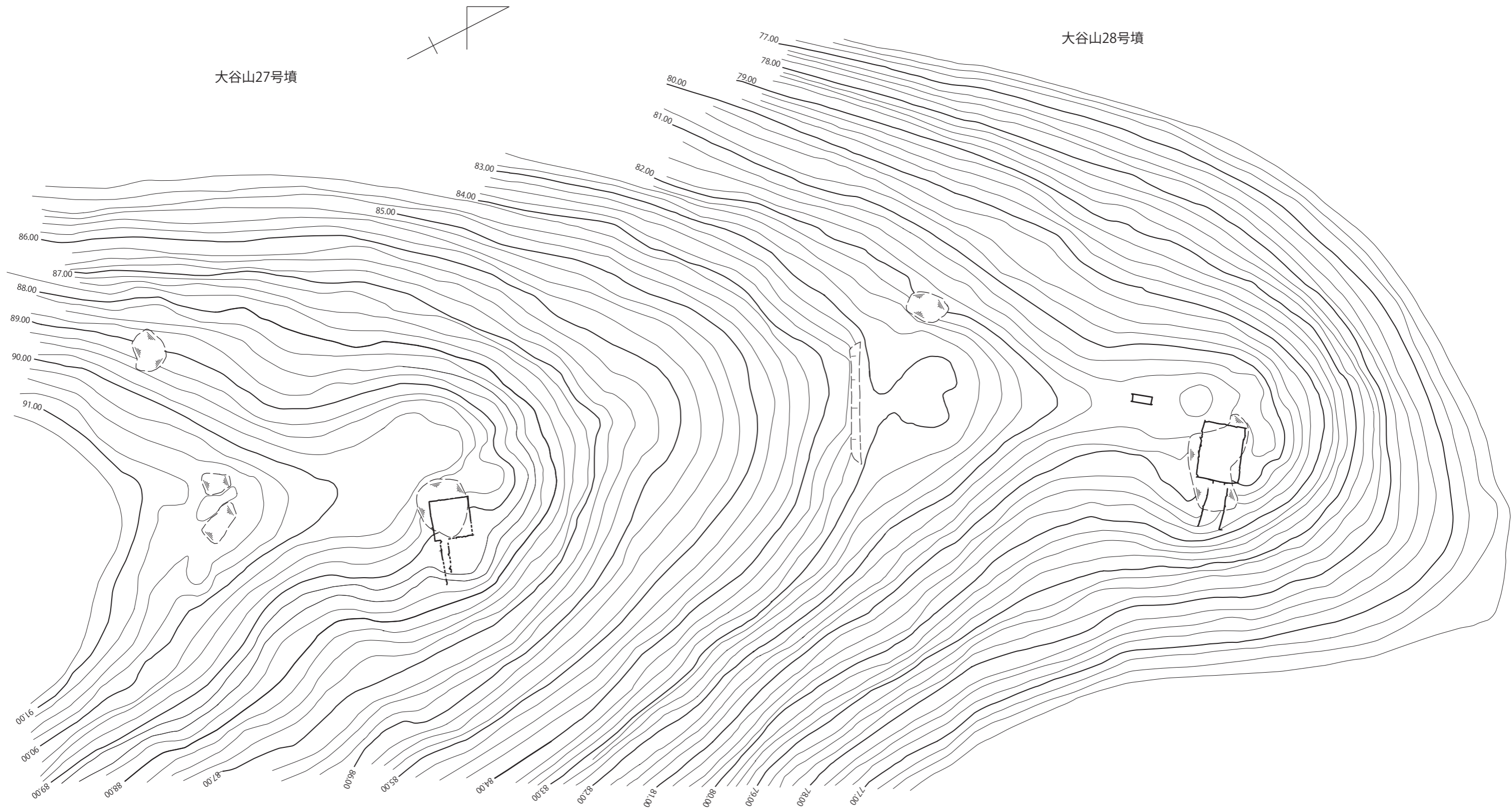
NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
22	図版15	円筒埴輪	西側くびれ部付近北	底径17.8cm	外面はナデ、板オサエ。内面は縦方向の指ナデ。	外)5YR6/8 橙 内)5YR6/6 橙 断)10YR7/3 におい黄橙	4mm以下の石粒がごく少量と砂粒中量含む	良好	17%	
23	図版15	円筒埴輪	横穴式石室女室床面攪乱土	口径29.0cm(復元)	口縁端部の内外面を強いヨコナデにより断面三角形。外面はヨコハケ、口縁部付近はタテハケ後ヨコナデ。内面はヨコナデ。ハケの密度は7本/1cm。	外)2.5YR5/4 におい赤褐 内・断)5YR6/6 橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	10%以下	
24	図版15	円筒埴輪	横穴式石室女室床面攪乱土	-	外面はタテハケのちヨコハケ。口縁部付近に指オサエ。内面はナデ。	外・断)2.5YR5/6 明赤褐 内)5YR6/6 橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
25	図版15	朝顔形埴輪	横穴式石室女室床面攪乱土	-	器面磨減。朝顔形埴輪の1次口縁部分か。	外)5YR6/6 橙 内)10YR5/2 灰黄褐、10YR4/1 褐灰、5YR5/6 明赤褐 断)5YR6/6 橙、10YR6/4 におい黄橙	片岩を含む、赤色酸化粒を含む	良好	-	
26	図版16	円筒埴輪	前方部1号円筒埴輪	底径15.8cm(復元)	外面はナデ、底部は板オサエ。内面はユビナデ。下段突帯は断面M字状で、底面からの高さ18.3cm。	外・内)5YR6/6 橙	密5mm以下の茶褐色・白色の礫、1mm以下の白色・褐色砂粒を含む	良好	20%	基底部が樹立して出土。
27	図版15	朝顔形埴輪	前方部2号円筒埴輪	-	器面磨減。内面に指オサエ。突帯は断面台形状。	外)7.5YR6/6 橙 内)5YR6/8 橙 断)10YR7/6 明黄褐	5mmぐらゐの片岩1個、3mm以下の赤石酸化粒とその他砂粒を全体に含む	良好	-	基底部樹立個体(前方部2号)と一括して取り上げ。
28	図版15	円筒埴輪	前方部3号円筒埴輪	口径31.6cm(復元)	内面はハケ。口縁部は内外面の強いヨコナデにより端部は丸みをもつ。突帯は断面台形状で、口縁部までの高さ8.0cm。ハケの密度は7本/1cm。外面にヘラ記号。	外・内・断)5YR6/6 橙	3mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む、赤色酸化粒を含む	良好	20%	基底部樹立個体(前方部3号)と一括して取り上げ。
29	図版16	円筒埴輪	前方部4号円筒埴輪	底径20.0cm	外面は器面磨減。内面はナメハケのちナデ・指オサエ。底端部はナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ15.0cm。下段突帯の上に透孔。	外・内)2YR5/8 明赤褐 ~7.5YR6/6 橙	7mm以下の片岩・赤石酸化粒・その他小石を多量含む	良好	95%	基底部が樹立して出土。
30	図版15	円筒埴輪	前方部5号円筒埴輪	-	外面はヨコハケ。内面は磨減。突帯の断面M字状。ハケの密度は6本/1cm。	外・内)5YR6/6 橙	密1cm大の片岩、3mm以下の片岩、白色・褐色の礫、砂粒を含む	良好	15%	基底部樹立個体(前方部5号)と一括して取り上げ。
31	図版16	円筒埴輪	前方部6号円筒埴輪	-	外面はヨコハケ。内面は指オサエ。突帯は断面M字状。突帯の上に透孔。ハケの密度は4本/1cm。	外)5YR6/8 橙 内)5YR6/6 橙 断)7.5YR6/6 橙	1cm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	40%	6号として取り上げているが、基底部は出土していない。31・32は別個体か。
32	図版16	円筒埴輪	前方部6号円筒埴輪	口径36.0cm(復元)	口縁端部は内外面の強いヨコナデにより断面三角形。外面は1次調整のタテハケ、2次調整のヨコハケ。内面はナメハケのちナデと指オサエ。突帯は断面M字状で、口縁から1段目までの高さ9.4cm。突帯間隔は9.5cm。口縁から3段目に透孔。ハケの密度は6本/1cm。	外・内)2.5YR6/6 橙 断)7.5YR7/6 橙	2cm大の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	25%	6号として取り上げているが、基底部は出土していない。31・32は別個体か。
33	図版16	円筒埴輪	前方部7号円筒埴輪	底径19.1cm	外面はタテハケとナメハケ。内面はナメハケ後ナデ。底端部付近は指オサエ。底端部に工具痕。ハケの密度は6本/1cm。	外)7.5YR8/6 浅黄橙 5YR6/8 橙 内)5YR6/8 橙	密5~8mm大の片岩、2mm以下の白色、褐色、黒色の砂粒、片岩を含む	良好	90%	基底部が樹立して出土。
34	図版16	円筒埴輪	前方部8号円筒埴輪	底径20cm	外面は板オサエ。内面ナデ。底端部はナデ。	外・内)5YR6/8 橙~ 5YR6/6 橙 断)10YR7/3 におい黄橙	7mm位の黒っぽい石?を1個含む、5mm以下の赤色酸化粒をまばらに含む、砂粒を全体に多量含む	良好	60%	
35	図版17	円筒埴輪	前方部9号円筒埴輪	口径32.0cm(復元)	外面はタテハケ後ヨコハケ。内面は荒いヨコハケとナデ。口縁付近はヨコナデ。ハケの密度は4本/1cm。	外・内)5YR5/6 明赤褐 断)10YR6/4 におい黄橙	6mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	6%	35~38は9号とし取り上げ。
36	図版17	円筒埴輪	前方部9号円筒埴輪	-	外面はタテハケ後にヨコハケ。内面は荒いヨコハケ、指オサエ。下段突帯は断面M字状。突帯の上に透孔。ハケの密度は4本/1cm。	外・内)5YR5/6 明赤褐 断)10YR6/4 におい黄橙	6mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	38%	35~38は9号とし取り上げ。36・37は同一個体か。
37	図版17	円筒埴輪	前方部9号円筒埴輪	底径18.0cm(復元)	外面はハケ、板状工具の押圧痕、粘土紐接合痕。内面はナデと指オサエ、粘土紐接合痕。底端部はヨコナデ。ハケの密度は4本/1cm。	外)5YR5/6 明赤褐 内)5YR6/6 橙 断)10YR6/4 におい黄橙	4mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む、赤色酸化粒を含む	良好	38%	35~38は9号とし取り上げ。36・37は同一個体か。
38	図版17	円筒埴輪	前方部9号円筒埴輪	底径19.6cm(復元)	外面は磨減。内面はナデ。底端部はナデ。	外)5YR6/6 橙 内)5YR6/8 橙 断)7.5YR5/4 におい褐	3mm位の赤色酸化粒1個とその他の石粒を含む	良好	25%	35~38は9号とし取り上げ。38は、36・37とは別個体。
39	図版17	円筒埴輪	前方部10号円筒埴輪	底径18.8cm	器面磨減。外面はハケ、粘土紐接合痕。内面はナデとハケ、底端部付近に指オサエ、粘土紐接合痕。底端部はナデ。	外)5YR5/8 明赤褐~ 5YR6/8 橙 内)2.5YR5/6 明赤褐~ 7.5YR6/6 橙 断)10YR6/3 におい黄橙	5mm以下の片岩とその他の小石を多数含む	良好	60%	
40	図版17	円筒埴輪	前方部東西トレンチ	底径18.8cm(復元)	外面は板状オサエ。内面はナデと指オサエ。底端部はナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ19.5cm。下段突帯の上に透孔。	外)5YR6/6 橙 内)2.5YR5/6 明赤褐 断)7.5YR7/4 におい黄橙	8mm以下の砂粒を含む、片岩を含む、赤色酸化粒を含む	良好	90%	前方部3号円筒埴輪か。

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
41	図版17	円筒埴輪	前方部東西トレンチ	口径28.0cm(復元)	外面はタテハケ後ヨコハケ。内面はヨコハケ。口縁部付近はヨコナデ。外面にヘラ記号。	外・内)2.5YR5/4にぶい赤褐断)7.5YR6/6橙	3mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	10%	
42	図版17	円筒埴輪	前方部東西トレンチ	口径30.8cm(復元)	外面はハケ。内面はハケ。口縁部付近はハケ後ヨコナデ。ハケの密度は5本/1cm。	外・内)10YR5/6明赤褐断)10YR7/4にぶい黄橙	3mm以下の石粒を中量含む	硬	10%	
43	図版17	円筒埴輪	前方部東西トレンチ	底径17.8cm(復元)	外面は器面磨滅。外面はハケ。内面はナデとハケ、底端部付近に指オサエ。底端部はヨコナデ。ハケの密度は4本/1cm。	外)2.5YR5/6明赤褐内・断)7.5YR6/6橙	2mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	8%	
44	図版18	円筒埴輪	前方部東西トレンチ	底径18.6cm	外面は磨滅。内面はナデ、粘土紐接合痕。底端部はヨコナデ。	外・内)5YR6/8橙~7.5YR7/6断)7.5YR6/4にぶい黄橙	内面に6mm大の小石が3個、外面に6mm大の小石が2個、その他内外面に4mm以下の片岩その他の石粒をまだらに含む	良好	25%	
45	図版17	円筒埴輪	前方部東西トレンチ	-	外面は磨滅気味のハケ。内面は磨滅。口縁部付近はヨコナデ。	外)2.5YR5/6明赤褐内・断)10YR7/4にぶい黄橙	5mm以下の石粒を多量含む	良好	-	
46	図版17	円筒埴輪	前方部東西トレンチ	-	器面磨滅。口縁部付近はヨコナデ。外面にヘラ描沈線文。	外)2.5YR5/6明赤褐内・断)7.5YR6/4にぶい黄橙	7mm以下の片岩、その他の石粒を多量含む	良好	-	
47	図版17	円筒埴輪	前方部東西トレンチ	-	外面は磨滅。内面は指オサエとナデ。	外・内)5YR6/6橙断)10YR7/4にぶい黄橙	砂粒を含む	良好	-	
48	図版18	朝顔形埴輪	前方部東西トレンチ	-	器面磨滅。頸部突帯は断面台形状。	外)5YR6/6橙、5YR5/6明赤褐内)5YR6/6橙、7.5YR4/3褐断)10YR6/3にぶい黄橙	7mm以下の砂粒を含む、片岩を含む、赤色酸化粒を含む	良好	-	
49	図版18	朝顔形埴輪	地区不明	口径41.0cm(復元)	器面磨滅。磨滅気味のハケ。内面に粘土紐接合痕。突帯は断面台形状。	外・内)5YR6/6橙、2.5YR5/6明赤褐断)5YR6/6橙、10YR6/2にぶい黄橙	1mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	-	
50	図版18	円筒埴輪	地区不明	底径21.8cm(復元)	外面は磨滅気味のハケ、粘土紐接合痕。内面はナデ。底端部はヨコナデ。	外・内)5YR6/6橙、10YR6/2灰黄褐断)7.5YR6/6橙、10YR6/2灰黄褐	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	15%	
51	図版18	円筒埴輪	地区不明	底径21.4cm(復元)	外面は板状工具のナデとハケ、粘土紐接合痕。内面はナデ、底端部付近に指オサエ、粘土紐接合痕。底端部はヨコナデ、2~5mm幅の圧痕あり。	外)5YR5/6明赤褐内)5YR6/6橙断)10YR6/2灰褐色	7mm以下の砂粒を含む、片岩を含む	良好	10%	
52	図版18	円筒埴輪	地区不明	底径21.0cm(復元)	外面はハケ。内面はナデとハケ、底端部付近に指オサエ。底端部はヨコナデ。ハケの密度は3本/1cm。	外・内)5YR6/8橙~5YR7/6橙断)10YR6/4にぶい黄橙	3mm以下の石粒を多量含む	良好	25%	
53	図版18	器財埴輪(石見型埴輪または盾)	前方部東西トレンチ	-	盾面ないし形象部。二条一括の沈線により線刻。	外・内)5YR6/6橙断)7.5YR6/4にぶい黄橙	4mm以下の砂粒を含む、片岩を含む、赤色酸化粒を含む	良好	-	
54	図版18	器財埴輪(石見型埴輪または盾)	前方部東西トレンチ	-	盾面ないし形象部。二条一括の沈線により線刻。	外・内)5YR6/6橙断)5YR6/6橙、7.5YR5/3にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む、赤色酸化粒を含む	良好	-	
55	図版18	家形埴輪(破風か)	東側くびれ部円筒埴輪列付近	-	下方の端部は強いヨコナデによって凹む。	外・内)2.5YR5/4にぶい赤褐断)5YR5/4にぶい赤褐	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
56	図版18	不明形象埴輪	東側くびれ部円筒埴輪列付近	-	端部に面をもち、蓋の笠部の笠縁付近の可能性ある	外・内)5YR6/6橙断)10YR7/6明黄褐	砂粒を多く含む	良好	-	
57	図版18	不明形象埴輪	地区不明	-	粘土帯貼り付け。動物(馬)ないし人物か。	外)7.5YR6/4にぶい黄橙内)5YR5/6明赤褐断)7.5YR5/3にぶい黄褐	砂粒を含む	良好	-	
58	図版19	不明形象埴輪	地区不明	-	器面磨滅。ナナメハケ。一本描きによる線刻。	外・内・断)5YR6/6橙	砂粒を含む	良好	-	
59	図版19	不明形象埴輪	東側くびれ部円筒埴輪列付近	-	外面は3条の線刻が確認される。内面はナデ。	外)7.5YR6/4にぶい黄橙内)5YR4/3にぶい赤褐断)10YR6/4にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を含む、赤色酸化粒を含む	良好	-	
60	図版19	不明形象埴輪	地区不明	-	器面磨滅。不鮮明だが一本描きによる線刻か。	外・内)2.5YR5/6明赤褐断)10YR6/4にぶい黄橙	3mm以下の石粒と砂粒を含む	良好	-	
61	図版19	不明形象埴輪	地区不明	-	器面磨滅。不鮮明だが線刻か。	外・内)5YR5/6明赤褐断)7.5YR5/4にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	-	
62	図版19	不明形象埴輪(基部)	前方部東西トレンチ	-	透孔あり。外面はナナメハケ。突帯は強いヨコナデによる。ハケの密度は8本/1cm。62~66は同一個体か	外)5YR6/6橙内)7.5YR6/3にぶい黄褐断)10YR5/2灰黄褐	3mm以下の砂粒を含む	良好	-	
63	図版19	不明形象埴輪(基部)	前方部東西トレンチ	-	外面はナナメハケのちナデ。突帯は強いヨコナデにより断面M字形。62~66は同一個体か	外)5YR6/6橙内・断)10YR5/2灰黄褐	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	-	
64	図版19	不明形象埴輪(基部)	前方部東西トレンチ	-	器面磨滅。外面はナナメハケ。突帯は強いヨコナデにより断面はやや台形状となる。62~66は同一個体か	外)5YR6/8橙内)7.5YR7/6橙断)10YR6/4にぶい黄橙	5mm以下の片岩が少量、その他の石粒と砂粒を含む	良好	-	

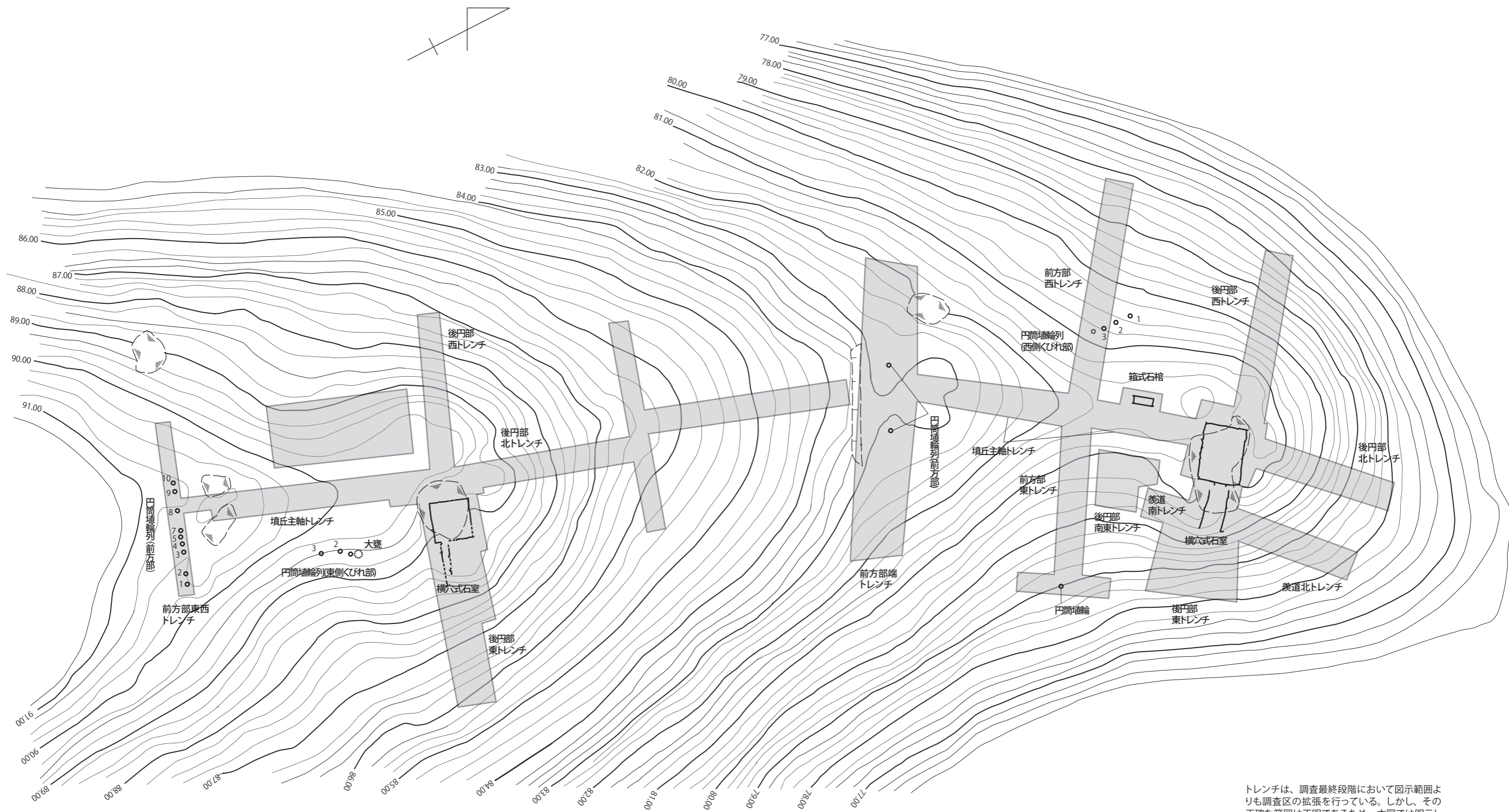
NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
65	図版19	不明形象埴輪(基部)	前方部東西トレンチ	-	外面はナメハケのちナデ。突帯は強いヨコナデにより断面M字形。62～66は同一個体か	外)5YR6/6～7.5YR6/4にぶい橙断)10YR6/1 褐灰	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	-	
66	図版19	不明形象埴輪(基部)	前方部東西トレンチ	-	外面はナメハケ。突帯は強いヨコナデによる。62～66は同一個体か	外・内)5YR6/6 橙断)10YR6/3 にぶい橙	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	-	
67	図版19	不明形象埴輪(基部)	東側くびれ部円筒埴輪列付近	-	焼成は堅緻で須恵質に近い。外面はヨコナデ後にハケメ。	外)10YR5/3 にぶい黄褐内)7.5YR5/3 にぶい褐断)10YR5/1 褐灰	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	-	
68	図版19	器埴輪(蓋立飾)	表面採集(参考資料)	-	調整はナメハケのちナデ。二条一括の沈線により線刻。	外)5YR6/6 橙内)5YR6/6 橙、5YR5/6 明赤褐断)10YR5/3 にぶい黄褐	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	1978年3月採集大谷山27号埴輪集かとされる
69	図版19	器埴輪(蓋立飾)	表面採集(参考資料)	-	調整は各面ともに丁寧なナデ。二条一括の沈線により線刻。	外)5YR6/6 橙、5YR6/4 にぶい橙断)10YR6/2 灰黄褐、10YR5/1 褐灰	2mm以下の砂粒を中量含む、赤色酸化粒を含む	良好	-	1978年3月採集大谷山27号埴輪集かとされる
70	図版20	須恵器 裝飾付壺	横穴式石室 玄室攪乱土	小壺口径 2.5cm (復元) 残存高 3.0cm	裝飾付壺の小壺である。口縁部はわずかに外反し短く立ちあがり、端部は丸く収める。胴部はわずかに膨らむ。ヨコナデ。	外)2.5Y6/1 黄灰色内)10YR6/2 灰黄褐色	密(1mm以下の白色砂粒を含む)	良好	30%	
71	図版20	須恵器 高杯	横穴式石室 玄室攪乱土	口径 6.8cm (復元) 残存高 8.4cm	脚部の内面上部にしほり痕が認められ、底部はわずかに肥厚して丸みをおび、端部は内側に折れる。細長い長方形の透しを1段3方向につけている。回転ナデ。外面に自然釉付着。	外)2.5Y7/2 灰黄色～2.5Y6/4 にぶい黄色内)5Y5/1 灰色	密(1mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良好	6%	
72	図版20	須恵器 杯身	横穴式石室 玄室・羨道攪乱土	口径 12.8cm (復元) 残存高 3.8cm	口縁部は内傾して立ちあがり、端部は面をもち、下方が沈線状に凹む。受部は外上方にのび、端部は丸みをおびる。内面から受部まで回転ヨコナデ、底部は左回りの回転ヘラケズリ。	外・内)10YR5/1 灰色	密(1mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	15%	
73	図版20	須恵器 杯身	横穴式石室 羨道床面	口径 12.6cm (復元) 残存高 5.1cm	口縁部はやや内傾して立ちあがり、端部は丸く収める。受部はややほぼ水平にのび、端部は丸みをおびる。底部の2/3程度は右回りの回転ヘラケズリ。その他は回転ヨコナデ。	外・内)2.5Y7/2 灰黄色	密(1mm以下の白色、灰色の礫を全体に含む)	良好	40%	
74	図版20	須恵器 杯身	横穴式石室 羨道攪乱土	口径 12.5cm (復元) 残存高 4.1cm	口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、端部は内面が浅く凹む。受部はほぼ水平にのび、端部は丸みをおびる。回転ヨコナデ。	外・内)2.5Y7/2 灰黄色	密(2mm以下の白色礫、砂粒を全体に含む)	良好	10%	
75	図版20	須恵器 杯蓋	横穴式石室 羨道攪乱土	口径 14.4cm (復元) 残存高 3.7cm	天井部と口縁部の境の稜線はにぶく、稜線の下が浅く凹む。口縁端部は内傾して凹む。回転ヨコナデ。	外・内)N6/0 灰色	密(1mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	5%	
76	図版20	須恵器 杯蓋	横穴式石室 羨道攪乱土	口径 13.7cm (復元) 残存高 3.2cm	天井部と口縁部の境の稜線はにぶく、稜線の下が浅く凹む。口縁部はわずかに外反しており、端部は面をもつ。回転ヨコナデ。	外・内)2.5Y7/3 浅黄色	密(1mm以下の白色、褐色砂粒を全体に含む)	やや軟	5%	
77	図版20	須恵器 無蓋高杯	横穴式石室 羨道攪乱土	口径 12.4cm (復元) 残存高 4.5cm	杯部口縁は外反して立ちあがり、口縁部と底部の境の稜線は明瞭である。底部の1/3まで左回りの回転ヘラケズリと脚部との接合時のナデ。その他は回転ヨコナデ。	外)5Y4/1 灰色内)2.5Y5/1 黄灰色	密(1mm以下の白色礫、砂粒を全体に含む)	良好	20%	
78	図版20	須恵器 高杯	横穴式石室 羨道攪乱土	口径 6.8cm (復元) 残存高 5.0cm	裾部は漏斗状に広がり、底部の端部は面をもつ。細長い長方形の透しを1段4方につける。回転ヨコナデ。外面にカキ目調整あり。	外)5Y0/1 灰色内)7.5Y5/1 灰色	密(1mm以下の白色、褐色砂粒を全体に含む)	良好	40%	
79	図版20	須恵器 壺	東側くびれ部円筒埴輪列付近	口径 16.5cm (復元) 残存高 2.5cm	口頸部は外反して立ちあがり、端部はやや外側に突出する。頸部の中位には浅い沈線あり。回転ヨコナデ。	外・内)5YR6/4 にぶい橙色	密(2mm以下の白色礫、砂粒を含む)	不良	10%以下	
80	図版20	須恵器 甕	東側くびれ部円筒埴輪列付近	-	外面は格子状タタキ。内面は同心円文の当て具痕。	外)2.5Y4/1 褐灰色内)10YR5/1 黄灰色	密(1mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	-	

(装身具)

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	残存率	備考
81	図版20	金製垂飾 金具	横穴式石室 玄室床面	外径 11.4mm～11.9mm、内径 8.8mm～9.4mm、断面径 1.2mm～1.4mm、重さ 0.58g	環はやや歪み。両端間にはわずかな隙間あり。断面は不正円形で稜をもち、端部付近で細くなる。	100%	



第15図 大谷山27号墳・28号墳 墳丘測量図(S=1/200)



大谷山27号墳トレンチ配置図

大谷山28号墳トレンチ配置図

トレンチは、調査最終段階において図示範囲よりも調査区の拡張を行っている。しかし、その正確な範囲は不明であるため、本図では明示していない。

第16図 大谷山27号墳・28号墳 トレンチ配置図(S=1/200)

第4章 大谷山28号墳

第1節 発掘調査

(1) 調査の概要

大谷山28号墳は、大谷山27号墳と同一尾根上に立置する。後円部を北東に向けた墳長約27mの前方後円墳で、埋葬施設は後円部に構築された横穴式石室であるが、発掘調査の結果墳丘上には箱式石棺が埋設されていることが明らかとなっている。古墳の標高は、前方部頂で約83m、後円部頂で約81.75mである。

発掘調査では、墳形及び埋葬施設の確認を目的としてトレンチ調査を行った。トレンチは、墳丘の確認を目的として、後円部南半から前方部にかけて墳丘主軸方向のトレンチを設定し（墳丘主軸トレンチ）、これに直交する方向のトレンチを前方部前端とくびれ部付近に設定した（前方部端トレンチ・前方部西トレンチ・前方部東トレンチ）。また、後円部には、墳丘及び横穴式石室の確認を目的として西・東・北側に各々トレンチを設定した（後円部西トレンチ・後円部北トレンチ・後円部東トレンチ）。後円部東トレンチは、横穴式石室羨道部付近の北と南へも調査区を拡張している（羨道北トレンチ・羨道南トレンチ）。この他、東側くびれ部の後円部側にもトレンチを追加した（後円部南東トレンチ）。これらのトレンチは、調査の進捗に応じて拡張をおこない、また一部のトレンチで土層断面等の記録を作成した。

横穴式石室は、大谷山27号墳と同様に、人為的な攪乱を受けて毀損していた。玄室は天井石と壁体の上半部を欠失し、羨道も天井石を失っていた。横穴式石室の調査は、石室内の崩落土等を除去して玄室及び羨道を検出し、床面まで掘削した。また、羨道部の排水溝の検出を行った。石室は平面図、立面図や土層断面図等の記録作成を行った。

墳丘は、後円部墳頂の横穴式石室付近の攪乱以外には、調査所見によれば地形変化は少なくおおむね旧状を保っていたとみられる。

前方部端トレンチ、西側くびれ部、前方部東トレンチでは、円筒埴輪の基底部付近が樹立した状態で検出された。これらの埴輪は、原則としてすべての取り上げを行っている。ただし、西側くびれ部で検出された円筒埴輪3個体については、墳丘測量図への位置情報を除いて写真及び出土状況図等の記録が残されておらず、かつ当該資料は調査時ないし調査後に所在が不明となっている。このため、本報告においては当該資料の図化作業を行うことができなかった。

(2) 墳丘

前方部端トレンチ・墳丘主軸トレンチ 前方部端トレンチでは、前方部前端及び、樹立する円筒埴輪2個体を検出した（第16図）。これを前方部西円筒埴輪、前方部東円筒埴輪と呼称する。両者は約3.4m離れて樹立する。本トレンチでは円筒埴輪片が比較的多く出土しており、埴輪の樹立が確認されない範囲においても、本来は樹立していた可能性が高い。

墳丘主軸トレンチでは、南側で前方部の土層堆積状況を確認した。西壁土層断面によれば（第17図）、岩盤はトレンチ南端の標高83.7mから強い傾斜をもち大きく標高を下げており、人為的に段状に整形されていた。その北側で岩盤は緩やかに傾斜したあと、標高82.7mで樹立する前方部西円筒埴輪の基底部に至る。円筒埴輪基底部より北側では、岩盤は標高をやや上げて平坦面に至り、トレンチ南端から約6mの地点より、後円部側へ再び標高を下げていく。上部に堆積する盛土である2層は、南側では薄い、岩盤が標高を下げる北側では厚い。この2層上面は、概ね

前方部の墳頂平坦面に相当すると考えられる。

また、上述したトレンチ南端付近の岩盤の整形は東西方向に施されており、前方部前端に平行することが墳丘測量図及び写真より確認される。層位的な検討はできないが、この形状及び円筒埴輪の樹立状況から、岩盤の整形は古墳の墳丘と墳丘外との区画を意図して行われたものである可能性がある。

一方、墳丘主軸トレンチ北端から約 3.5 m の範囲では、岩盤が複数の段状に整形されていることが確認される。このうちトレンチ北端の落ち込みは、横穴式石室墓坑の南側の堀方であり、肩部の標高は 79.9 m である。5 層から 22 層は、石室構築とともに施された墳丘盛土であると考えられる。

また、トレンチ北側では箱式石棺を確認し、調査区を西側に拡張した。当該地点の土層断面より、箱式石棺の北側で墓坑の堀方が確認されている。墓坑は石棺北側では 7 層を掘削して構築されているが、南側では 5 層上面よりも箱式石棺上端のレベルが高いことから、本来は墓坑が 2 層ないし 3 層を掘削して構築されている可能性が高い。

後円部北トレンチ トレンチ南端では、横穴式石室墓坑の北側の堀方を確認した。堀方の肩部の標高は 79.2 m であり南側に比して低い。また西壁土層断面における 8～37 層は、石室の構築とともに施された墳丘盛土と考えられる。岩盤は、墓坑堀方よりも以北は緩やかに傾斜し、石室主軸より 8.2 m で岩盤の傾斜変換点を確認された。当該地点は調査所見より墳丘裾と考えられ、その標高は 77.8 m である。

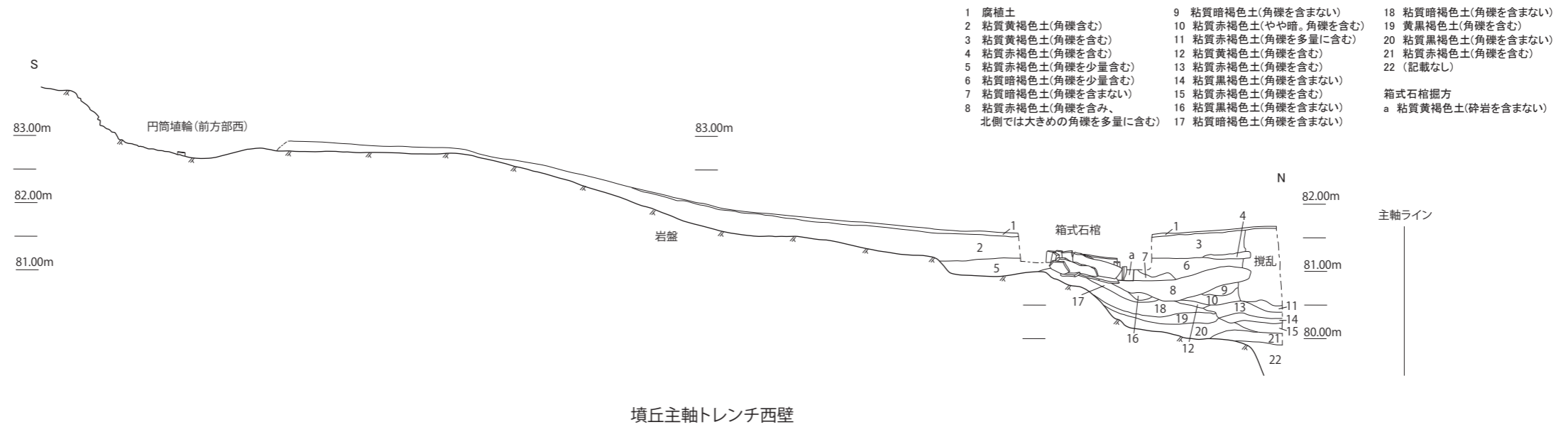
後円部西トレンチ トレンチ東端で、横穴式石室墓坑の西側の堀方を確認した。この肩部の標高は 79.4 m、トレンチ内の墓坑底面の標高は 78.44 m である。岩盤は、堀方よりも以西では緩やかに標高を下げて傾斜する。

なお、後述する玄室床面の礫床下の標高は 78.4～78.5 m、羨道床面の標高は 78.5 m、羨道部の a-a' ライン（第 18 図）における石室前庭部の岩盤の標高は 78.6 m である。したがって、墓坑構築において東西方向では岩盤が断面 L 字形にカットされ、その底面の標高は玄室及び羨道の範囲ではおおむね水平を保ち整形されるが、前庭部付近ではわずかに標高をあげると考えられる（第 22 図）。

羨道北トレンチ・羨道南トレンチ 羨道南トレンチの西壁土層断面では、岩盤が複数の段状に整形される状況が確認される（第 18 図・第 22 図）。トレンチ北端の落ち込みは墓坑堀方に相当し、肩部の標高は 79.1 m である。一方、羨道北トレンチの南端では、これに対応する墓坑堀方が標高 79.0 m で検出された。墓坑よりも以北では、岩盤が北側へ緩やかに傾斜し、墳丘の盛土が施されている。なお、石室主軸より 6.2 m の地点で岩盤の傾斜変換点を確認され、墳丘裾と判断される。その標高は 77.9 m である。

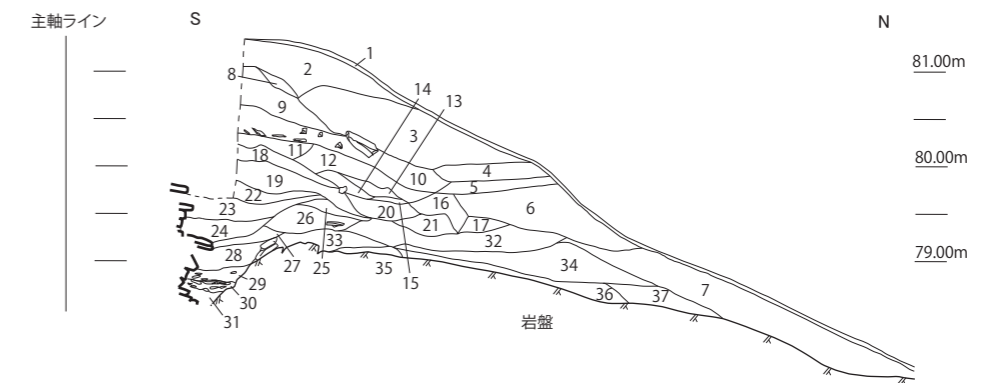
以上の各トレンチの所見から、横穴式石室の墓坑は、次のような構造であると考えられる。

墳丘主軸トレンチ及び羨道南トレンチ付近の石室南側の地点では標高が高く、岩盤を段状に整形しつつ墓坑を掘削しており、墓坑の深度は約 0.7～0.9 m である。一方、後円部北トレンチ及び羨道北トレンチ付近の石室北側の地点は標高が低いために墓坑以外には段状の整形痕をもたず、墓坑の深度は約 0.4～0.6 m と浅い。したがって、墓坑の構築方法は、後円部付近において、北側に傾斜する岩盤を段状に整形して平坦面を造り、さらに同様の整形を繰り返して、緩やかに北側へ傾斜する広い平坦面を造り出す。その後、東西方向に岩盤を L 字形にカットして墓坑を構築し、墓坑底面は玄室及び羨道付近で水平を保ち整形したと考えられる。

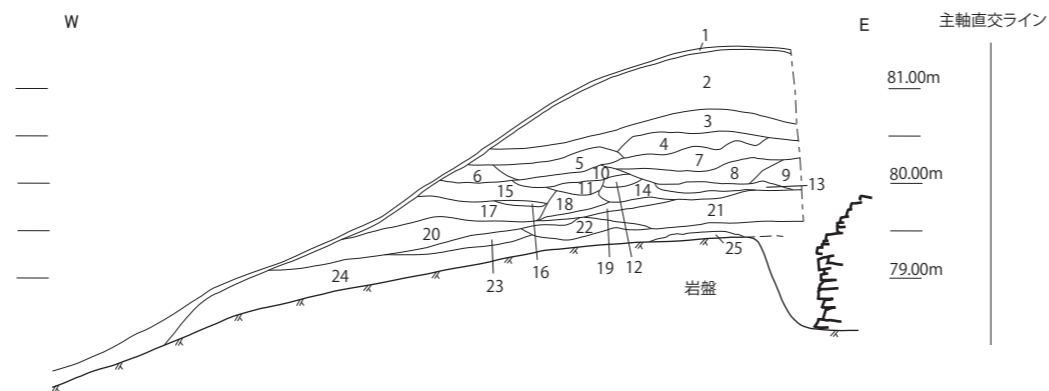


墳丘主軸トレンチ西壁

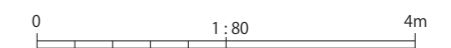
- | | | |
|------------------------------|-------------------------|-----------------------------|
| 1 腐植土 | 13 粘質黒褐色土 | 25 粘質黒褐色土 |
| 2 粘質黄褐色土(軟質) | 14 粘質赤褐色土(角礫を含む) | 26 粘質黄褐色土(角礫を含まない) |
| 3 粘質黄褐色土(やや暗い。しまりあり。角礫を少量含む) | 15 粘質赤褐色土(角礫を含む) | 27 粘質黄褐色土(角礫を少量含む) |
| 4 粘質赤褐色土(角礫を含む) | 16 粘質黄褐色土 | 28 粘質赤褐色土 |
| 5 黒色バンド | 17 粘質黒褐色土 | 29 砕岩層(角礫を多量に含む) |
| 6 粘質赤褐色土(角礫を含む) | 18 粘質黒褐色土 | 30 砕岩層(角礫を多量に含む) |
| 7 粘質黄褐色土(角礫を含まない) | 19 粘質赤褐色土(角礫を含む) | 31 (記載なし) |
| 8 粘質黄褐色土(しまりあり。角礫を少量含む) | 20 粘質黒褐色土 | 32 粘質黄褐色土(角礫を含む) |
| 9 粘質黄褐色土(やや明るい。しまりあり) | 21 粘質暗褐色土 | 33 暗褐色土(角礫を含む) |
| 10 粘質暗褐色土(角礫を含む) | 22 粘質黒褐色土 | 34 粘質黒褐色土 |
| 11 粘質黄褐色土(やや明るい。角礫を含む) | 23 粘質赤褐色土(角礫を含む) | 35 赤褐色土(角礫を含む) |
| 12 粘質赤褐色土(角礫を含む) | 24 赤褐色土(やや黄みをおびる。角礫を含む) | 36 粘質黄褐色土(やや角礫を含む) |
| | | 37 粘質黄褐色土(やや黄みをおびる。砕岩を含まない) |



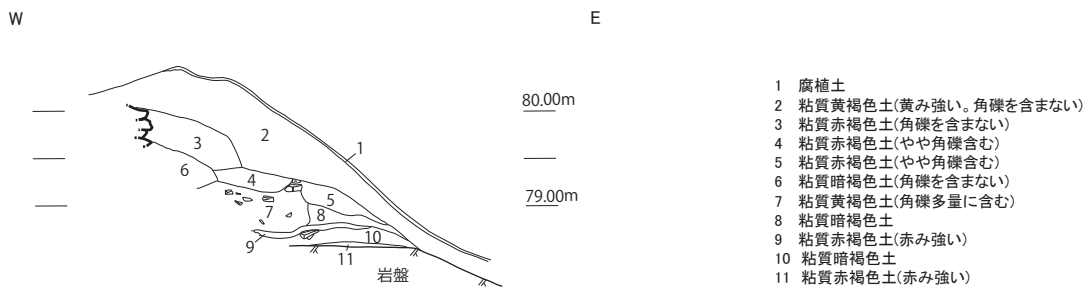
後円部北トレンチ西壁



後円部西トレンチ南壁



第17図 大谷山28号墳 調査区土層断面図(1) (S=1/80)

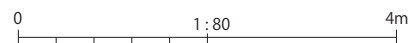


羨道部(第20図a-a'ライン)



羨道南トレンチ西壁

羨道北トレンチ西壁



第18図 大谷山28号墳 調査区土層断面図(2) (S=1/80)

前方部西トレンチ（西側くびれ部） 前方部西トレンチを北側に拡張した結果、西側くびれ部に樹立する円筒埴輪基部を3個体確認した（第16図）。これらを1号から3号円筒埴輪と呼ぶ。また、西側くびれ部では樹立したものではないが動物埴輪とみられる形象埴輪片が検出され、馬形埴輪と推定される。

前方部東トレンチ 前方部東トレンチの東端を南北に拡張した範囲において、標高79.0 m付近で樹立する円筒埴輪基部1個体を確認した。この他、付近では少量の円筒埴輪片が出土した。

調査所見によれば、付近において造り出し等の施設は確認されていないことから、当該円筒埴輪の性格については不明である。

以上の各調査区の所見から、大谷山28号墳の墳丘は、以下のように復元される。

後円部北トレンチ及び羨道北トレンチで検出された岩盤の傾斜変換点を後円部の墳丘裾と判断し、また、西側くびれ部で検出された円筒埴輪列の外側に後円部墳丘裾の円周ラインが位置するとした場合、復元される後円部の直径は約16～17 mとなると考えられる。また、前方部については、前方部前端付近の墳丘裾が、前方部東トレンチの円筒埴輪列よりも南側、岩盤が段状に整形された下端に位置するとみられる。

円筒埴輪列は、西側くびれ部と前方部前端で樹立する円筒埴輪が部分的に検出されたことから、本来は連続して墳丘を圍繞していた可能性があることが指摘できるととどまる。前方部東トレンチ東端で検出された樹立円筒埴輪も、東側くびれ部よりも東側の地点において墳丘付随施設の存在が示唆されるが、詳細は不明である。

以上の情報と、墳丘測量図から推測される墳丘主軸や前方部の形状を加味して復元される大谷山28号墳の平面形態は、第28図のとおりである。大谷山28号墳は、後円部径約16～17 m、墳長約27 mの前方後円墳と推定される。

（3）埋葬施設

埋葬施設は、後円部の中央やや東よりに横穴式石室が、後円部から前方部に至る墳丘主軸ライン付近に箱式石棺が構築されている。

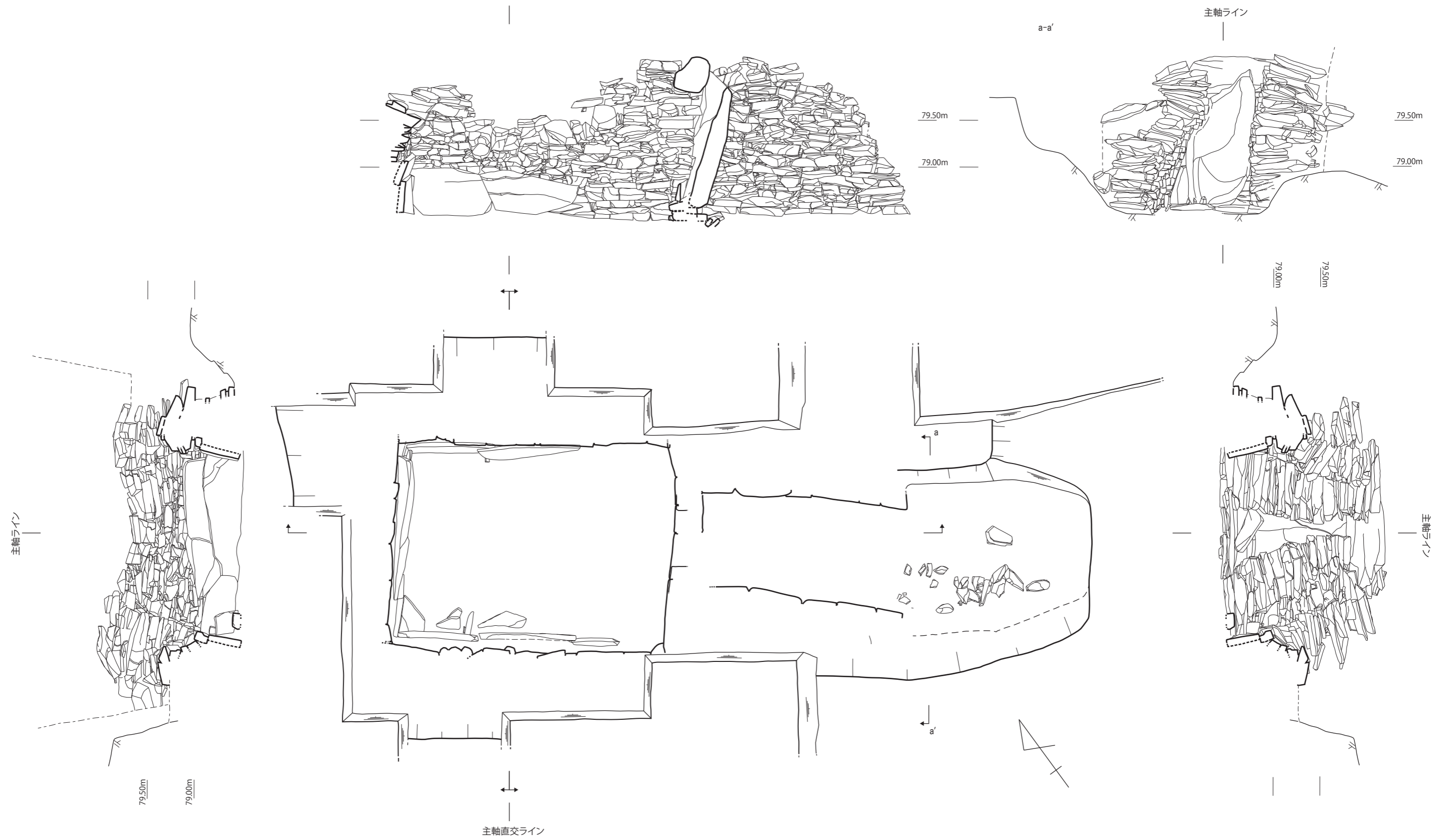
横穴式石室（第19・20図）

①概要 横穴式石室は、前述のように攪乱を受け毀損しており、石室内部も石室崩落後の堆積が確認された。この攪乱土を除去した結果、玄室では小円礫が敷かれた礫床が検出され、床面を確認した。

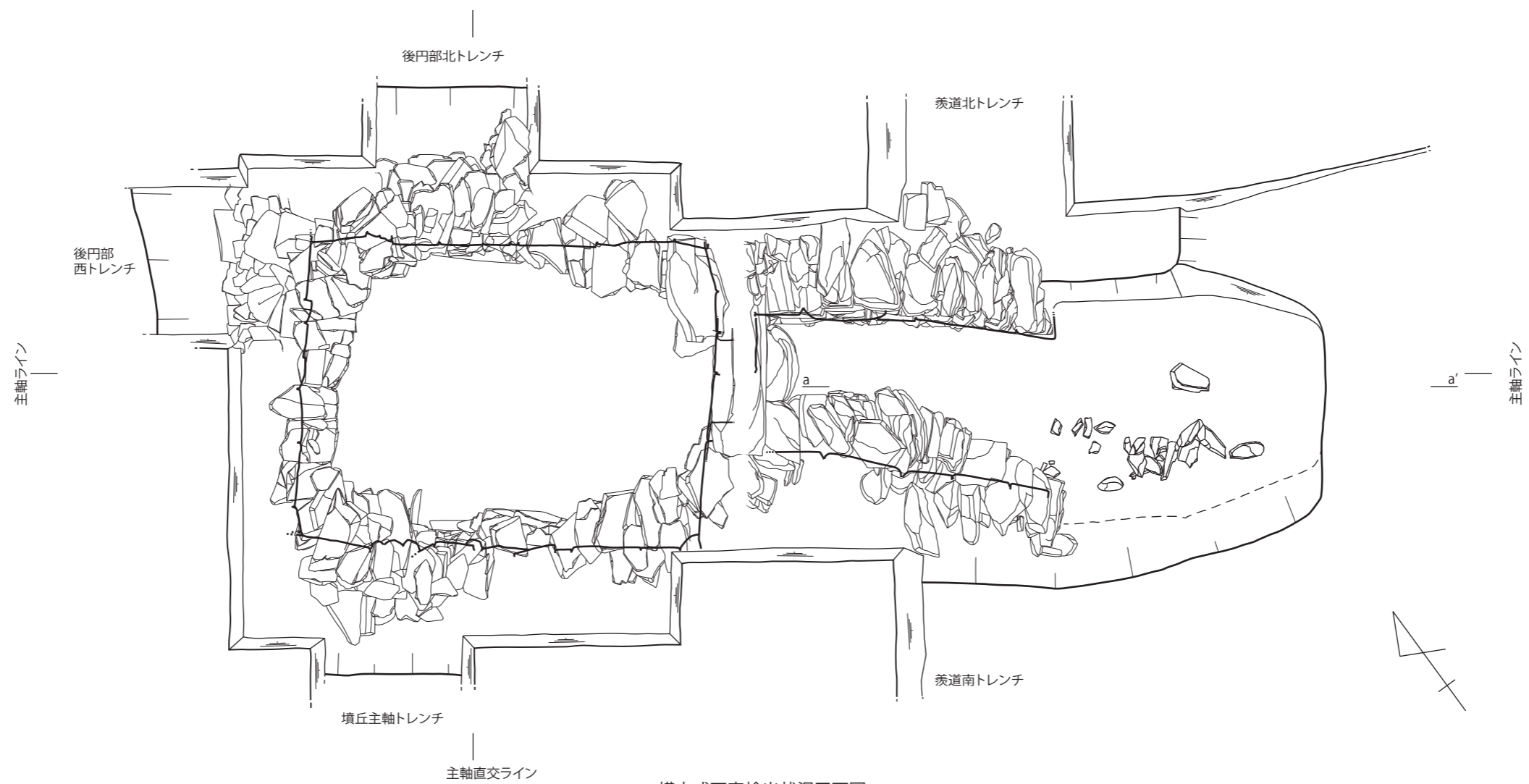
横穴式石室は、玄室と、玄室前道、羨道から構成され、前壁の両側に袖部をもつ両袖式の構造である。右袖部が幅0.93 mであるのに比して、左袖部は幅0.70 mとやや短く、玄室前道は奥壁からみてわずかに左寄りに接続する。

石室の法量は、玄室長2.99 m、奥壁幅2.14 m、玄室前道長0.31 m、玄室前道幅0.60 m、羨道左側壁長2.18 m、右側壁長2.06 m、羨道幅1.09 mである。玄室で検出した床面の標高は、奥壁で78.48～78.55 m、左側壁の奥壁寄り78.47 m、前壁寄り78.42 mである。この床面の標高は、立面図と写真記録より礫床上面ではなく、円礫を除去後の標高とみられる。

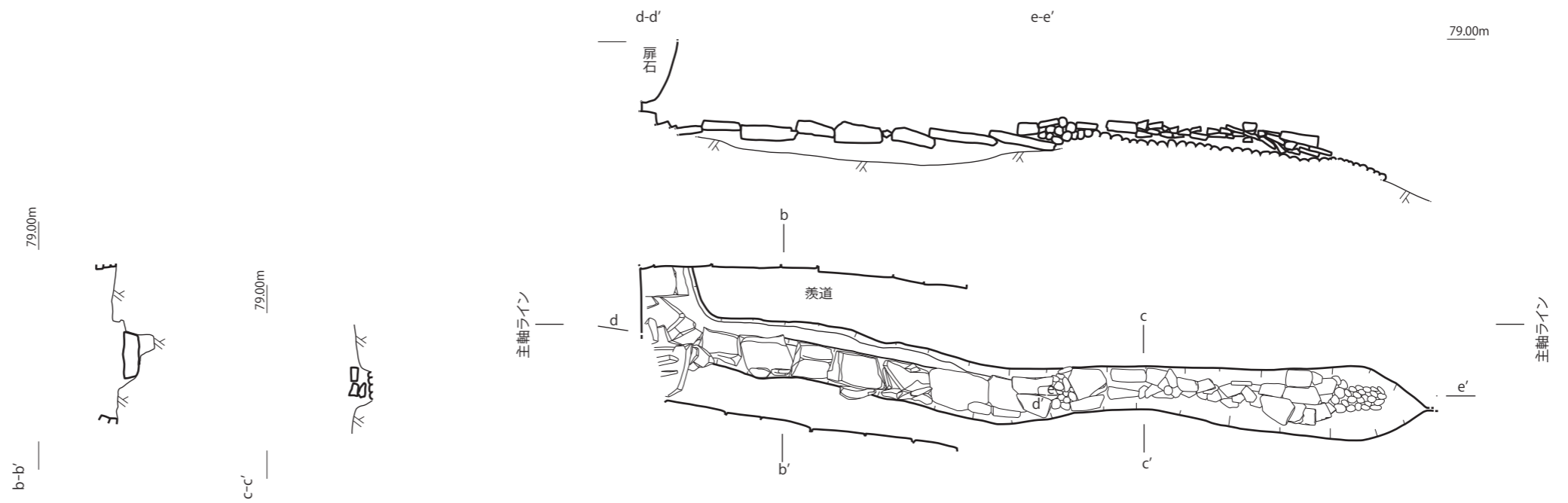
②玄室 玄室は天井石を含む上部が欠失しており、残存高は奥壁で約1.5 m、左側壁で約1.4 mである。各壁体は天井部に向かって持ち送りが認められ、その角度は以下の通りである。左右の側壁の傾斜は、左側壁は前壁側で75度、奥壁側で67度、右側壁では前壁側で69度、奥壁側で72度である。奥壁の傾斜は、下部は不明であるが、床面から高さ0.7 m以上では60度である。



第19図 大谷山28号墳 横穴式石室実測図(1) (S=1/40)



横穴式石室検出状況平面図



羨道部排水溝平面図・断面図



第20図 大谷山28号墳 横穴式石室実測図(2) (S=1/40)

前壁の傾斜は、高さ 0.7 m までは 78 度、0.7m 以上では 73 度である。

玄室の側壁及び奥壁の石積みは、結晶片岩の扁平な石材を用いており、主に小口面を壁体を使用する小口積をおこなっている。玄室残存部の上部における側壁及び奥壁の石積みは、平面図（第 20 図）より、幅約 0.1～0.25 m、長さ約 0.2～0.4 m の石材を多用して、小口積を基本としていることが確認できる。

一方、前壁で用いる石材は幅約 0.3～0.4 m、長さ約 0.5～0.7 m で比較的大形の石材を用い、長側辺の側面を壁体として使用する平積を原則とする。ただし、前壁の右袖部側の石積みは、上述した平積部分よりも右側壁側において、小形の石材を用いた小口積を併用しており特徴的である。その結果、右袖部の幅は、左袖部の幅よりも約 0.2 m 長くなり、玄室前道・羨道部が石室主軸よりも左寄りに接続する構造となっている。

なお、右袖部側の石積みは大きく内側に張り出しており、土圧による影響を受けているとみられる。

③仕切石 玄室内では、遺体を置く施設である屍床の仕切石が確認された（第 19 図）。仕切石は板状の石材を用いて、奥壁沿いに長さ 1.54 m と 0.68 m の 2 枚の板石を、また右側壁沿いに長さ 0.86 m と 1.04 m の 2 枚、左側壁沿いに長さ 0.94 m と 1.10 m の 2 枚の板石を各々立てている。さらに右側壁側においては、2 枚の板石のうち北側の板石に直交させて、小形の板石が立てられていた。調査の所見によれば、両側壁沿いの各々 2 枚の板石うち北側の各 1 枚と、奥壁沿いの 2 枚の板石は一組となり、玄室床面に下端を埋めた状態で検出されたとされる。また、両側壁沿いの板石のうち南側の各 1 枚は、床面上に置かれた状態であった。南側の 2 枚の板石は対となり、北側の板石の区画とは別の新たな区画として後に追加された可能性があり、直交する小形の板石は両者の区画を意図したものと考えられる。また、北側の区画と南側の区画はともに、西寄りに小形の板石が敷かれた状態で検出され、前者は 2 枚、後者は 1 枚が確認された。

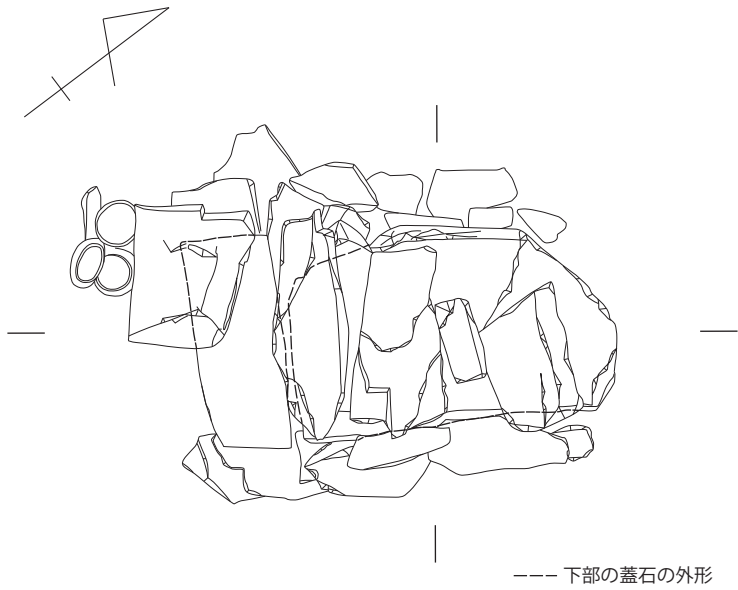
④玄室前道・扉石 玄室と羨道の間には、長さ 0.31 m、幅 0.60 m の玄室前道が接続する。玄室前道の側壁は、石材の小口を壁面として各段を 1 石ないし 2 石により積み上げている。その結果、前述のように玄室前壁側は平積となる。

また、石積み残存範囲における最上段では、羨道側において長さ約 1.3 m、幅 0.4 m の大形の石材が梁状に架けられていた。この部位は、左側壁側は梁状の石材よりも玄室側に前壁を構成する石材が積まれており、その上面は標高 80.14～80.17 m とほぼ同レベルであり、その上部に天井石が設置されていたものと推定される。

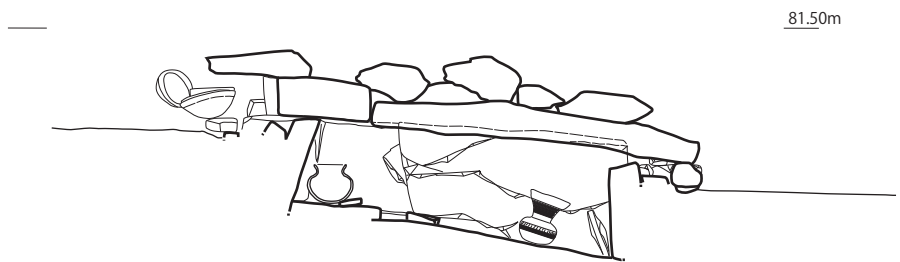
玄室前道の入口は、床面からこの梁状の石材までを覆うように、大形の板状の石材を扉石として閉塞していた。扉石は、長さ約 1.5 m、幅約 0.7 m である。

玄室前道の床面の構造は、当該範囲の平面図等の記録がなく不明な点が多いが、立面図等より以下の点が明らかにできる。まず、玄室前道では、両袖部の石積み間において、玄室床面よりやや上位に幅約 0.9 m の板石が設置されており、当該石材は玄室前道基石と判断される。基石の上面の標高は 78.6 m であり、玄室床面よりも約 0.2 m 高い。奥行きは明らかではないが、断面図より扉石の下部までには達しないものとみられる。また、基石の両端は、両袖部の石積みに組み込まれており、基石の下部には小形の板石が 1～2 段程度積まれており、玄室床面直上に設置はしていないと考えられる。

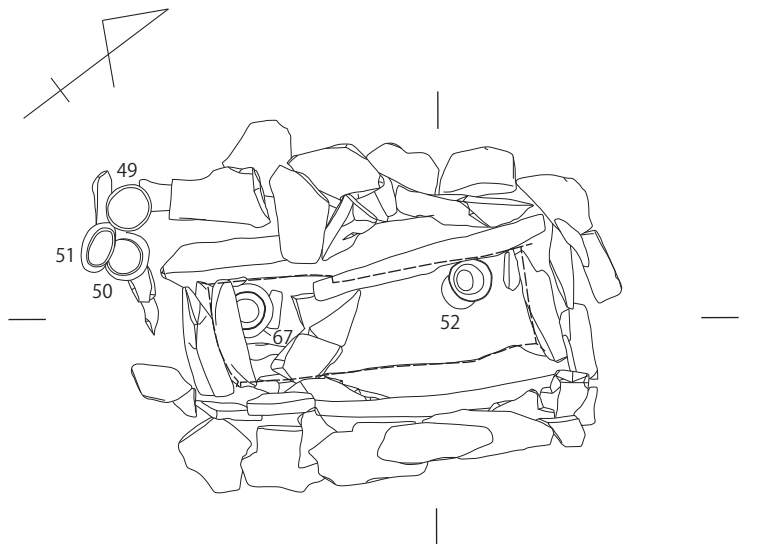
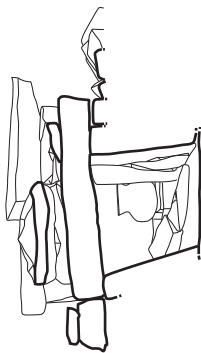
⑤羨道 羨道の平面形態は、その主軸が玄室の主軸とは平行せず、わずかに南側に振れ斜行する特徴をもつ。その角度は主軸に対して約 9 度である。



箱式石棺 平面図(蓋石検出状況)



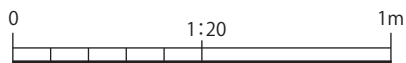
81.50m



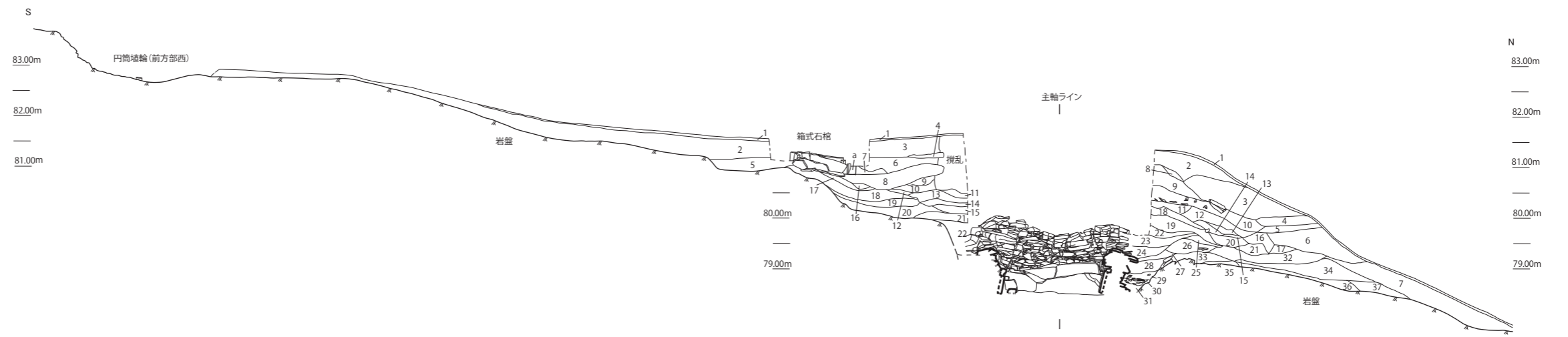
土器の番号は第27図の遺物番号を示す

--- 長側石・短側石の下端ライン

箱式石棺 平面図・立面図



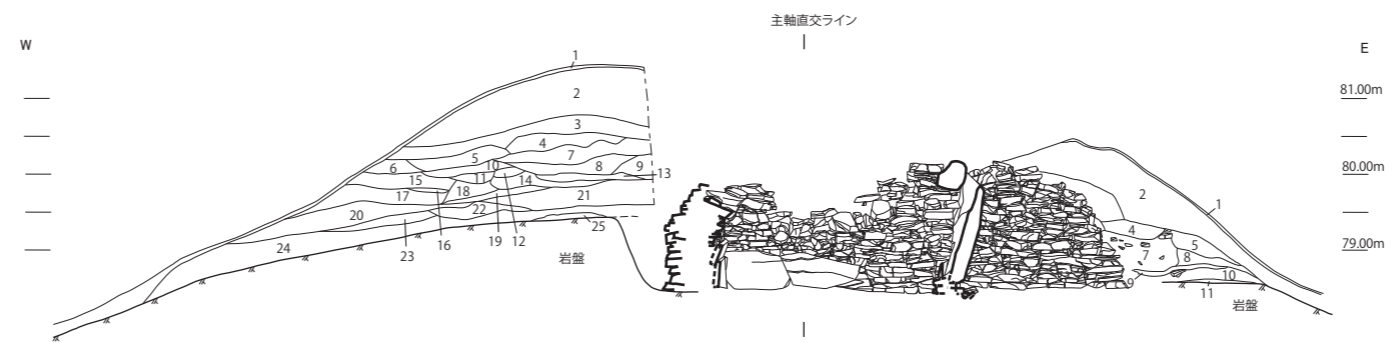
第21図 大谷山28号墳 箱式石棺実測図(S=1/20)



墳丘主軸トレンチ西壁土層断面

横穴式石室奥壁立面

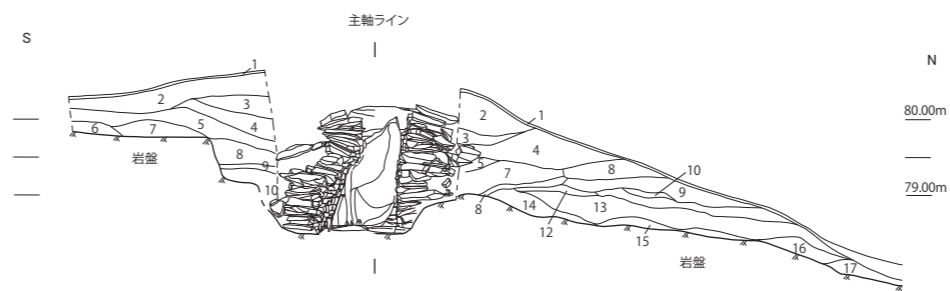
後円部北トレンチ西壁



後円部西トレンチ南壁土層断面

横穴式石室左側壁立面

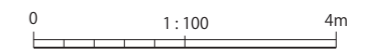
羨道a-a'ライン土層断面
※土層は羨道部の堆積を示す



羨道南トレンチ西壁土層断面

羨道部側立面

羨道北トレンチ西壁土層断面



第22図 大谷山28号墳 墳丘断面図 (S=1/100)

羨道は、玄室と同様に天井部が欠失しており、残存部の高さは約 1.7 m である。羨道の石積みも扁平な石材を用いて小口積により構築している。石材は、幅約 0.1 ～ 0.3 m、長さ約 0.2 ～ 0.6 m 前後の石材を多用する。

⑥排水溝 羨道部において排水溝を検出した。排水溝は、岩盤を溝状に整形しており、幅 0.3 ～ 0.4 m、長さ 5.5 m である。溝底部の標高は、b-b' ライン(第 20 図)で 78.2 m、排水溝末端で 78.0 m であり、緩やかに標高を下げ傾斜する。羨道の北端より 2.9 m の範囲では、上部に蓋石を施しており、蓋石は幅約 0.2 ～ 0.25 m、長さ約 0.25 ～ 0.4 m の板石を規則的に置いている。一方、これらの範囲よりも以南では、排水溝末端までの範囲において円礫を内部に充填しており、その上部に蓋石を施している。これらの蓋石は、小形の板石を不規則に敷いており、前者の蓋石とは大きく異なっている。

排水溝は、羨道北端に於いて右側へ屈曲して延びると考えられるが、調査所見では玄室の各壁体の下に排水溝がめぐり、羨道部に接続するとみられている。

⑦遺物 遺物は、玄室攪乱土及び玄室床面から土師器、須恵器、円筒埴輪片が出土した。また、羨道では、羨道から羨門にかけて土師器、須恵器、円筒埴輪片が出土した。これらは石室が攪乱を受けていたために原位置ではないと考えられる。

埴輪は墳頂から石室内に転落したものとみられ、土器類の一部も同様のものを含む可能性がある。

箱式石棺(第 21 図)

墳丘主軸トレンチの北側で箱式石棺が検出された。攪乱を受けておらず、構築当時の原状を良く保っていた。前述のように箱式石棺は墳丘盛土を掘削して墓坑を設け、墓坑内に構築している。箱式石棺の直上には蓋石が設置されていた。蓋石は、長さ 0.85 m、幅 0.52 m の板石と、長さ 0.56 m、幅 0.23 m の 2 枚の板石を用いており、さらにその上部には 6 枚の小形の板石を置いている。

石棺は底石を有し、その上部に側壁を設置していた。東側の長側壁は一枚石で、西側の長側壁は 2 枚の板石を組み合わせている。小口側の短側壁は、長側壁で挟むように組み合わせており、側石は口の字形の配置をしている。石棺の内法は長さ 0.83 m、幅 0.25 ～ 0.27 m である。底石の上面の標高は、南側で 81.00 m、北端が 80.90 m であり、やや北側へ傾斜する。石棺内には、南側に扁平な板石が 4 枚敷かれており、南西隅で土師器壺(第 27 図 67)が、石棺北側の長側壁沿いで須恵器甕(52)が配置されていた。これらは原位置を保つものと考えられる。

石棺の側壁の外側には、長さ約 0.1 m ～ 0.3 m の扁平な板石が分布しており、これらは側壁を支えるための裏込めとみられ、墓坑と石棺の間の隙間に充填されたものと考えられる。これらの板石の分布範囲の南西付近では、須恵器蓋杯(第 27 図 49 ～ 51)が 3 点出土した。このうち杯身 50 の底部付近の標高は 81.27 m で、近接する長側壁・短側壁上端の標高 81.26 ～ 81.271 m と同レベルである。したがって、これらの蓋杯は、石棺の埋納に伴い墓坑内に配置されたものと考えられる。

第2節 出土遺物

(1) 埴輪

大谷山28号墳より出土した埴輪は、円筒埴輪と、動物埴輪、家形埴輪等の形象埴輪が確認された。

円筒埴輪と形象埴輪は、色調は橙色を主体とし、明赤褐色のものが少量認められること、胎土に砂粒を多く含み一部に結晶片岩を含むことなどの共通した特徴をもつ。

本節では、大谷山27号墳と同様に、円筒埴輪については樹立埴輪のほか、包含層出土資料の一部について図化・掲載をおこない、これらの全体的特徴について項目ごとに記述した。また、形象埴輪は器種ごとに各資料の特徴について記述する。

円筒埴輪・朝顔形埴輪（第23～25図）

出土した円筒埴輪は、普通円筒と朝顔形埴輪があり、各調査区で出土した円筒埴輪のうち、口縁部形態や調整等の確認できる資料はすべてIV群系円筒埴輪（紀伊型・環畿内南部型）の特徴をもつ。このことから、墳丘に樹立される円筒埴輪は、IV群系埴輪に限られると考えられる。

①器形・法量

円筒埴輪の全体を復元できた個体がなく、器高や突帯の段数等は不明である。前方部東円筒埴輪2・3は同一個体とみられ、口径が復元径28cm、底径が18cmで逆台形の器形を呈するとみられ、口縁部は端部が断面三角形を呈しIV群系埴輪の特徴をもつ。

この他、基底部のみが残存する個体では、底部径は、約17～19cmの個体が認められ、特に約17～18cmの個体が多い。

②調整

外面調整は1次調整にタテハケ、ナナメハケを施し、2次調整にヨコハケを施すことを基本とする。ヨコハケは口縁部から体部にかけて施され、下段突帯よりも下位に及ぶことは少ない。内面調整はナデを基本とするが、ナナメハケを明瞭に残す例もある（15）。また、19・20は口縁部付近で明瞭に2次調整のヨコハケを施す。

③基底部調整

基底部の外面調整は、ナデのほか、タテハケや板状工具によるオサエが観察される。ナデによりハケメを完全に消し去らずに、タテハケが残存し広範囲で観察される例も少なくない（4・6・12・15・16）。内面調整は、ユビナデやナデ、タテハケ、ナナメハケ、ヨコハケが認められる。特に外面と同様にタテハケが残存する例が多く（4・12・15・16）、大谷山27号墳出土円筒埴輪とはやや異なる特徴である。3は、倒立して板状工具により押さえたとみられる痕跡が底面に認められる。

④突帯

口縁部端部から最上段の突帯までの間隔は、2が8.5cmである。また、15における突帯間隔は、8.7cmである。底面から下段突帯までの高さは、1は17.2cm、2は19.1cmである。

突帯の断面形態は、M字状となるもの（1・15）と、台形状ないし三角形状を呈するもの（2・3・4）がある。

⑤口縁部

口縁部は、端部が肥厚して外側に突出するIV群系円筒埴輪の特徴をもつ。これらは、端部内面をヨコナデによりわずかに凹ませ、外面を強いヨコナデにより外方へ突出させるものと、内面の

ヨコナデは顕著ではなく外方のみ突出させたものがある。5は朝顔形埴輪の口縁部である。

⑥胎土・色調

色調は、橙色を主体とし、明赤褐色を呈するものを少量認められる。胎土は5～10mm前後の結晶片岩や、5mm前後の赤色酸化した砂粒を含むものが多い。

⑦突帯設定技法

1は最下段突帯において剥離が認められ、剥離面において凹線が確認できる。突帯間隔設定技法を用いて突帯が設定された可能性が高い。凹線は、底面からの高さ16.2cmの位置に認められる。

形象埴輪(第26図)

形象埴輪は、動物埴輪、家形埴輪があり、その他、器種の特定が困難な形象埴輪がある。

動物埴輪は、脚部(31～35)、たて髪(36)、尻尾(38・39)があり、37は障泥の可能性がある。これらは、出土地区不明の資料を除き、西側くびれ部より出土した。橙色を呈し胎土の特徴も類似することから、同一個体の可能性がある。器種は馬形埴輪である可能性が高い。脚部(31～35)は、いずれも脚端部を肥厚させる形態である。31は底部の直径約11.5cmである。たて髪(36)は、端部で肥厚する形態である。尻尾は、尻尾先端部(38)と、尾の付け根から尻部付近(39)が認められる。37は障泥の可能性があり、沈線により線刻が施される。

家形埴輪とみられる資料は、40～42がある。40は壁体、41・42は壁体の基部ないし、裾廻り突帯部と考えられる。

43～48は器種の特定の難しい不明形象埴輪である。西側くびれ部、前方部東トレンチ、前方部端トレンチ等より出土した。43は蓋の笠部の可能性がある。44は家形埴輪の棟木、45は人物埴輪の頭部の可能性もある。48は沈線が二条施され、間に刺突文が認められる。

(2) 土器類

土器類は、墳丘及び横穴式石室、箱式石棺の埋葬施設より須恵器・土師器が出土した(第27図)。須恵器の器種には蓋杯、高杯、甗が、土師器の器種には壺、ミニチュア土器が確認される。

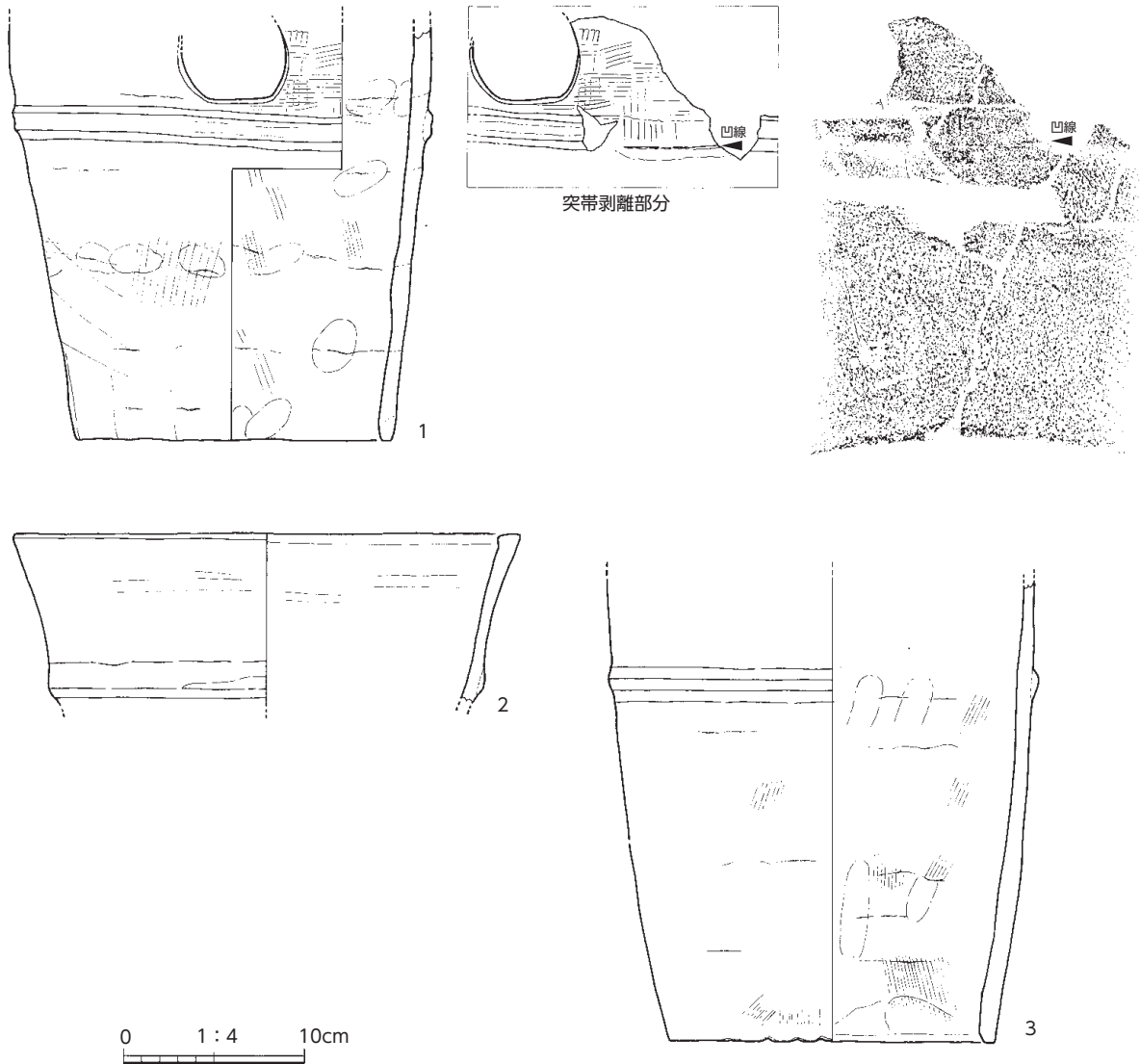
須恵器49～52、土師器67は箱式石棺から出土した。49～51は箱式石棺の棺外、52・67は棺内より出土している。

49は杯蓋で、口径は12.3cm、器高5.1cmである。稜線は丸みをもち突出はやや鈍く、端部は内傾して面をもつ。50・51は杯身である。50は口径11.0cm、器高5.2cmで、口縁部は内傾して立ち上がり端部に明瞭な面をもつ。51もやや内傾して立ち上がり、端部に面をもつ。口径は10.9cm、器高5.7cmである。52は甗で、口径11.8cm、器高12.9cmである。口縁部は段をもち、端部は内傾して面をもつ。頸部外面には振幅の小さな波状文が施される。胴部は最大径付近に櫛状工具の列点文とカキメ調整が認められる。

67は土師器甗で、口径10.0cm、器高11.2cmである。丸みのある胴部から屈曲して口縁部に至り、端部はやや細く丸みをもつ。外面にはハケメのちナデ調整が施される。接合痕が明瞭に残る。

須恵器53～56、土師器68～71は横穴式石室から出土した。

53・54は玄室からの出土である。53は杯蓋で、口径は14.0cm、器高5.3cmである。稜線は丸みをもち突出はややにぶい。54は甗で、口径10.9cm、器高11.0cmである。頸部は52に比して短く、端部は内傾して面をもち、明瞭に凹む。頸部と口縁部には波状文が施される。胴部には浅い沈線が認められ、以下に波状文が施される。須恵器55・56は羨道から出土した。55は無蓋高杯の杯部で、口縁部と底部の境界に突出部をもつ。口径は13.4cmである。56は高杯の脚部で、3方向に透孔を

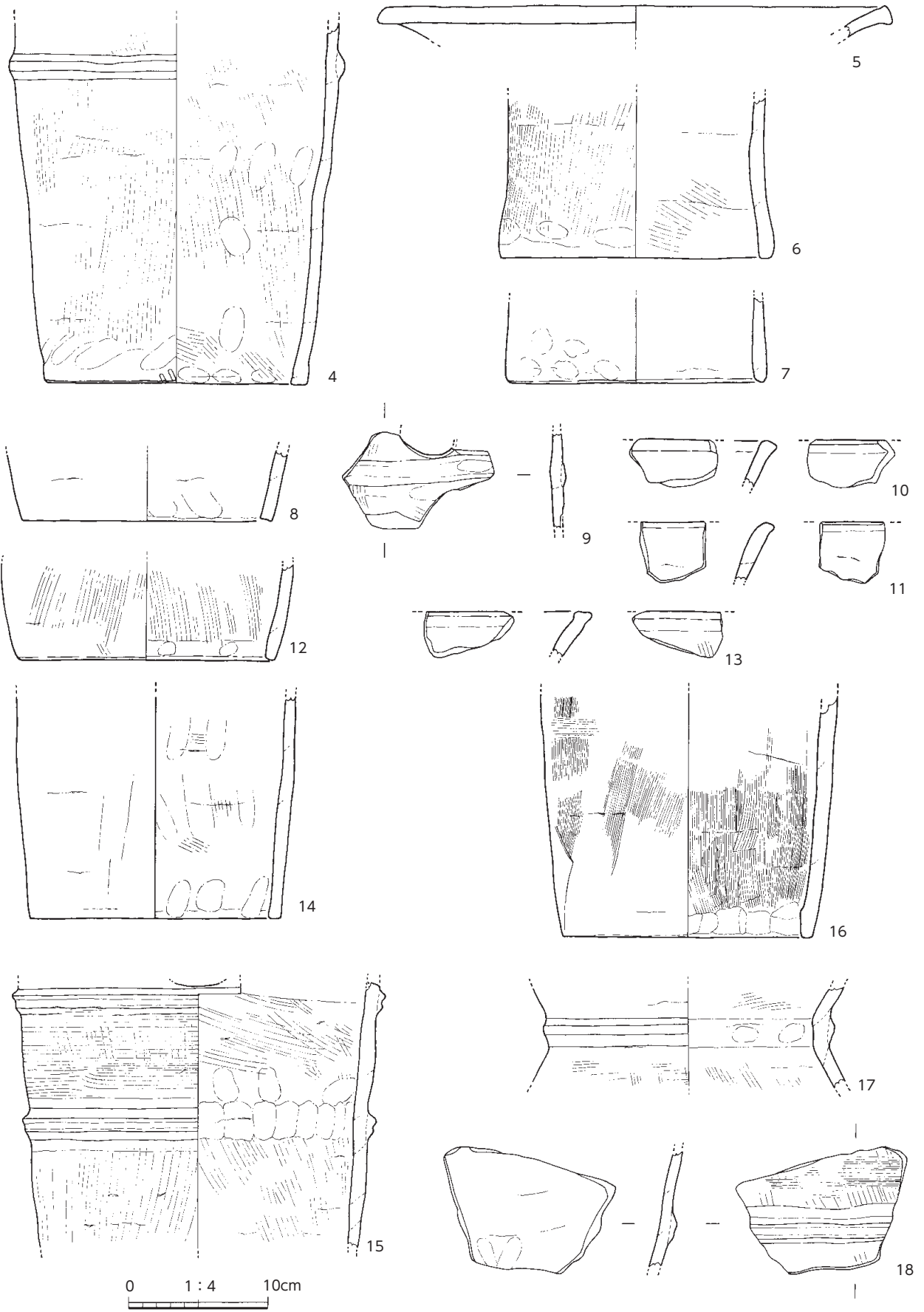


第 23 図 大谷山 28 号墳出土 円筒埴輪 (1)

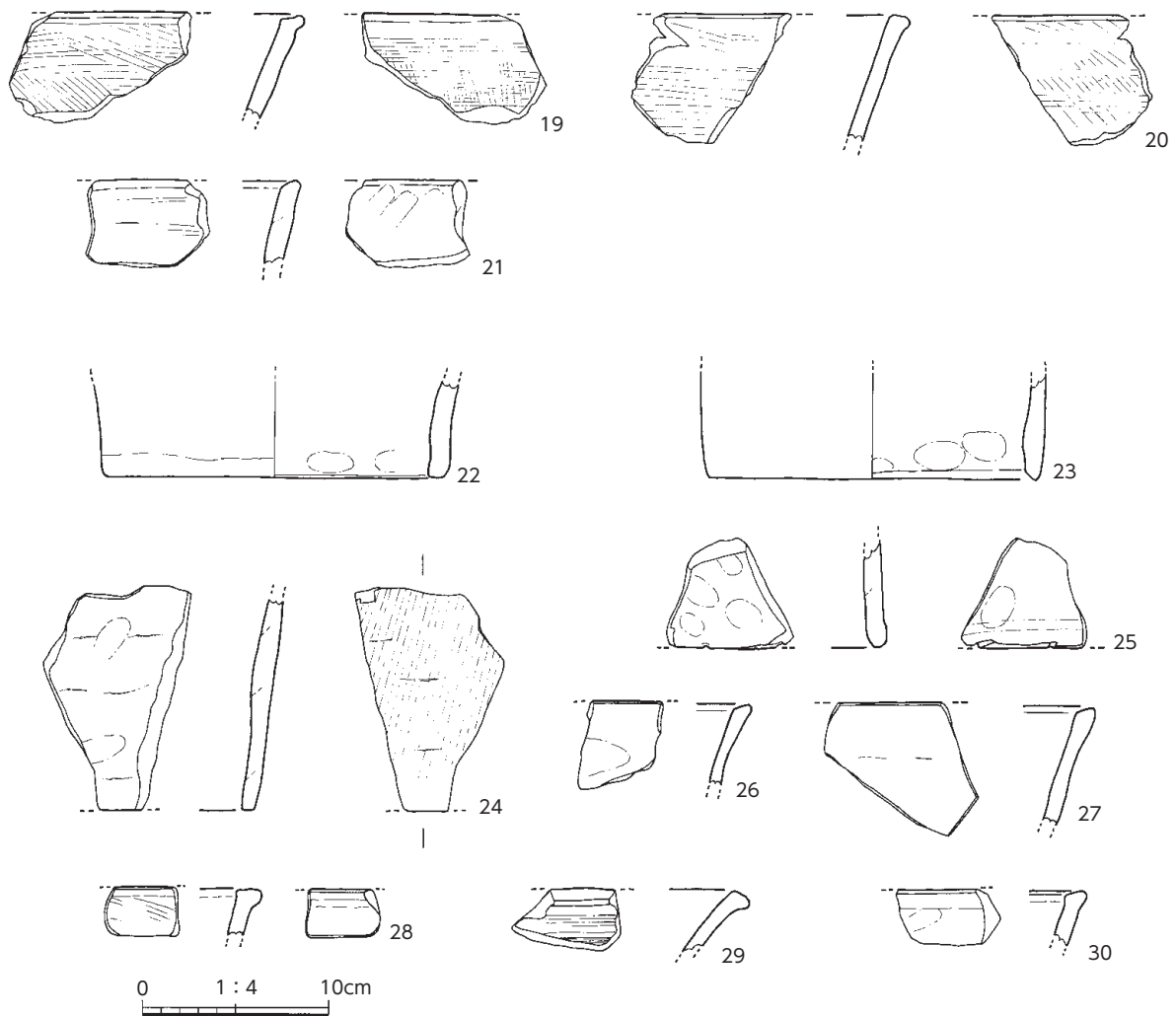
もち、脚端部は外面に段をもち屈曲して丸くおさめる。外面はカキメ調整が施される。脚端部径 9.0 cm である。

68・69 は土師器壺で、同一個体である可能性が高い。羨道及び玄室より出土した。球形の胴部から屈曲して口縁部に至る。口縁部は端部がわずかに外反し、丸くおさめている。70・71 はミニチュア土器の高杯で、玄室床面から出土した。いずれも脚部とみられる。70 は底径 3.6cm で内面がやや凹む。71 は底径 2.8cm で中実である。

須恵器 57～66 は、出土した調査区は不明である。57～61 は杯蓋である。57 は口径 12.8cm、器高 4.5 cm で、稜の突出はにぶい。60・61 も同様に稜は丸みをもち突出がにぶい。58・59 は稜が比較的



第 24 图 大谷山 28 号墳出土 円筒埴輪 (2)



第 25 図 大谷山 28 号墳出土 円筒埴輪 (3)

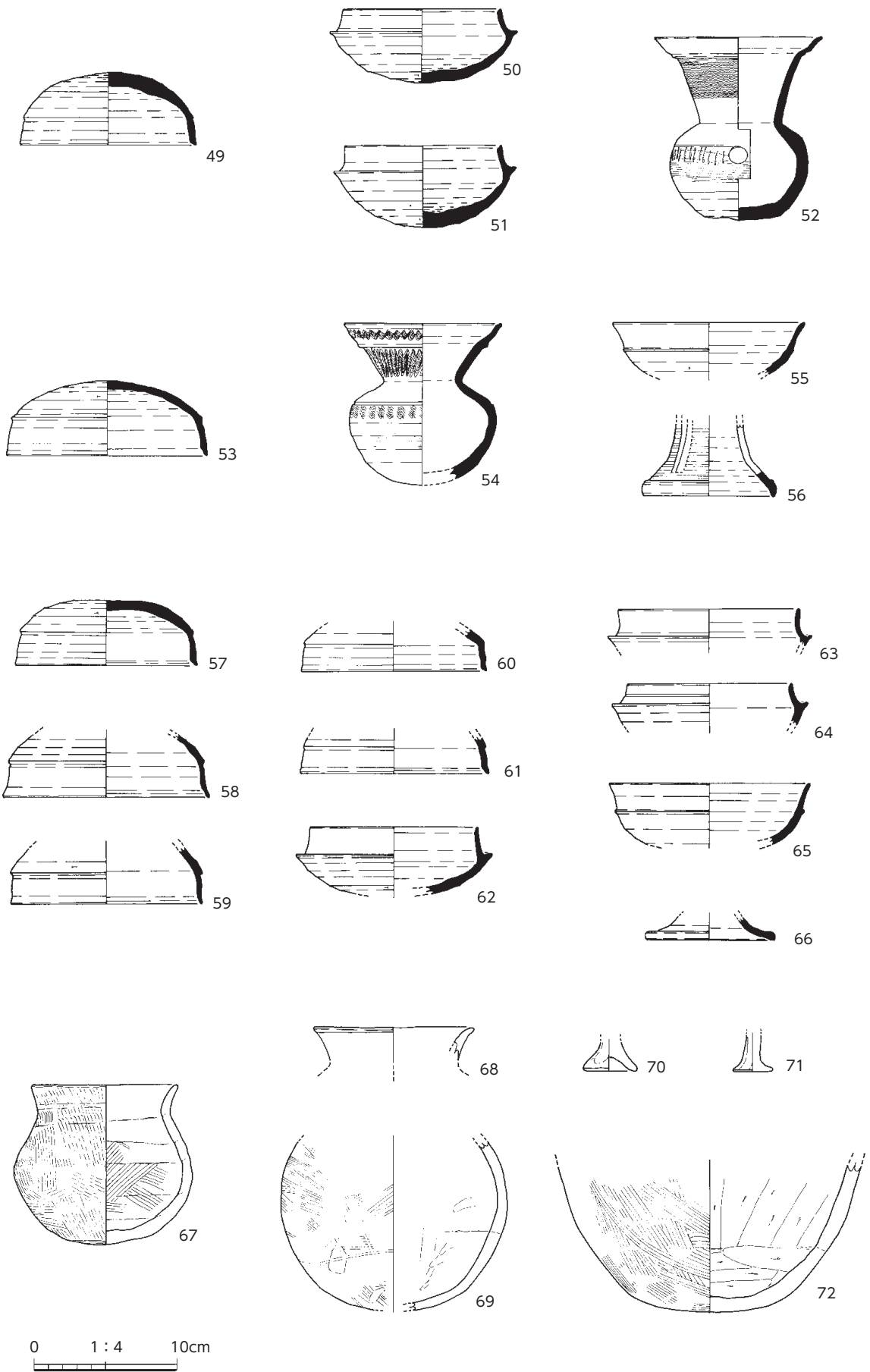
突出する特徴をもつ。62～64は杯身である。口縁部は、63が直立気味に、62・64は内傾して立ち上がるが、いずれも端部は丸みをもつ。65は無蓋高坏の杯部、66は高杯脚部である。72は土師器甕で、くびれ部より出土した。丸底で、外面は斜位のハケ調整、内面はケズリ調整が施される。

以上の出土土器のうち、須恵器の時間的な位置づけは、箱式石棺出土の蓋杯50・51が陶邑窯跡群における編年のTK47型式期、甕52がMT15型式期の特徴をもち、一方、玄室出土の蓋杯53はMT15型式期、甕54はTK47型式期の特徴をもつ。出土地点不明資料の蓋杯は杯身63・64がやや新相の特徴をもつが、その他はMT15型式期の特徴を有するものが多い。

したがって、大谷山28号墳出土須恵器は、やや新しい特徴をもつ土器も含むものの、おおむ



第 26 图 大谷山 28 号墳出土 形象埴輪



第 27 图 大谷山 28 号墳出土 土器類

ねTK 47～MT 15 型式期の特徴をもつ土器群を主体にしていると考えられる。

第3節 まとめ

発掘調査及び調査記録の検討の結果、大谷山 28 号墳は、墳長約 27 m の前方後円墳であることが明らかとなった（図 28）。埋葬施設は、後円部の中央やや東よりに構築された横穴式石室のほかに、後円部南側から前方部墳頂平坦面付近に箱式石棺が構築される。

古墳は、北側へ傾斜する尾根上に後円部を北東に向けて立地し、岩盤を整形して盛土を施すことにより墳丘を構築している。盛土は前方部側では岩盤上に比較的薄く施されるが、後円部側では横穴式石室構築とともに厚く施される。横穴式石室の墓坑は、後円部付近で北側に傾斜する岩盤を段状に整形して広い平坦面を造り出した後、さらに東西方向に岩盤を掘り込んで構築したとみられる。

墳丘の外表施設として埴輪の樹立が確認された。西側くびれ部と前方部前端において円筒埴輪列が確認され、円筒埴輪が墳丘を圍繞していた可能性がある。出土した円筒埴輪は、大谷山 27 号墳と同様に、全てⅣ群系埴輪である。また、西側くびれ部などで形象埴輪片が出土した。樹立位置等は不明であるが、動物埴輪や家形埴輪等が墳丘上に樹立していたと考えられる。

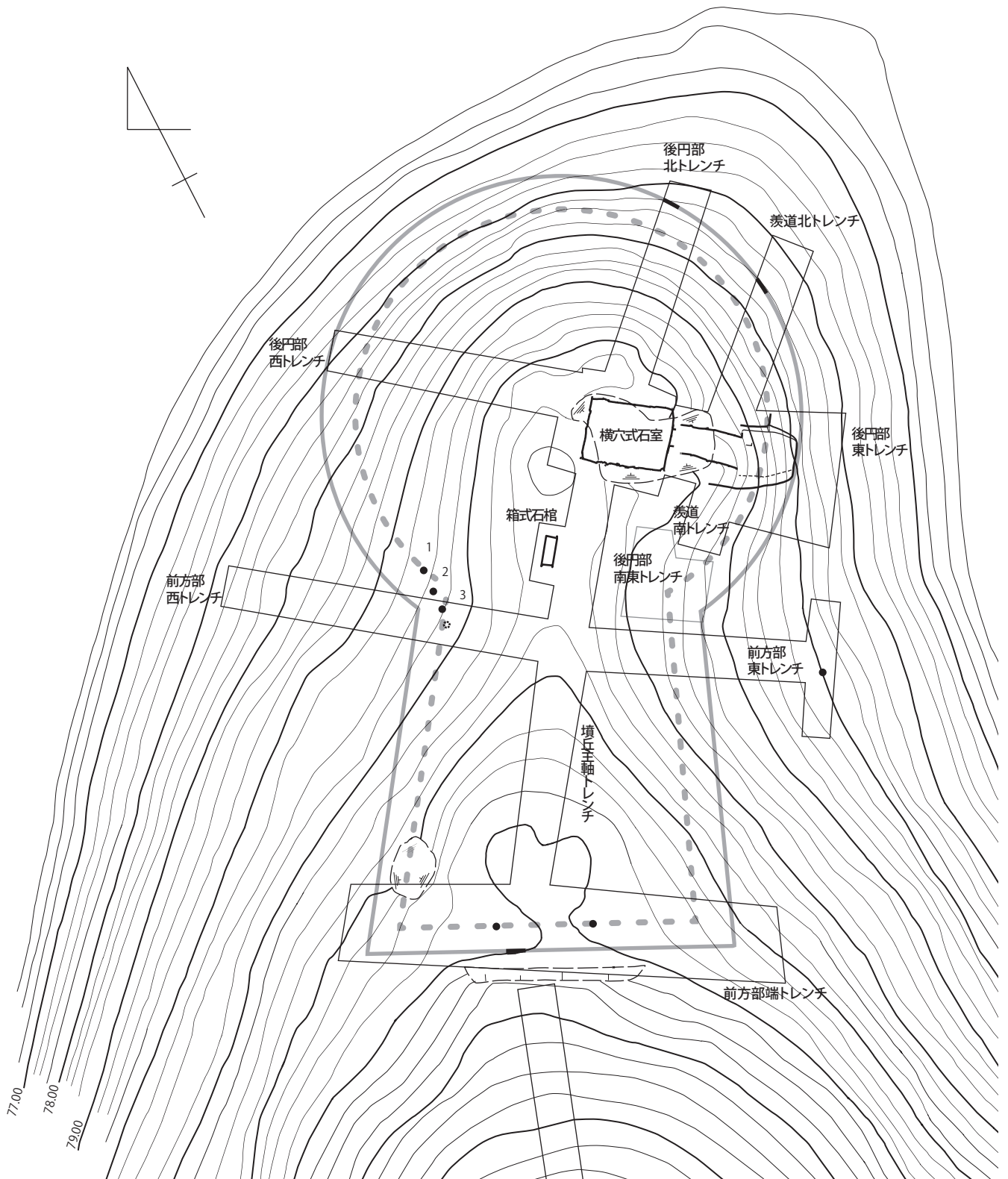
なお、東側くびれ部よりも東側の地点において樹立円筒埴輪が 1 個体確認され、墳丘付随施設の存在が示唆されるが、詳細は明らかでない。

横穴式石室は、後円部の東南方向に開口し、石室主軸は墳丘主軸に対して直交せず、約 5 度南側へ振れる。平面形態は、両袖式の形態をとるが玄室前道が奥壁から見てわずかに左寄りに位置する。また、結晶片岩の扁平な石材を用いること、玄室前道を有し基石を据え、玄室前道入口を扉石で閉塞すること、排水溝を備えること、玄室に屍床が設置されること等、岩橋千塚古墳群において通有の岩橋型石室の特徴を有している。一方で、玄室主軸に対して羨道主軸が 9 度南側に振れ斜行すること、玄室前道基石が比較的小形の石材を用いること等の特徴は、岩橋型石室でも古相の特徴である可能性が高い。また、屍床は板石を組み合わせた仕切石で、その区画から 2 体以上の遺骸が置かれた可能性がある。

箱式石棺は墳丘盛土を掘削して墓坑を設け構築しており、石棺は底石と側石から構成され蓋石を伴う。棺内には土器が副葬されていた。また、墓坑と石棺の間には裏込めとして扁平な板石が充填されること、埋納に伴い墓坑内に土器が配置されるなどの特徴も認められた。

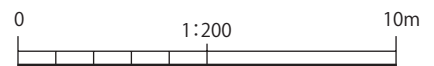
大谷山 28 号墳の築造時期は、横穴式石室出土須恵器が TK 47～MT 15 型式期の特徴をもつものを主体にしていることから、6 世紀初頭頃と推測される。また、箱式石棺出土須恵器も TK 47～MT 15 型式期に比定され、6 世紀初頭頃の構築とみられる。

以上から、大谷山 28 号墳は、後円部の横穴式石室を埋葬施設とする小型の前方後円墳として 6 世紀初頭頃に構築され、その後、比較的近接した時期に箱式石棺が追加されたものとみられる。また、6 世紀前半の構築と推定される大谷山 27 号墳に先行して築造されていることも明らかとなった。



- 墳丘裾復原ライン
- - - 樹立円筒埴輪復原ライン
- 発掘調査検出円筒埴輪

※前方部東トレンチ東端の円筒埴輪の存在から
墳丘付随施設が存在した可能性があるが、
本図では表現していない



第28図 大谷山28号墳 墳丘復元図(S=1/200)

第3表 大谷山28号墳 遺物観察表

(埴輪・土師器)

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1	図版35	円筒埴輪	前方部 西円筒埴輪	底径17.3	底部外面はタテハケと板オサエ。突帯より上はタテハケのちヨコ。透孔あり。底部内面はタテハケ、突帯付近はヨコハケ。底面は面をもつ。突帯は低くM字形で、底面からの高さ17.2cm。突帯の剥離部分に凹線が認められ、突帯間隔設定技法によるものと考えられる。	外・内) 5YR6/6 橙、5YR5/6 明赤褐	5mm以下の砂粒を多く含む片岩を含む	良好	100%	
2	図版35	円筒埴輪	前方部 東円筒埴輪	口径28.0cm (復元)	器面磨減。内外面ヨコハケ。口縁端部内面はヨコナデにより凹み、端部は肥厚。突帯は低く、口縁端部からの間隔は8.5cm。	外) 5YR6/8 橙 内) 7.5YR6/6 橙 断) 10YR7/2 にぶい黄橙	6mm以下の赤色酸化粒と片岩が少量含む、その他砂粒が全体に含む	良好	17%	2・3は同一個体か
3	図版35	円筒埴輪	前方部 東円筒埴輪	底径18.0cm	器面磨減。外面はタテハケ。内面はタテハケのちナデ。底部付近は板状工具によるオサエ。下段突帯は低く断面三角形状で、底面からの高さ19.1cm。	外) 5YR6/8 橙、10YR3/1 黒褐～10YR7/1 灰白 内・断) 5YR6/8 橙	1cm大の片岩が3個、その他石粒が少量と砂粒を全体に含む	良好	98%	2・3は同一個体か
4	図版35	円筒埴輪	東側 くびれ部	底径18.8cm (復元)	外面はタテハケのち底端部外面を指オサエとヘラズリか。内面はタテハケのち指オサエ。底面は面をもつ。突帯は台形状。底面からの高さ22.7cm。	外・内・断) 5YR6/8 橙	8mm位の片岩が少量、4mm以下の赤色酸化粒が少量、その他砂粒が全体に含む	良好	25%	
5	図版35	朝顔形埴輪	西側くびれ部 3号円筒埴輪	口径30.0cm (復元)	器面磨減。口縁端部内面がヨコナデでわずかに凹む。端部は外方に突出。	内・断) 5YR6/6 橙	砂粒を多量含む	良好	17%	5・6は3号とし取り上げ。
6	図版35	円筒埴輪	西側くびれ部 3号円筒埴輪	底径19.0cm (復元)	器面磨減。外面はタテハケ。低端部内面は指オサエ。内面はナメハケ。ハケの密度は4本/1cm。	外・内) 5YR6/6 橙 断) 5YR5/4 にぶい赤褐	5mm大の白2個、赤1個の小石を含む、その他3mm以下の石粒が全体に含む	良好	38%	5・6は3号とし取り上げ。
7	図版36	円筒埴輪	前方部東 トレンチ	底径18.0cm (復元)	器面磨減し調整不明。外面指オサエ。	外・内) 5YR6/6 橙 断) 5YR6/6 橙、7.5YR6/2 灰褐	2mm以下の砂粒を多く含む、6mm大の片岩を含む	良好	15%	
8	図版36	円筒埴輪	西側くびれ部 1号円筒埴輪	底径18.0cm (復元)	器面磨減。内面は指オサエ。	外・内) 5YR6/8 橙～10YR6/3 にぶい黄橙 断) 10YR7/2 にぶい黄橙	砂粒を含む	良好	13%	
9	図版36	円筒埴輪	西側くびれ部 2号円筒埴輪	-	器面やや磨減。外面はタテハケ、内面は指オサエ。突帯の下に透孔。突帯は低く断面台形。	外) 2.5YR5/6 明赤褐、10YR6/4 にぶい黄橙 内) 5YR6/6 橙 断) 7.5YR6/6 橙	4mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	-	
10	図版36	円筒埴輪	西側くびれ部 円筒埴輪列	-	内外面は調整不明。口縁端部は面をもち、やや外方に突出。	外・内) 5YR6/6 橙 断) 10YR7/4 にぶい黄橙	砂粒を含む	良好	-	
11	図版36	円筒埴輪	西側くびれ部 円筒埴輪列	-	内外面は調整不明。口縁端部はナデによりやや外方に突出。	外・内) 2.5YR5/6 明赤褐 断) 10YR5/4 にぶい黄褐	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
12	図版36	円筒埴輪	西側くびれ部 円筒埴輪列	底径18.2cm (復元)	外面はタテハケ、内面はタテハケと底端部に指オサエとナデ。	外) 5YR6/6 橙 内) 5YR5/6 明赤褐 断) 10YR5/3 にぶい黄褐	2mm以下の砂粒を多く含む、6mm大の片岩を含む	良好	-	
13	図版36	円筒埴輪	西側くびれ部 円筒埴輪列	-	外面はタテハケ。口縁端部は内外面と端面の強いヨコナデにより肥厚。	外) 5YR6/6 橙 内) 5YR5/6 明赤褐 断) 10YR5/3 にぶい黄褐	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
14	図版36	円筒埴輪	前方部東 トレンチ東端 樹立円筒埴輪	底径18.0cm	器面磨減。外面は板オサエか。内面はタテハケのちナデ。底端部内面は指オサエ。	外・内) 5YR6/8 橙 断) 7.5 Y 7/8 黄橙	8mm位の片岩が少量、4mm以下の赤色酸化粒が少量、その他砂粒が全体に含む	良好	50%	
15	図版36	円筒埴輪	後円部南東 トレンチ	-	透孔あり。外面はタテハケのちヨコハケ、底部外面はタテハケ。内面はナメハケ、底部内面はタテハケで、突帯付近は指オサエ。突帯は明瞭にM字形となる。突帯間隔は8.7cm。ハケの密度は4～5本/1cm。	外) 2.5YR6/8 橙 内) 5YR6/8 橙 断) サンドイッチ状 5YR6/8 橙、5Y7/1 灰色、-2.5YR6/8 橙	2mm以下の砂粒を含む、片岩を含む、赤色酸化粒を含む	良好	-	
16	図版36	円筒埴輪	横穴式石室 羨道前面	底径18.0cm (復元)	外面はタテハケのち板オサエ。上部で一部ヨコハケあり。内面はタテハケ、底端部内面は指オサエ。ハケの密度は7本/1cm。	外・内・断) 5YR6/8 橙～10YR7/4 にぶい黄橙	砂粒を全体に含む	良好	25%	
17	図版37	朝顔形埴輪	横穴式石室 羨道床面 付近 攪乱土	-	朝顔形埴輪の頭部。外面は肩部にタテハケとヨコナデ、内面は肩部にタテハケ、後円部はヨコハケ。頭部の突帯は断面台形を呈す。頭部径は21cm。	外・内) 2.5YR6/8 橙 断) 5YR6/6 橙	8mm大の黒色石粒を含む、5mm大の片岩を含む、2mmは以下の砂粒を多含む	良好	-	
18	図版37	円筒埴輪	横穴式石室 羨道床面 付近 攪乱土	-	外面はタテハケのちヨコハケ、内面はナデ。突帯は断面台形状。ハケの密度はヨコハケ7～8本/1cm。タテハケ4/1cm。	外・内) 5YR6/8 橙 断) 2.5YR7/1 灰色	3mm以下の石粒を砂粒を全体に含む	良好	-	
19	図版37	円筒埴輪	横穴式石室 羨道部	-	外面はタテハケのちヨコハケ。内面はヨコハケのちナメハケ。口縁端部は強いヨコナデにより肥厚。ハケの密度は5本/1cm。	外・内) 2.5YR6/6 橙 断) 2.5YR5/6 橙	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	-	

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
20	図版37	円筒埴輪	横穴式石室羨道部	-	外面はナナメハケのちヨコハケ。内面はヨコハケ。口縁部は面をもち、ヨコナデにより肥厚。ハケの密度は4本/1cm。	外)2.5YR6/8 橙 内・断)10YR6/4 にぶい黄橙	砂粒を多量含む	良好	-	
21	図版37	円筒埴輪	横穴式石室羨道部	-	外面はヨコハケ。内面はナデ。口縁部は外方に突出。	外・内)5YR5/6 明赤褐 断)7.5YR6/6 橙	片岩を含む、2mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	-	
22	図版37	円筒埴輪	墳丘東斜面腐植土	底径18.2cm(復元)	器面磨減。内面は底部付近指オサエ。	外・内)5YR5/6 明赤褐 断)10YR5/3 にぶい黄褐	砂粒を含む	良好	13%	
23	図版37	円筒埴輪	地区不明	底径18.8cm(復元)	外面はナデ。内面はナデ、底部付近指オサエ。	外)5YR6/6 橙、 10YR6/2 灰黄褐 内)5YR5/6 明赤褐 断)2.5Y5/2 暗灰黄	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	20%	
24	図版37	円筒埴輪	地区不明	-	外面はナナメハケのちナデ。内面は指オサエ。ハケの密度は3本/1cm。	外・内)10YR5/8 明赤褐 断)7.5YR7/6 橙	4mm以下の石粒と少量の砂粒を含む	良好	-	
25	図版37	円筒埴輪	地区不明	-	外面は調整不明。内面はナデと指オサエ。底面に板オサエ痕あり。底端部外面は肥厚。	外)5YR6/6 橙 内)2.5YR5/6 明赤褐 断)5YR6/6	1mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を多く含む	良好	-	
26	図版37	円筒埴輪	地区不明	-	内外面は調整不明。口縁部は面をもち、外方に突出。	外・内)7.5YR6/6 橙 断)10YR6/2 灰黄	砂粒が含まれる	良好	-	
27	図版37	円筒埴輪	地区不明	-	内外面は調整不明。口縁部は面をもち、やや外方に突出。	外)5YR5/4 にぶい赤褐、 2.5YR5/6 明赤褐 内)5YR5/6 明赤褐 断)5YR5/6 明赤褐、 7.5YR6/4 にぶい橙	4mm以下の砂粒を含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	-	
28	図版37	円筒埴輪	地区不明	-	外面はナデ。内面はナナメハケのちナデ。口縁部は面をもち、外側に突出。	外)5YR6/6 橙 内)5YR5/4 にぶい赤褐 断)5YR6/6 橙	4mm以下の砂粒を含む、片岩を含む	良好	-	
29	図版37	円筒埴輪	地区不明	-	外面はナデ。内面はヨコハケのちナデ。口縁部外面をヨコナデにより肥厚。ハケの密度は5本/1cm。	外・内)5YR5/6 明赤褐 断)5YR6/6 橙	3mm砂粒を含む	良好	-	
30	図版37	円筒埴輪	地区不明	-	外面はナデ。内面は指オサエ。口縁部はヨコナデにより肥厚。	外・内)7.5YR6/6 橙 断)2.5Y6/2 灰黄	砂粒が含まれる	良好	-	
31	図版38	動物埴輪(脚部)	西側くびれ部3号円筒埴輪付近	-	外面タテハケのちナデ。端部は粘土貼り付けにより肥厚。脚径は10.5cm、脚端部は厚12mm。31～35は形態、色調、胎土が類似し同一個体の可能性あり。馬形埴輪か。	外・内)5YR6/6 橙、 5YR5/6 明赤褐 断)5YR6/6 橙、 10YR6/6 明黄褐	4mm以下の砂粒を含む、片岩を多く含む	良好	-	31～35は同一個体か
32	図版38	動物埴輪(脚部)	西側くびれ部円筒埴輪列付近	-	器面磨減。比較的薄手で脚端部を肥厚させる。脚端部は厚16mm。縦位に剥離しており、扁平な粘土を貼り付けて成形か。	外・内・断)5YR6/6 橙	5mm以下の赤色酸化粒とその他石粒と砂粒を含む	良好	-	31～35は同一個体か
33	図版38	動物埴輪(脚部)	西側くびれ部円筒埴輪列付近	-	器面磨減。比較的薄手で脚端部を肥厚させる。内面指オサエ。	外・内)5YR6/6 橙 断)10YR7/4 にぶい黄橙	4mm以下の石粒が少量と石粒を全体に含む	良好	-	31～35は同一個体か
34	図版38	動物埴輪(脚部)	地区不明	-	器面磨減。比較的薄手で脚端部を肥厚させる。内面指オサエ。	外)5YR6/8 橙、 7.5YR6/4 にぶい橙 内)7.5YR6/4 にぶい橙	砂粒を全体に含む	良好	-	31～35は同一個体か
35	図版38	動物埴輪(脚部か)	地区不明	-	器面磨減。比較的薄手で脚端部を肥厚させる。内面指オサエ。	外・内)10YR6/4 にぶい黄橙 断)10YR6/1 褐灰	砂粒を中量含む	良好	-	31～35は同一個体か
36	図版38	動物埴輪(たて髪か)	西側くびれ部円筒埴輪列付近	-	器面磨減。たて髪の端部が肥厚。端部付近を指オサエ。	外・内)5YR6/6 橙 断)10YR7/4 にぶい黄橙	5mm以下の石粒が少量と砂粒を多量含む	良好	-	
37	図版38	動物埴輪(障泥か)	地区不明	-	障泥破片か。上部は接合部で、厚14mmの板状粘土が垂下する。外面に沈線により線刻が施される。	外・内)2.5YR5/6 明赤褐 断)10YR6/4 にぶい黄橙	3mm以下の石粒が微量と砂粒を全体に含む	良好	-	
38	図版38	動物埴輪(尻尾)	西側くびれ部3号円筒埴輪付近	-	器面磨減。尻尾の端部で、内面は中空に成形。	外)2.5YR5/6 明赤褐 内・断)10YR6/4 にぶい黄橙	1mm以下の砂粒を含む	良好	-	
39	図版38	動物埴輪(尻尾か)	西側くびれ部円筒埴輪列付近	-	尾の付け根から尻部付近か。	外・内)5YR6/6 橙 断)10YR7/4 にぶい黄橙	5mm以下の石粒と砂粒を全体に含む	良好	-	
40	図版38	家形埴輪(壁部か)	前方部端トレンチ(前方部前面中央土層帯東側)	-	壁部破片か。厚さ14mm。外面にハケメ。内面ナデ。	外・内)7.5YR7/6 橙 断)2.5Y7/2 灰黄	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
41	図版38	家形埴輪(基部か)	地区不明	-	器面磨減。家形埴輪基部ないし裾突帯か。内面はナナメハケのちナデ。底部は肥厚し、底面は平坦に整形される。	外・内)5YR6/6 橙 断)10YR6/4 にぶい黄橙	砂粒を含む	良好	-	
42	図版38	家形埴輪(基部か)	地区不明	-	器面磨減。家形埴輪基部ないし裾突帯か。内面は指オサエ。底部は肥厚し、底面は平坦に整形される。	外・内)5YR6/6 橙 断)7.5YR6/6 橙	砂粒を含む	良好	-	
43	図版38	不明形象埴輪	前方部東トレンチ	-	蓋の笠部の可能性あり。	外)5YR6/6 橙 内)5YR6/6 橙、 7.5YR6/4 にぶい橙 断)5YR6/6 橙、 10YR6/4 にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
44	図版38	不明形象埴輪	西側くびれ部3号円筒埴輪付近	-	直径3.8cm。中実。家形埴輪の棟木の可能性あり。	外)5YR5/4にぶい赤褐、5YR6/6橙断)10YR6/3にぶい黄橙	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
45	図版38	不明形象埴輪	地区不明	-	人物埴輪頭部か。	外・内)5YR6/6橙断)5YR6/6橙、10YR6/4にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を含む、片岩を含む	良好	-	
46	図版38	不明形象埴輪	前方部東トレンチ	-	端部は粘土貼り付けにより肥厚する。	外・内)5YR6/6橙断)5YR6/6橙、10YR6/3にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
47	図版38	不明形象埴輪	前方部東トレンチ	-	断面三角形の粘土帯が貼り付けられる。	外・内)5YR6/6橙断)5YR6/6橙、2.5Y7/2灰黄	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
48	図版38	不明形象埴輪	前方部東トレンチ(前方部前面中央土層帯東側)	-	2条の沈線間に径2mmの刺突を施す。	外)7.5YR7/4にぶい橙内)7.5YR6/4にぶい橙断)7.5YR6/4にぶい橙、7.5YR6/1褐灰	3mm以下の砂粒を少量含む、片岩を含む	良好	-	
49	図版39	須恵器杯蓋	箱式石棺(棺外)	口径12.3cm 器高5.1cm	天井部と口縁部の境の稜線はややにぶく、稜線の下が浅く凹む。口縁部はわずかに外反しており、端部は内傾して面をつくり、やや凹む。天井部は2/3程度を右回りの回転ヘラケズリ。その他は回転ヨコナデ。	外・内)5YR6/2灰オリーブ色	密(2mm以下の白色・黒色の礫・砂粒を全体に含む)	良好	100%	
50	図版39	須恵器杯身	箱式石棺(棺外)	口径11.0cm 器高5.2cm	口縁部は内傾して立ちあがり、端部は内傾する。端部は面をもつ。底部の1/2は右回りの回転ヘラケズリ。その他は回転ヨコナデ。	外)5Y5/1灰色内)7.5Y6/1灰色	密(2mm以下の白色・褐色の礫・砂粒を全体に含む)	良好	100%	
51	図版39	須恵器杯身	箱式石棺(棺外)	口径10.9cm 器高5.7cm	口縁部は内傾して立ちあがり、端部は内傾し、浅く凹む。受部は水平にのび、端部の稜はあまい。底部の1/2は右回りの回転ヘラケズリ。その他は回転ヨコナデ。	外)5YR6/2灰オリーブ色内)5Y6/1灰色	密(2mm以下の白色・褐色の礫・砂粒を全体に含む)	良好	95%	
52	図版39	須恵器甕	箱式石棺(棺内)	口径11.8cm 器高12.9cm	口頸部はラッパ状に開く。口縁端部は内傾して面をもつ。頸部上方は9~10本単位の櫛描き波状文が複数単位施文される。体部中央にはカキ目と櫛描列点文。内外両面に自然釉が付着。	外)7.5Y5/1灰色、2.5Y7/3浅黄色内)N5/0灰色	密(2mm以下の白色・黒色の砂粒を全体に含む)	良好	100%	
53	図版39	須恵器杯蓋	横穴式石室玄室 攪乱土	口径14.0cm (復元) 器高5.3cm	天井部と口縁部の境の稜はややにぶい。口縁部はわずかに外反しており、口縁端部は内傾して面をつくり、浅く凹む。天井部の2/3は左回りの回転ヘラケズリ。天井部内面の中央には同心円文が残り、その他は回転ヨコナデ。外面にわずかながら自然釉が付着。	外)N6/0灰色、7.5Y6/1灰色内)5Y6/2灰オリーブ色	密(2mm以下の白色の礫・砂粒を全体に含む)	良好	70%	
54	図版39	須恵器甕	横穴式石室玄室 攪乱土	口径10.9cm (復元) 器高11.0cm	口頸部は外反し、口縁部との境のにぶい稜線を挟んで9~10本単位の櫛描き波状文が施文される。口縁端部は内傾して面をもち、明瞭に凹む。体部中央には沈線が巡り、櫛描波状文とカキ目。	外)7.5Y5/1灰色内)7.5Y6/1灰色	密(2mm以下の白色の礫、1mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	50%	
55	図版39	須恵器無蓋高杯	横穴式石室羨道 攪乱土	口径13.4cm (復元) 残存高3.6cm	口縁部は外反して立ちあがり、端部は丸く収める。口縁部と底部の境の稜線はややにぶい。回転ヨコナデ。	外・内)5Y5/1灰色	密(1mm以下の白色・褐色の礫・砂粒を全体に含む)	良好	10%	
56	図版39	須恵器高杯	横穴式石室羨道 攪乱土	底径9.0cm (復元) 残存高5.0cm	裾部はラッパ状に広がり、脚端部は外面に段をもち屈曲して丸くおさめる。長方形の透しを1段3方につけている。回転ヨコナデ、外面にはカキ目。	外)7.5Y6/1灰色内)5Y5/1灰色	密(2mm以下の白色の礫・白色・褐色の砂粒を全体に含む)	良好	30%	
57	図版39	須恵器杯蓋	地区不明	口径12.8cm (復元) 器高4.5cm	天井部と口縁部の境の稜線はややにぶいが、外方に突出する。稜線の下が浅く凹む。口縁部はわずかに外反しており、口縁端部は内傾して面をつくり、やや凹む。天井部は2/3程度を左回りの回転ヘラケズリ。その他は回転ヨコナデ。	外・内)5Y5/1灰色	密(2mm以下の白色の礫、1mm以下の白色・黒色の砂粒を多く含む)	良好	20%	
58	図版40	須恵器杯蓋	地区不明	口径14.4cm (復元) 残存高4.4cm	天井部と口縁部の境の稜線はややにぶいが、外方に突出する。稜線の下が浅く凹む。口縁部はわずかに外反しており、口縁端部は外反して面をつくり、やや凹む。回転ヨコナデ。	外)N5/0灰色内)5Y5/1灰色	密(1mm以下の白色砂粒を含む)	良好	30%	
59	図版40	須恵器杯蓋	地区不明	口径13.4cm (復元) 残存高3.9cm	天井部と口縁部の境の稜線はややにぶいが、外方に突出する。稜線の下が浅く凹む。口縁部はわずかに外反しており、口縁端部は外反して面をつくり、やや凹む。天井部は左回りの回転ヘラケズリ。その他は回転ヨコナデ。	外)5Y5/1灰色内)2.5Y5/1黄灰色	密(1mm以下の黒色、白色砂粒を含む)	良好	10%	

NO.	図版 番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
60	図版 40	須恵器 杯蓋	地区不明	口径13.0cm (復元) 残存高 2.9cm	天井部と口縁部の境の稜線はほとんどなく、稜線の下が浅く凹む。口縁部はわずかに外反しており、口縁端部は内傾して面をつくり、やや凹む。回転ヨコナデ。	外・内)7.5Y5/1 灰色	密(1mm以下の白色、褐色砂粒を含む)	良好	10%	
61	図版 40	須恵器 杯蓋	地区不明	口径13.0cm (復元) 残存高 4.6cm	天井部と口縁部の境の稜線はほとんどなく、稜線の下が浅く凹む。口縁部はわずかに外反しており、口縁端部は内傾して面をつくり、やや凹む。回転ヨコナデ。	外・内)7.5Y5/1 灰色	密(1mm以下の白色砂粒を含む)	良好	10%	
62	図版 40	須恵器 杯身	地区不明	口径11.6cm (復元) 残存高 2.7cm	口縁部は内傾して立ちあがり、端部は丸みをもつが、内面にわずかに面をもつ。受部は水平にのび、端部の稜はあまい。底部の1/2は右回転の回転へらケズリ。その他は回転ヨコナデ。	外)5Y7/1 灰白色、 N4/0 灰色 内)5Y5/1 灰色	密(2mm～5mm大の白色・褐色礫を含む、1mm以下の白色砂粒を含む)	良好	20%	
63	図版 40	須恵器 杯身	地区不明	口径12.6cm (復元) 残存高 2.8cm	口縁部はやや直立気味に立ちあがり、端部は丸く収める。受部は水平にのび、端部の稜は明瞭である。回転ヨコナデ。	外・内)N6/0 灰色	密(1mm以下の白色・黒色の砂粒を含む)	良好	5%	
64	図版 40	須恵器 杯身	地区不明	口径11.4cm (復元) 残存高 2.8cm	口縁部は内傾して立ちあがり、端部を丸く収める。口縁部は水平にのび、端部の稜は明瞭である。回転ヨコナデ。	外・内)5Y5/1 灰色	密(2mm以下の白色・褐色の礫、1mm以下の白色砂粒を含む)	良好	10%	
65	図版 40	須恵器 無蓋高杯	地区不明	口径14.0cm (復元) 残存高 4.3cm	口縁部は外反して立ちあがり、端部は丸く収める。口縁部と底部の境の稜線はにぶい。回転ヨコナデ。	外)N4/0 灰色 内)5Y6/2 灰オリーブ色	密(2mm以下の白色礫、1mm以下の白色砂粒を含む)	良好	20%	
66	図版 40	須恵器 高杯	地区不明	底径9.0cm (復元) 残存高 1.6cm	裾部の端部はわずかに肥厚して丸く収める。回転ヨコナデ。	外・内)2.5Y6/1 黄灰色	密(1mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良好	-	
67	図版 40	土師器 壺	箱式石棺 (棺内)	口径10.0cm 残存高 11.2cm	口縁部は外反し短く立ちあがり、端部は丸く収める。口縁部が内外ともにヨコナデ。胴部外面はハケメのチナデ。内面には粘土紐接合痕が残る。	外・内)5YR7/6 橙色 *内面は表面の色が剥離している	密(2mm以下の白色、褐色の礫を含む、1mm以下の白色・黒色・褐色の砂粒・雲母を含む)	良好	100%	
68	図版 40	土師器 壺	横穴式石室 羨道	口径10.2cm (復元) 残存高 2.4cm	口縁部は外反して立ちあがり、端部は丸く収める。ヨコナデ。69と同一個体か。	外・内)7.5YR7/6 橙色	密(1mm以下の白色、褐色砂粒を含む)	良好	-	
69	図版 40	土師器 壺	横穴式石室 玄室床面 付近 攪乱土	胴部径 15.8cm 残存高 11.8cm	球胴を呈する。外面は同部上半をナナメハケ、下半をナナメないしヨコハケ。内面はナデ。68と同一個体か。	外)7.5YR8/4 浅黄橙色、 5YR7/6 橙色 内)5YR7/6 橙色	密(2mm以下の白色礫、1mm以下の白色・褐色砂粒を含む)	良好	20%	
70	図版 40	土師器 ミニチュア 土器	横穴式石室 玄室床面	底径3.6cm 残存高 2.15cm	ミニチュア土器高杯の脚部。脚部内面が凹む。ユビオサエ。	外・内) 5YR6/6 橙 断)5YR5/8 明赤褐色	密(1mm以下の褐色・白色の砂粒を含む)	良好	50%	
71	図版 40	土師器 ミニチュア 土器	横穴式石室 玄室床面	底径2.8cm 残存高 2.6cm	ミニチュア土器高杯の脚部。外面指オサエ、底面ナデ。	外)7.5YR6/6 橙色	密(1mm以下の白色砂利・雲母?を含む)	良好	50%	
72	図版 40	土師器 甕	くびれ部	残存高 10.1cm	丸底を呈する。外面はナナメハケメ。内面はケズリ。	外)7.10YR5/4 にぶい褐色、 5YR5/6 明赤褐色 内)7.5YR5/4 にぶい褐色	密(2mm以下の褐色・黒色の礫、1mm以下の白色・褐色の砂粒・雲母?などを含む)	良好	20%	ラベルには「前方部くびれ部」とあるが、東西くびれ部のいずれかは不明

第5章 総括

第1節 大谷山27号墳・28号墳の評価

大谷山27号墳と28号墳は、前者が墳長約22m、後者が墳長約27mの小型の前方後円墳で、前述したように、6世紀初頭に28号墳が、6世紀前半に27号墳が順次築造されたと考えられる。古墳はいずれも北側へ傾斜する尾根上に後円部を北東に向けて立地し、現況の標高は前方部が後円部よりも高い。墳丘は岩盤を整形して盛土を施すことにより構築される。埋葬施設の横穴式石室は、大谷山28号墳の調査成果より、北側へ傾斜する岩盤を整形して造り出した平坦面に墓坑を掘り込み、石積みにより壁体を構築していること、また、壁体構築と同時に盛土を施して後円部の墳丘を築いていることが明らかとなった。両古墳は、墳丘上にIV群系（紀伊型）の円筒埴輪が樹立し、さらに形象埴輪の樹立も想定されること、横穴式石室は大谷山28号墳が岩橋型石室で、27号墳も岩橋型石室の可能性が高いこと等、共通した特徴が認められる。なお、これらの特徴は同じ大谷山地区に所在する墳長約25mの前方後円墳・大谷山6号墳とも共通点が多く、さらに大谷山6号墳と28号墳は、墳丘上に箱式石棺等の埋葬施設が副次的に追加される点も類似する。

ただし、大谷山27号墳と28号墳は横穴式石室の平面形態や細部の構造が異なる。大谷山28号墳については次節で検討するため、ここでは27号墳の横穴式石室の特徴を再度確認したい。

大谷山27号墳の石室は毀損が著しくその構造は不明な点が多いが、玄室前道を有する可能性が高い。左片袖傾向の強い両袖式で玄室前道・羨道が右寄りに位置すること、玄室は長さ約2.1m、奥壁幅約2.1mと小規模で正方形の平面形態をとること、羨道の幅が約0.4mと著しく狭いことなどの特徴がある。一方、岩橋千塚古墳群において正方形ないし略正方形の玄室形態は中・小型石室に類例が多く、前山B100号墳、前山B24号墳等があげられる。しかしこれらの墳形はほぼ円墳に限られるから、大谷山27号墳は前方後円墳に採用された正方形石室として特徴的である。なお、墳長約28mの前方後円墳で6世紀中葉前後に築造された寺内18号墳は、小型のT字形石室を後円部埋葬施設とし、玄室前道ないし羨道は幅0.5mと狭小である。このT字形石室は単葬用の埋葬施設と考えられる（黒石2005）。したがって、大谷山27号墳と寺内18号墳は、玄室形態は異なるが、単葬ないし少人数埋葬を想定しうる玄室空間をもつ中・小型石室を、後円部埋葬施設に採用した前方後円墳として注目される。

最後に、大谷山27号墳・28号墳における墳丘と横穴式石室の平面的な位置関係についても簡単に触れておきたい（註1）。大谷山27号墳の横穴式石室は後円部の中央やや東よりに構築され、石室は主軸を墳丘主軸におおむね直交させている。一方、大谷山28号墳の横穴式石室も後円部の中央やや東よりに構築されるが、玄室主軸は墳丘主軸に対して直交せず、さらに前方部側へ約5度振れる。これら墳丘主軸と石室主軸の関係について岩橋千塚古墳群内の前方後円墳と比較すると、まず6世紀初頭に築造された大谷山6号墳の石室は墳丘主軸直交方向よりも前方部側へ約10度振れており、花山6号墳も類似する。これに後続する6世紀前半に築造された大谷山22号墳では後円部側へ約9度振れる。以上は大谷山28号墳と近似した特徴をもつ。一方、6世紀前半から中葉に位置づけられる大日山35号墳や天王塚古墳、小型前方後円墳の寺内18号墳、前山A58号墳では石室主軸が墳丘主軸におおむね直交しており、大谷山27号墳の特徴と共通する。ただし前山A58号墳と天王塚古墳は、玄室奥壁が後円部の中心と一致する構造となる点にも注意される。

以上より、大谷山27号墳・28号墳の墳丘上の石室平面位置は、岩橋千塚古墳群内の前方後円

墳で認められる石室平面位置の各時期の特徴とも一致するとみられ、今後は、古墳群における前方後円墳の埋葬施設と墳丘の位置関係について、より構造的に把握していく必要がある。

以上、大谷山 27 号墳・28 号墳について、岩橋千塚古墳群の各古墳との比較検討をおこなった。両古墳は近接した空間に一定の規則性のもと順次築造された小型前方後円墳として評価され、その調査成果は岩橋千塚古墳群の群形成過程を明らかにする上で重要なデータになると考えられる。

註 1 墳丘における横穴式石室の平面的な位置に加え、立面的な位置関係も今後の重要な検討課題である。

第 2 節 大谷山 28 号墳の横穴式石室

(1) 岩橋型石室の検討

大谷山 28 号墳の横穴式石室は、岩橋千塚古墳群で主体的に認められる岩橋型石室（註 1）の初期の形態とみられ、その特徴はその後に盛行する当該石室の系譜や成立過程を明らかにする上で重要である。本節では、既往の研究（森 1967、前田 1993、中司 2003、広瀬 2004、黒石 2007、中村 1999、太田 2011 他）で明らかにされている岩橋型石室の型式学的特徴や編年を基礎として、新たに袖部や玄室前道等の属性分析を加味して岩橋型石室の時間的変遷を検討する。その上で、あらためて大谷山 28 号墳における型式学的な特徴を抽出し、編年的な位置づけをおこなう。

以下では、時間的な差異を顕著に表すと考えられる袖部及び玄室前道基石の分類と、それを踏まえた岩橋型石室の型式学的検討をおこないたい。

袖部の分類 岩橋型石室における袖部の構造は、以下の袖部 a 類～d 類に分類される（第 29 図）。

袖部 a 類 扁平な板状石材を用いた小口積を基本とするもの。ただし、玄門側の石積みのみが平積による。壁体における平積の占める割合は低く、小口積が主体である。

袖部 b 類 小口積と平積が併用されるもの。壁体における平積の占める割合は、小口積と同程度か、あるいは小口積よりも高くなる。

右袖部の各段において小口積と平積が併用されるものを袖部 b 1 類とする。また、両袖部は横長の石材による平積を原則とするが、右（左）袖部側の平積と右（左）側壁の間を小口積とするものを袖部 b 2 類とする。

袖部 c 類 各々の袖部は、横長の石材を用いた平積で 1 段 1 石積みとするが、玄室床面から玄室前道基石上面までの範囲で多段の小口積が明瞭に認められるものを、袖部 d 類とは区別して袖部 c 類とする。壁体における平積の占める割合は高く、主体を占める。

袖部 d 類 各々の袖部は、横長の石材を用いた平積で 1 段 1 石積みとする。袖部における石積みはすべてが平積となる。

以上の分類のうち、袖部 a 類は、大谷山 6 号墳が該当する。玄門側の平積部分は、玄室主軸に直交して石材の小口を向け、かつ羨道側壁よりも内側に突出させた構造であり、岩橋型石室の玄室前道に相当する部分であるが、未発達な形態である。

袖部 b 類は、平積の占める割合が高い点で袖部 a 類よりも後出する特徴をもつ。このうち袖部 b 1 類は、前山 A 58 号墳や花山 33 号墳が該当するが、前山 A 58 号墳では各段に小口積とともに平積が認められ、各石材の立面が均一ではない。奥壁が小口積主体で石材の立面が比較的均一であることとは特徴を異にしている。袖部 b 2 類は、大谷山 28 号墳や大谷山 22 号墳が該当し、平積と小口積の範囲が明確に異なる特徴は、袖部 a 類における玄門側の平積の石材が大形化した

(長・幅の単位：m)

古墳	墳形	規模・墳長	袖部	基石	袖部平面	袖幅指数*	玄室長	玄室幅	左袖幅	右袖幅	玄室前道長	玄室前道幅	羨道長(羨道前庭長)	羨道幅	石柵の数	石梁の数	化粧石(玄室前道)	化粧石(羨門)	出土須恵器型式	
大谷山 6 号墳	前方後円墳	25	a 類	a 類	左片袖	2.00	3.83	2.38	0	1.62	0.32	0.66	1.34	0.94	なし	—	なし	なし	TK47~MT15	
大谷山 28 号墳	前方後円墳	27	b2 類	c1 類	両袖	1.14	2.99	2.14	0.7	0.93	0.31	0.6	2.18	1.09	—	—	なし	なし	TK47~MT15	
花山 6 号墳	前方後円墳	49	a 類か	b1 類	両袖	1.59	4.0	2.54	0.4	1.56	0.75	0.67	2.3	1.21	なし	—	なし	なし	MT15	
花山 33 号墳	前方後円墳	32	b1 類	b1 類	両袖	1.53	2.84	2.09	0.38	1.23	0.32	0.49	1.39	0.83	—	—	なし	なし	MT15	
大谷山 22 号墳	前方後円墳	68	b2 類	d 類か	両袖	1.59	4.1	2.5	0.32	1.25	0.5	0.9	3.4	1.2	2	1	水平	なし	なし	MT15~TK10
大谷山 35 号墳	前方後円墳	86	d 類	d 類	両袖	1.37	4.33	2.42	0.44	0.96	0.58	0.84	2.96以上	0.9	2	1	水平	なし	なし	MT15~TK10
天王塚古墳	前方後円墳	88	d 類	d 類	両袖	0.97	4.22	2.89	0.97	0.91	1.03	0.8	4.83(1.0)	1.55	2	8	垂直	なし	なし	MT85
將軍塚古墳(後円部石室)	前方後円墳	42	d 類	d 類	両袖	0.96	3.32	2.3	0.7	0.65	0.9	0.85	2.2	1.5	1	1	垂直	有	なし	MT85
前山 A46 号墳	円墳	27	d 類	d 類	両袖	1.07	3.3	2.14	0.5	0.58	1.45	0.9	1.95(1.84)	1.18	1	4	垂直	有	なし	
郡長塚古墳	前方後円墳	30	d 類	d 類	両袖	1.00	3.7	2.03	0.7	0.7	0.6	0.6	3.35	1.0	1	1	垂直	有	なし	
山東 22 号墳	円墳	27	d 類	d 類	両袖	0.95	4.14	2.38	0.65	0.59	1.0	1.06	2.2(1.1)	1.23	1	—	有	有	TK43	
大谷山 16 号墳	円墳	20	d 類	c2 類	両袖	1.03	3.56	2.6	0.7	0.75	1.3	1.1	2.6(2.0)	1.4	2	3	垂直	有	有	
前山 A67 号墳	円墳	27	d 類	d 類	両袖	1.05	3.8	2.3	0.74	0.81	1.08	0.9	2.2(3.4)	1.09	1	2	垂直	有	有	TK43か
井辺 1 号墳	方墳	40 × 28	d 類	d 類	両袖	0.99	4.15	2.7	0.51	0.5	1.1	1.23	1.43(3.6)	1.6	1	1~	垂直	有	有	TK209

* 袖幅指数=右袖幅 / (左袖幅+右袖幅) × 2

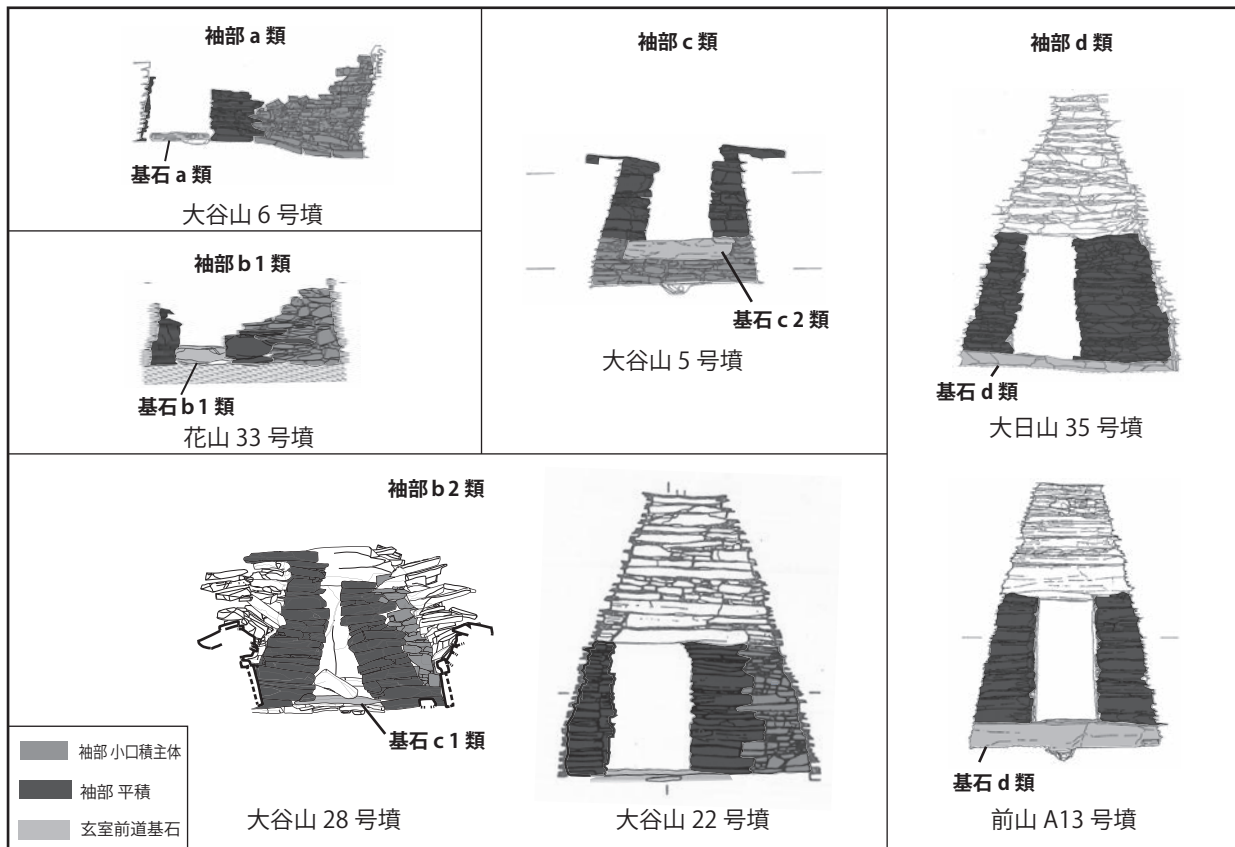
第 4 表 岩橋千塚古墳群の主な横穴式石室 (大型石室)

(長・幅の単位：m)

古墳	墳形	規模・墳長	袖部	基石	袖部平面	袖幅指数*	玄室長	玄室幅	左袖幅	右袖幅	玄室前道長	玄室前道幅	羨道長(羨道前庭長)	羨道幅	石柵の数	石梁の数	化粧石(玄室前道)	化粧石(羨門)	出土須恵器型式	
前山 A58 号墳	前方後円墳	20	b1 類	b2 類	両袖	1.87	2.5	1.9	0.1	1.4	0.4	0.5	1.7	0.7	—	—	なし	なし	MT15~TK10	
大谷山 43 号墳	円墳	15	b 類	c2 類	両袖	1.57	2.2	1.8	0.23	0.85	0.33	0.66	2.2	0.89	—	—	なし	なし	MT15~TK10	
大谷山 70 号墳	円墳	14	b 類か c 類	c2 類	右方袖	0.00	1.9	1.3	0.64	0	0.28	0.58	1.45	0.68	—	—	—	—	TK10	
前山 A99 号墳	円墳	12	b2 類	c2 類	両袖	0.88	1.56	1.83	0.77	0.6	0.6	0.5	1.35	0.7	なし	なし	なし	なし		
大谷山 4 号墳	円墳	18	c 類	c2 類	両袖	1.14	1.9	1.6	0.45	0.6	0.6	0.5	1.5	0.8	—	—	なし	なし	MT85	
前山 A13 号墳	円墳	15	d 類	d 類	両袖	0.98	2.67	2.07	0.63	0.61	0.84	0.65	1.84(0.66)	1.08	1 枚	2	垂直	有	なし	
前山 A23 号墳	円墳	14	c 類か d 類	—	両袖	0.97	2.2	1.74	0.64	0.6	0.66	0.51	0.98以上	0.77	1 枚	1	垂直	なし	—	
前山 A24 号墳	円墳	14	c 類か d 類	—	両袖	1.02	1.98	1.92	0.6	0.62	0.7	0.46	1.46(0.3以上)	0.66	なし	1	垂直	なし	なし	
前山 A2 号墳	円墳	12	d 類	c2 類	両袖	1.07	1.03	1.92	0.66	0.76	0.54	0.5	1.95	0.75	なし	なし	なし	なし	TK43	
前山 B41 号墳	円墳	8	d 類	c2 類	両袖	0.98	1.86	1.62	0.44	0.42	0.4	0.58	1.85	0.9	—	—	なし	なし	TK43	
大谷山 5 号墳	円墳	15 ~ 19	c 類	c2 類	両袖	1.07	2.1	1.78	0.5	0.57	0.9	0.7	1.45(1.0)	0.85	—	—	有	有	TK43	

* 袖幅指数=右袖幅 / (左袖幅+右袖幅) × 2

第 5 表 岩橋千塚古墳群の主な横穴式石室 (中・小型石室)



第 29 図 岩橋型石室の袖部・玄室前道基石の分類 S=1/80

結果とみられる。また、前山 A 99 号墳はさらに平積の範囲が増し後出的な特徴を示すが、左袖部にわずかに小口積が確認できることから依然として袖部 b 2 類と考えられる。

袖部 c 類と d 類は、袖部における平積の 1 段 1 石積みが成立しており、袖部 b 類に後続するものとみられる。袖部 c 類は、大谷山 4 号墳や大谷山 5 号墳が典型的な例で、いずれも後述する基石 c 2 類と組み合わせる。基石の下部に小口積主体の石積みが構築されるため、玄室前道基石と玄室床面は段差が大きい。この構造は一部の中・小型の石室に採用される。袖部 d 類は、大日山 35 号墳や天王塚古墳、將軍塚古墳（後円部石室）等の首長墓をはじめ、6 世紀前半以降の大型石室を中心に採用され、さらに前山 A13 号墳等の中・小型石室にも採用される。

以上より袖部の構造は、小口積主体の段階から（袖部 a 類）、平積に用いる石材の大形化とともに小口積の占める割合が減少する段階（袖部 b 類）を経て、やがて平積の 1 段 1 石積みが成立する（袖部 c 類・d 類）という大まかな変遷過程が想定される。また、袖部 c 類は一部の中・小型石室を中心に、袖部 d 類は大型石室と中・小型石室に採用されるというように、石室規模に応じて袖部の構造が選択された可能性がある。

玄室前道基石の分類 岩橋型石室における玄室前道基石の構造は、以下の a～d 類に分類される。

基石 a 類 基石の幅が、玄門（玄室前道）の幅に対して狭いもの。大谷山 6 号墳では、不整形な形状の梱石を用いる。

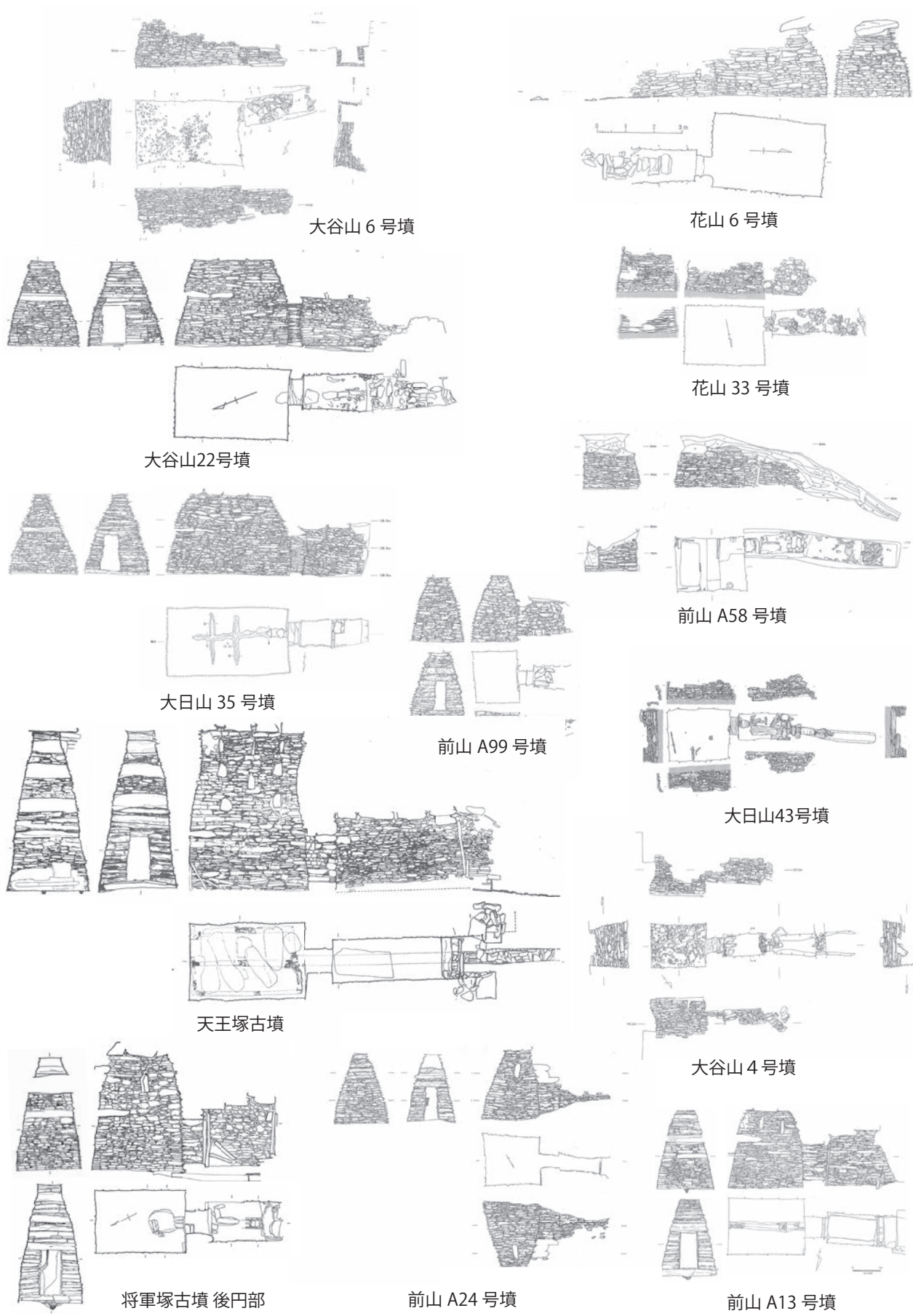
基石 b 類 基石の幅が、玄室前道の幅とほぼ等しいもの。基石の石室主軸方向の長さが玄室前道長よりも短く、羨道側に位置するもの（基石 b 1 類）と、長さが玄室前道長に等しいもの（基石 b 2 類）が認められる。花山 6 号墳と花山 33 号墳は基石 b 1 類で、前山 A 58 号墳は基石 b 2 類に該当する。

基石 c 類 基石の幅が、玄室前道の幅を超えるが、玄室の前壁の幅よりは狭いもの。基石の石室主軸方向の長さは、玄室前道長に等しいものが多く、大谷山 4・5・16 号墳、前山 A99 号墳等が該当する（基石 c 2 類）。一方、大谷山 28 号墳では基石の長さが玄室前道よりも短い可能性が高く、前者と区別される（基石 c 1 類）。

基石 d 類 基石の幅が、玄室の前壁の幅を越えるもの。基石の長さは、玄室前道長に等しい。したがって基石は大形の石材を用い、基石上には袖部及び玄室前道側壁を構成する石積みが構築される。大日山 35 号墳、天王塚古墳、將軍塚古墳（後円部石室）をはじめ、岩橋型石室のうち大型石室の多くがこれに該当する。

玄室前道基石は、当初は玄門（玄室前道）幅に比して幅狭で不整形な石材を梱石として用いる構造（基石 a 類）であった。次段階になると、基石の長さは玄室前道長よりも短いものの、幅が玄室前道幅に等しいか、前道幅を超えるものへと変化する（基石 b 1・c 1 類）。その後、長さも玄室前道長に等しくなる構造となる（基石 b 2 類・c 2 類）。また、上記変化に伴い基石の厚みも増していく。そして、基石の幅が玄室の前壁の幅を超える大形の石材を用いる構造（d 類）が成立し、基石 c 2 類と併存するという変遷が想定される。特に基石 d 類は、大日山 35 号墳をはじめとして、6 世紀前半から末における大型石室で主体的に用いられており、石室の大型化に伴い重量の増した壁体を支える上で不可欠な構造であったとみられ、また中・小形石室にも採用される。一方、基石 c 類は、6 世紀初頭に基石 c 1 類から c 2 類に変遷した後、6 世紀後半に至るまで一部の中・小型石室を中心に採用されつづける。

岩橋型石室の変遷 岩橋千塚古墳群の岩橋型石室について、上述した袖部及び玄室前道基石の分類と、袖部の平面形態やその他の各属性、出土する須恵器の型式等を第 4・5 表にまとめた。こ



第 30 図 岩橋千塚古墳群の横穴式石室 S=1/200

れに基づいた前半期を中心とする岩橋型石室の時間的変遷は、以下のとおりである。

まず岩橋型石室の最古の型式とみられるのは大谷山6号墳である。右片袖式の平面形態や石積み閉塞、斜行する羨道等、その後に盛行する岩橋型石室の通有の特徴とは異なる部分が多い。一方、基石や袖部の構造における袖部a類、基石a類は、次段階の袖部b類や基石b類への変遷が想定される。須恵器はTK47～MT15型式期の特徴をもち、6世紀初頭の構築と考えられる。

次段階に位置づけられる石室は、花山33号墳と花山6号墳である。両者とも右片袖傾向の両袖式で、袖幅指数(註2)は約1.5である。玄室前道は明確となり、袖部はa類ないしb1類、基石はb1類である。MT15型式期の須恵器を出土し、6世紀初頭に位置づけられる。

これに後続するのは大谷山22号墳、続いて大日山35号墳とみられ、両者とも6世紀前半に築造された大型の前方後円墳で、石棚及び水平方向の石梁をもつ代表的な岩橋型石室を有する。MT15～TK10型式期の須恵器を出土する。いずれも右片袖傾向の両袖式であるが、袖幅指数は大谷山22号墳が1.59、大日山35号墳が1.39で、後者の方が前壁中央により近い。大谷山22号墳は袖部b2類で小口積と平積が併用されるのに対して、大日山35号墳は袖部d類、基石d類で大形の石材を基石とし、その上部に平積による1段1石積みを施す構造で、より新しい特徴をもつ。この袖部d類、基石d類の構造は、石棚及び垂直方向の石梁と著しく高い天井部をもつ天王塚古墳をはじめ、6世紀中葉以降の定型化した岩橋型石室へと引き継がれると考えられる。

上記の大型石室に対して、中・小型石室では以下の変遷が想定される。

まず、前山A58号墳は袖部b1類、基石b2類と中・小型石室のなかでも比較的古相の特徴をもち、また両袖式であるが袖幅指数が1.87と右片袖傾向が著しい。大日山43号墳は袖部b類、基石c2類である。両者はMT15～TK10型式期の須恵器を出土する。6世紀前半の比較的近接した時期に構築されたと考えられる。

一方、大谷山4号墳では袖部c類、基石c2類で、袖部は平積で1段1石積みとなる構造が成立している。袖幅指数は1.14と前壁中央の数値により近い。出土須恵器等から6世紀中葉の構築と考えられる。この袖部c類、基石c2類の構造は、大谷山5号墳等の6世紀後半の中・小型石室へ引き継がれるが、大型石室では認められない。これに対して、6世紀中葉の構築の可能性のある前山A13号墳は石棚、垂直方向の石梁を有し、玄室前道入口に化粧石が据えられ、袖部d類、基石d類と大型石室に準じた構造をとる。

以上より、中・小型の岩橋型石室が明確に認められるのは現時点では6世紀前半である。また、6世紀中葉以降の定型化した中・小型石室においては、大型石室に準じた構造のほかに、中・小型石室独自の構造が成立している可能性が高い。

(2) 大谷山28号墳の岩橋型石室の評価

石室の評価 前項で検討した岩橋型石室の変遷に基づき、大谷山28号墳の石室の編年の位置づけをおこなう。まず、大谷山28号墳の石室の特徴を再度確認すると、以下のとおりである。

①石室は後円部の東南方向に開口し、石室主軸は墳丘主軸に対して直交しない、②平面形態は両袖式であるが、玄室前道が前壁中央のやや左寄りに位置し、袖幅指数は1.14である、③石積みには結晶片岩の扁平な板状石材を用いる、④玄室前道を有し基石を据え、玄室前道入口を扉石で閉塞する、⑤排水溝を備える、⑥玄室に屍床が設置される、等である。これらの特徴のうち、③から⑥は、岩橋千塚古墳群における岩橋型石室の通有の特徴を有している。

さらに、細部の特徴としては、⑦玄室主軸に対して羨道主軸が9度南側に振れ斜行すること、

⑧袖部は両袖部を平積とするが、右袖部では側壁側に小口積を施す袖部 b 2 類であること、⑨玄室前道基石は前道の幅を越える基石 c 類で、基石の長さが玄室前道長よりも短い基石 c 1 類の可能性が高く、かつ扁平な石材を用いること、⑩屍床は板石を組み合わせた仕切石で、区画から 2 体以上の遺骸が置かれた可能性があること、などの点も注目される。

このうち特徴⑦は、大谷山 6 号墳や花山 6 号墳における玄室主軸に対して羨道が斜行する形態と共通する。一方、特徴⑧の袖部の構造は、平積を多用する点で大谷山 6 号墳とは大きく異なり、より新相の大谷山 22 号墳に近い型式学的特徴をもつ。特徴⑨は、大日山 43 号墳等の基石 c 2 類に対して、玄室前道長がより短い点でより古相の特徴である可能性が高く、分類は異なるが花山 6 号墳や花山 33 号墳における基石 b 1 類の特徴に近い。基石が厚みをもたず扁平である点も、古相の特徴である。一方、②は上記古墳とは大きく異なる特徴で、袖幅指数 1.14 の数値は大谷山 4 号墳等の定型化以後の岩橋型石室に近似する。

以上から、大谷山 28 号墳の石室は、6 世紀前半の大谷山 22 号墳と袖部構造が類似するものの、むしろ 6 世紀初頭の大谷山 6 号墳、花山 6 号墳、花山 33 号墳と斜行羨道の形態や基石の構造等が近似することから、後者の成立期ないし初期の岩橋型石室と近接した時期に位置づけられる可能性が高い。このことは、出土した須恵器が TK 47 型式期から MT 15 型式期の特徴をもつことと矛盾するものではないと考えられ、その構築時期は 6 世紀初頭と考えられる。

一方、玄室前道位置が前壁中央に比較的近いという当該期の他の石室とは異なる特徴については、以下の推測ができる。岩橋型石室では片袖式から両袖式へと変遷し、玄室前道の接続位置が時間的な差異を表すという従来の編年観はおおむね首肯でき、それは上述した袖部 a 類から b 類、さらに c・d 類への袖部構造の変遷と対応する。しかし、定型化以前の岩橋型石室ではこれらの属性における石室ごとの変異が大きく個体差が認められ、型式学的変化の方向性としては新旧の関係性にある袖部形態や構造が、同時期に併存していた可能性が高い。

したがって、6 世紀初頭における成立期ないし初期の岩橋型石室には、属性の変異にあらわれる複数の石室構造が存在した可能性があり、上述の特徴をもつ大谷山 28 号墳の石室は、そうした定型化以前の初期の岩橋型石室を構成する型式群の中の一型式であると評価される。またそれは、岩橋型石室の系譜が、一系統的ではないことを示唆している。

仕切石 ⑩の仕切石については、岩橋千塚古墳群における屍床のうち玄室床面を板石によって区画する仕切石は少なくなく、6 世紀前半から中葉の岩橋型石室において確認されている。大谷山 4 号墳、大日山 43 号墳、前山 A 23 号墳、前山 A 32 号墳等では、玄室奥壁寄りに、玄室主軸に直交する方向で仕切石が認められる。また、前山 A 58 号墳の仕切石は、玄室奥壁寄りに立てられた小形の板石による区画と、さらに玄室中央の羨道部寄りに立てられた板石による区画から構成され、複数の区画をもつ点で大谷山 28 号墳と共通する。また、6 世紀後半の事例では、和坂南垣内古墳群 1 号墳で主軸に平行して設置された仕切石が確認されている。

しかし、玄室の奥壁と側壁に沿って複数枚の大型の板石が立てられ、主軸直交方向の板石により複数区画に分割された例は、岩橋千塚古墳群では確実な類例は認められない。一方、和歌山県内で同様の構造をもつ例は、すさみ町上ミ山古墳、日高町弁天山古墳（向山 4 号墳）で認められ、両古墳は玄室内に大型の板石により複数区画に分割された仕切石を有し、6 世紀初頭から前半の築造と考えられる点で大谷山 28 号墳と対比できる。上ミ山古墳や弁天山古墳は、玄室の正方形に近い平面形態や側壁の持ち送り、仕切石の構造等から九州地方の横穴式石室との類似性が指摘されている（黒石 2007、鈴木 2010）。したがって、大谷山 28 号墳の仕切石についても当該地方

との関係が想定されうるが、その系譜については石室構造を含めた岩橋型石室の総合的な分析に基づいて明らかにしていく必要がある。

これらの残された諸課題については、今後の継続的な調査研究の中で明らかにしていきたい。

註1 岩橋千塚古墳群の横穴式石室は、森浩一氏によって特徴がまとめられ「岩橋形式」として定義されている（森1967）。近年の研究では「岩橋型横穴式石室」ないし「岩橋型石室」の呼称を用いることが多い。

註2 前壁に接続する玄室前道位置の偏りを数値で表すため、左袖幅と右袖幅から次の数値を算出し、袖幅指数と仮称する。[袖幅指数 = 右袖幅 / (左袖幅 + 右袖幅) × 2] とし、例えば、両袖式で玄室前道が前壁の中央に位置する場合は1.0を、左片袖式は0.0を、右片袖式は2.0の数値を表す。

【参考文献】

- 太田宏明 2011 『機内政権と横穴式石室』 学生社
- 大野嶺夫 1985 「岩橋千塚と周辺のT次形横穴式石室（上）（下）」『古代学研究』109・110 古代学研究会
- 河内一浩 1988 「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』巽三郎先生古稀記念論集刊行会
- 黒石哲夫 2005 「紀伊における後期古墳時代の集団関係」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室
- 黒石哲夫 2007 「地域別概説 紀伊の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
- 末永雅雄編 1967 『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室
- 鈴木一有 2010 「古墳時代東海における太平洋岸交流の隆盛」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系
- 丹野拓 2013 「岩橋千塚の4つの築造集団」『古文化談叢』第70集 九州古文化研究会
- 辻川哲朗 2003 「突帯 - 突帯間隔設定技法を中心として -」『第52回埋蔵文化財研究集会 埴輪』
- 中司照世 2003 「岩橋型横穴式石室について」『紀伊考古学研究』第6号 紀伊考古学研究会
- 中村貞史 1999 「岩橋千塚古墳群の形成」『謎の古代豪族紀氏』（財）和歌山県文化財センター
- 中村貞史 2010 「紀伊の石棚・石梁」『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 広瀬和雄 2004 「紀伊岩橋千塚古墳群の諸問題」『地域と古文化』地域と古文化刊行会
- 藤井幸司 2012 「近畿周辺」『古墳時代の考古学2』同成社
- 前田敬彦 1993 「和歌山県における横穴式石室の展開」『撰河泉文化資料』第42・43号 撰河泉文庫
- 森浩一 1967 「岩橋千塚の横穴式石室」『岩橋千塚』
- 和歌山市教育委員会 2005 「和歌山市内遺跡発掘調査概報 - 平成15年度 -」
- 和歌山県教育委員会 2000 『岩橋千塚周辺古墳群 緊急確認調査報告書』
- 和歌山県教育委員会 2010 『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書1』
- 和歌山県教育委員会 2013 『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書2』
- 和歌山県教育委員会 2015 『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書3』
- 和歌山県教育委員会 2016 『大谷山22号墳、天王塚古墳 - 特別史跡岩橋千塚古墳群追加指定に伴う発掘調査報告書 -』
- 和歌山県教育委員会 2017 『岩橋千塚古墳群 大谷山4・5・6・39号墳発掘調査報告書』



1. 大谷山 27 号墳・28 号墳 遠景 (西から)



2. 大谷山 27 号墳・28 号墳 近景 (西から)



1. 大谷山 27 号墳 墳丘（北から後円部を望む）



2. 大谷山 27 号墳 東側くびれ部（南東から）



1. 大谷山 27 号墳 東側くびれ部 (南から)



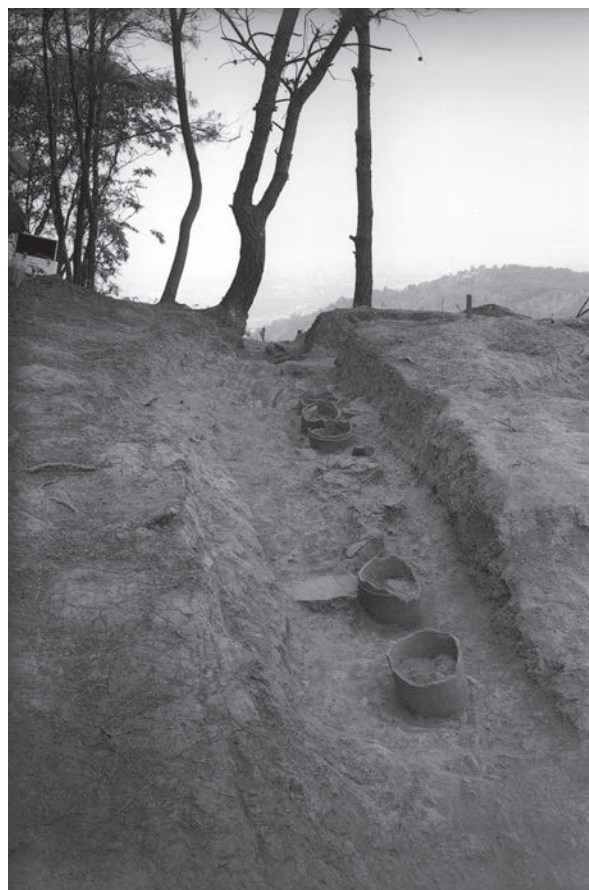
2. 東側くびれ部 (北東から)



1. 大谷山 27号墳 東側くびれ部円筒埴輪検出状況（東から）



2. 大谷山 27号墳 前方部前端（東から）



3. 前方部前端円筒埴輪検出状況（東から）



1. 大谷山 27 号墳 前方部前端円筒埴輪検出状況（南から）



2. 前方部前端円筒埴輪検出状況（南西から）

写真図版 6



1. 大谷山27号墳 円筒埴輪（前方部4・5・6）検出状況



2. 円筒埴輪（前方部1・2）検出状況



3. 円筒埴輪（前方部5）検出状況



4. 後円部西トレンチ南壁土層断面



5. 後円部西トレンチ南壁土層断面（部分）



1. 大谷山 27 号墳 横穴式石室全景（北西から）



2. 横穴式石室全景（羨道排水溝検出後）（南西から）



1. 大谷山 27号墳 横穴式石室全景 (東から)



2. 玄室奥壁 (東から)



1. 大谷山 27 号墳 横穴式石室 玄室 (北から)



2. 玄室 (前壁石積最下段検出後) (北から)



1. 大谷山 27 号墳 横穴式石室玄室 (西から)



2. 玄室 (前壁石積最下段検出後) (西から)



1. 玄室奥壁掘方検出状況



2. 羨道（排水溝検出後）（西から）



1. 羨道（排水溝検出後）（南から）



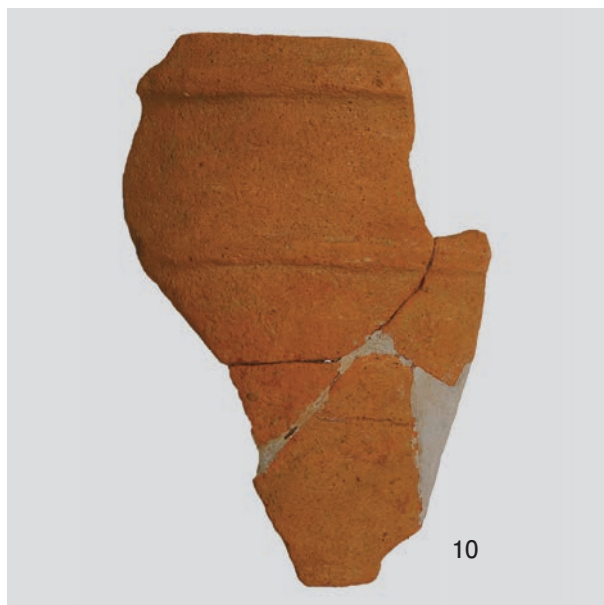
2. 羨道排水溝検出状況①（東から）



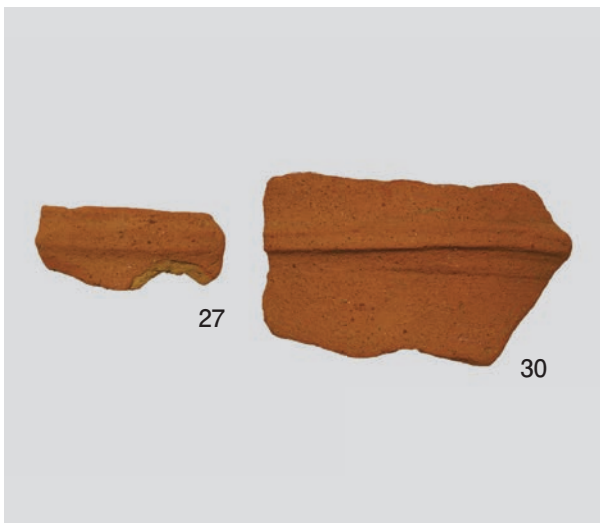
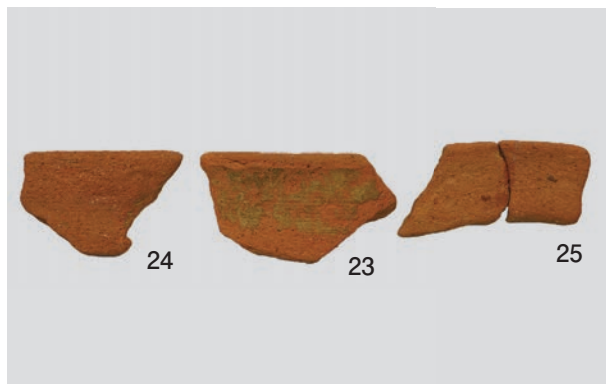
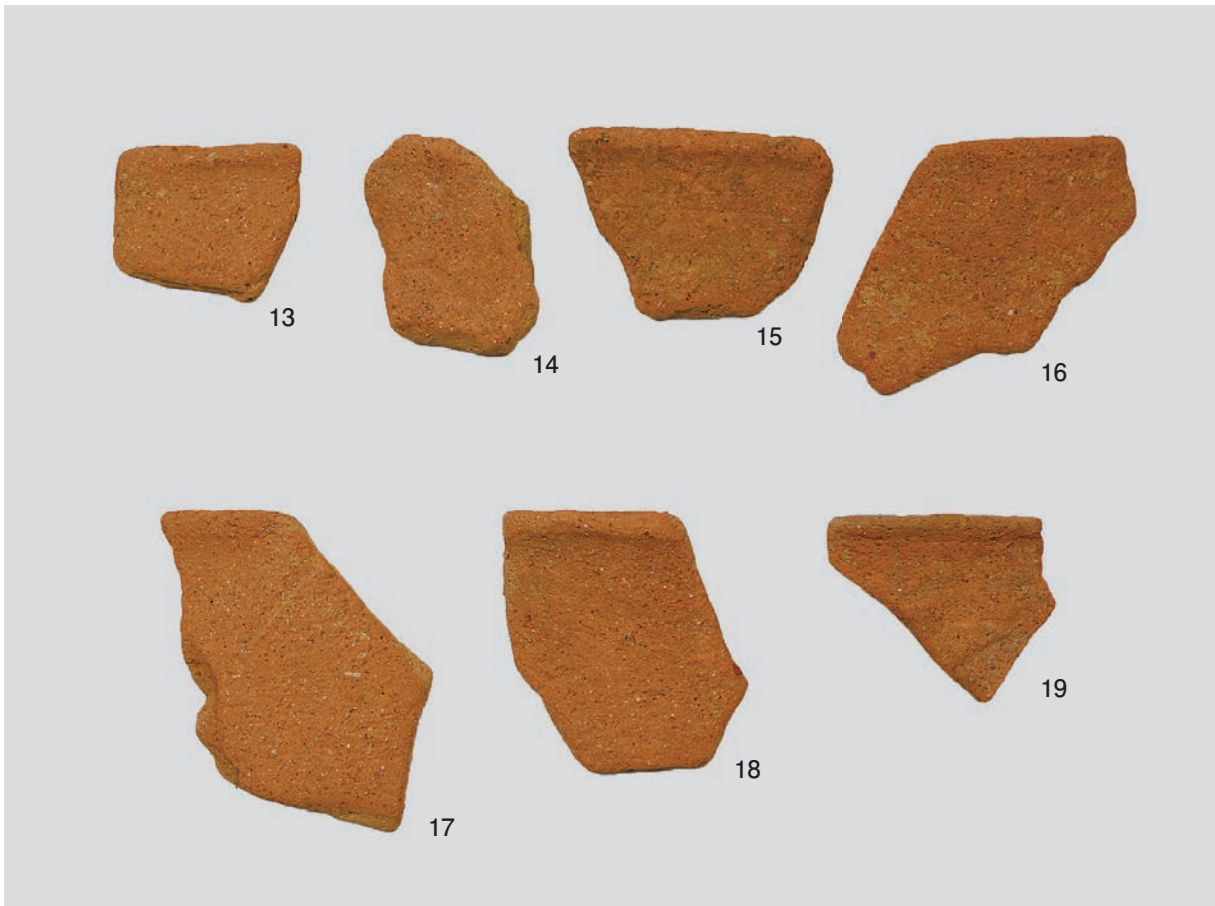
3. 羨道排水溝検出状況②（東から）



1. 大谷山 27号墳 円筒埴輪①



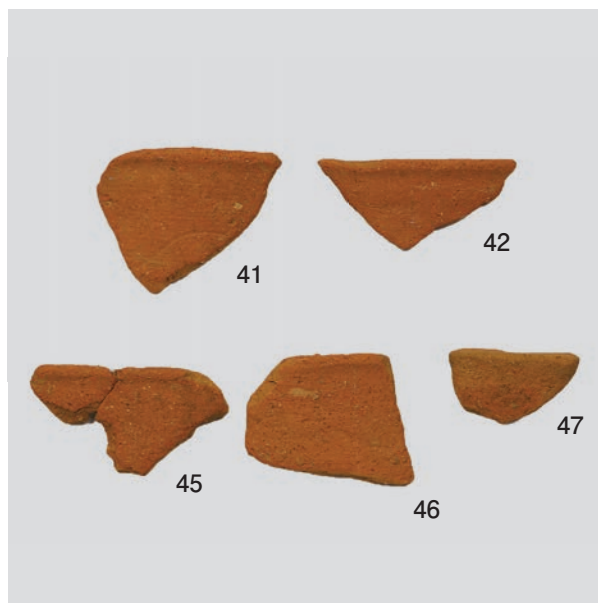
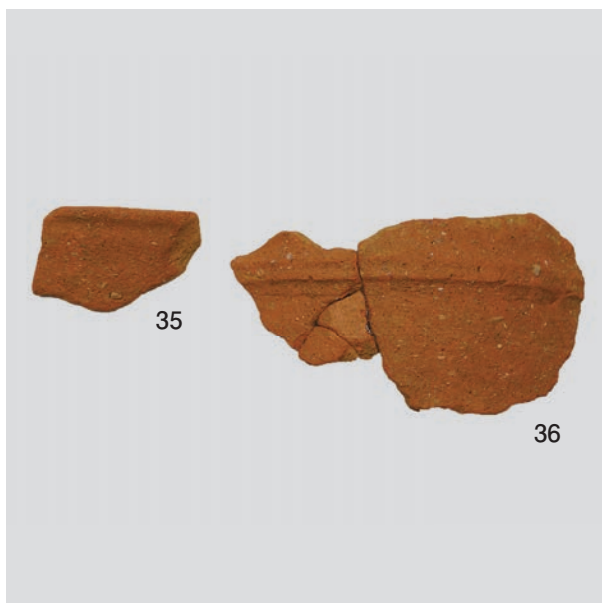
1. 大谷山 27号墳 円筒埴輪②



1. 大谷山 27号墳 円筒埴輪③



1. 大谷山 27号墳 円筒埴輪④



1. 大谷山 27号墳 円筒埴輪⑤



44



48

49



50

51



52

1. 大谷山 27号墳 円筒埴輪⑥



53

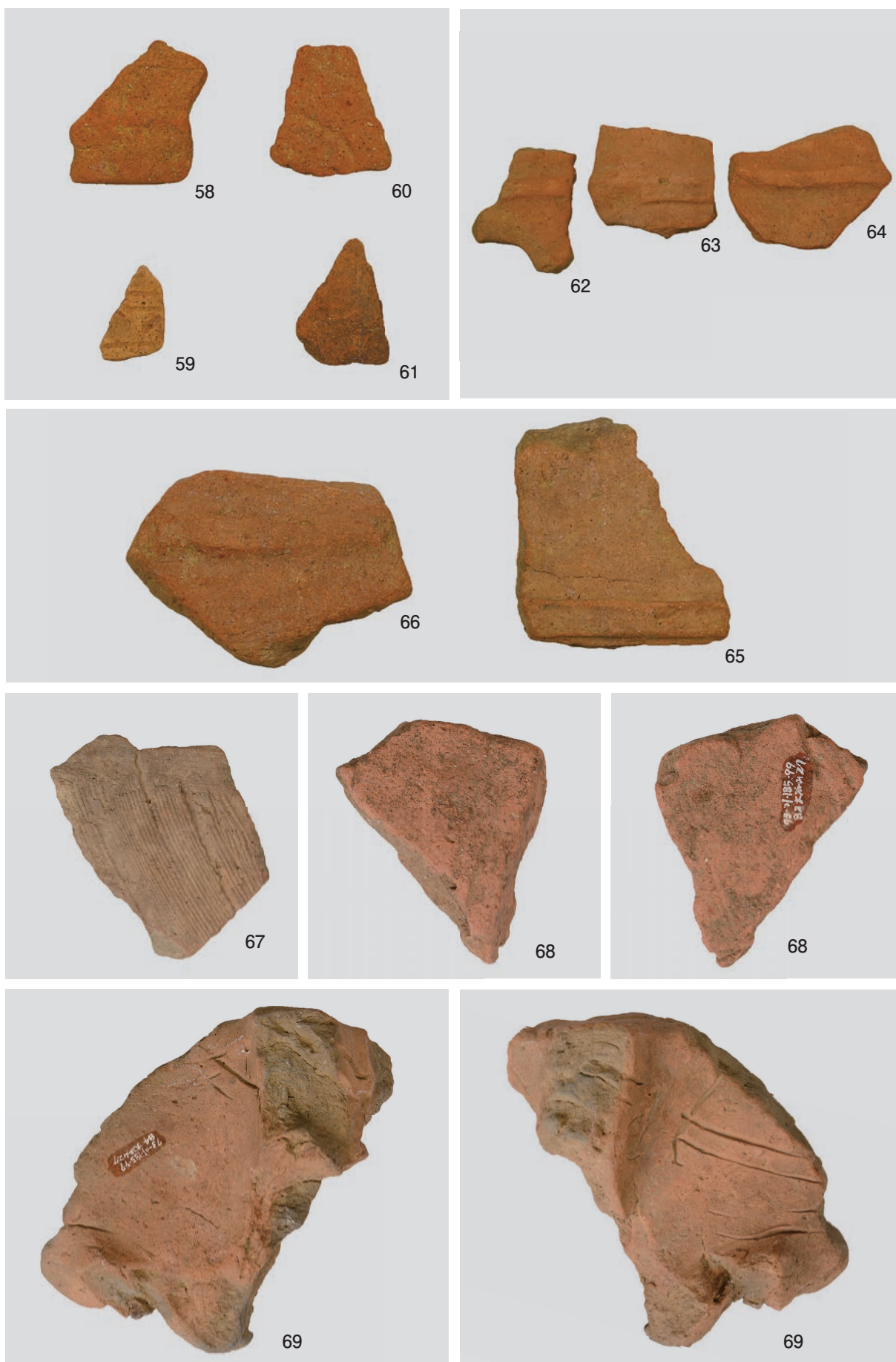
54

55

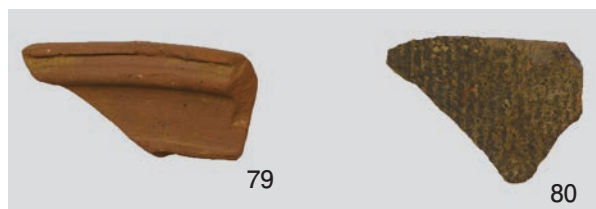
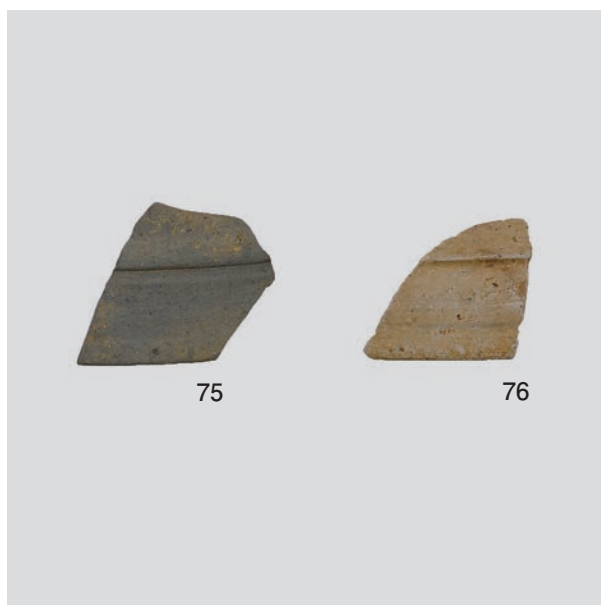
56

57

2. 大谷山 27号墳 形象埴輪①



1. 大谷山 27号墳 形象埴輪②



1. 大谷山27号墳 須恵器・装身具(金製垂飾金具)



1. 大谷山 28 号墳 全景 (南東から)



2. 大谷山 28 号墳 前方部前端 (東から)



1. 大谷山 28号墳 近景 (西から)



2. 大谷山 28号墳 全景 (南から)



3. 大谷山 28号墳 前方部前端 (西から)



4. 前方部前端円筒埴輪検出状況 (南西から)



5. 円筒埴輪 (前方部西)



6. 円筒埴輪 (前方部東)



1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室 (西から)



1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室玄室（東から）



2. 玄室（東から）



1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室玄室 (西から)



2. 玄室 (東から)



1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室玄室右側壁 (北から)



2. 玄室左側壁 (南から)



1. 屍床仕切石検出状況①



2. 屍床仕切石検出状況②



3. 屍床仕切石検出状況③



4. 屍床仕切石検出状況④



5. 玄室前壁 (西から)



1. 羨道左側壁①



2. 羨道左側壁②



3. 羨道右側壁



4. 羨道南トレンチ西壁



5. 羨道扉石閉塞状況 (東から)



1. 大谷山 28 号墳 横穴式石室羨道（東から）



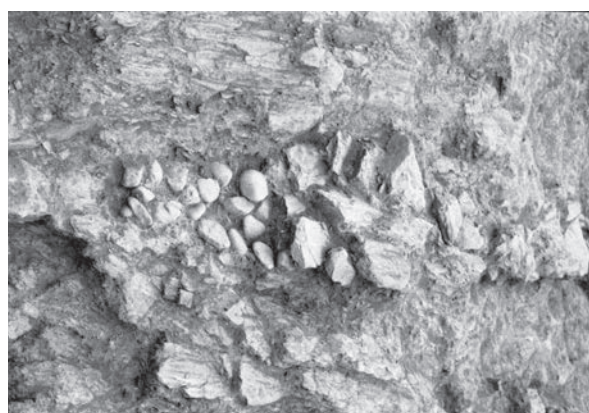
2. 羨道（排水溝石蓋除去後）（東から）



1. 羨道排水溝検出状況（西から）



2. 排水溝検出状況（扉石付近）



3. 排水溝末端部付近



4. 羨道排水溝検出状況（蓋石除去後）（西から）



5. 羨道排水溝検出状況（蓋石除去後）（東から）



1. 後円部西トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況①



2. 後円部西トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況②



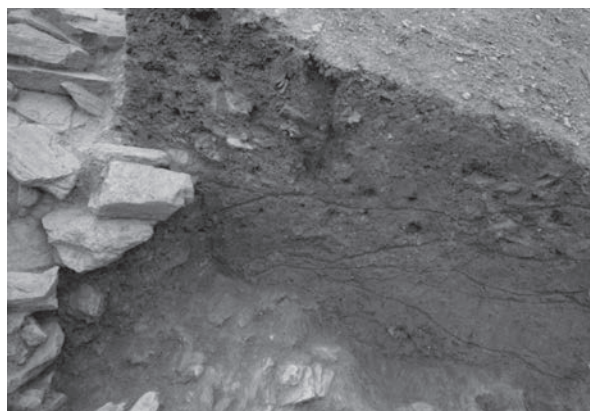
3. 後円部西トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況③



4. 後円部西トレンチ 南壁土層断面



5. 羨道北トレンチ 西壁土層断面①



6. 羨道北トレンチ 西壁土層断面②



7. 羨道北トレンチ 西壁土層断面③



1. 大谷山 28 号墳 箱式石棺 (西から)



2. 箱式石棺 (東から)



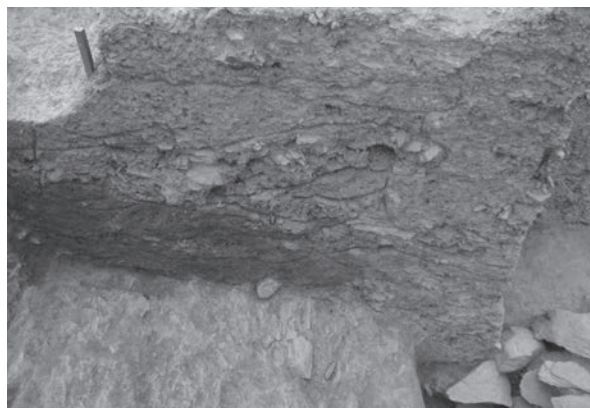
1. 大谷山 28 号墳 箱式石棺（蓋石除去後）（西から）



2. 箱式石棺（蓋石除去後）（北から）



3. 墳丘主軸トレンチ西壁土層断面①



4. 墳丘主軸トレンチ西壁土層断面②



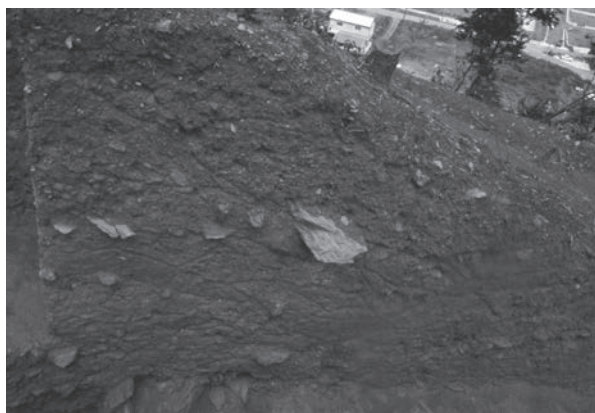
1. 後円部北トレンチ全景（南から）



2. 後円部北トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況①



3. 後円部北トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況②



4. 後円部北トレンチ 西壁土層断面①



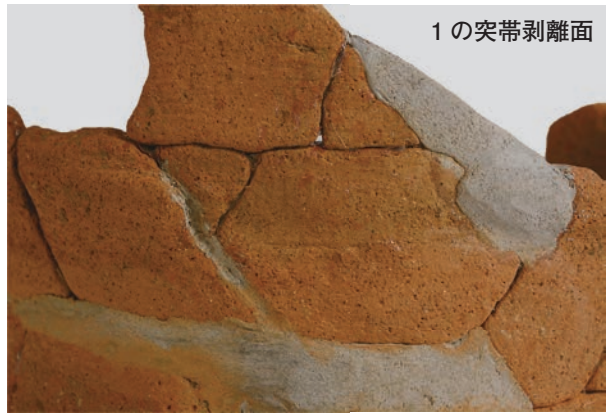
5. 後円部北トレンチ 西壁土層断面②



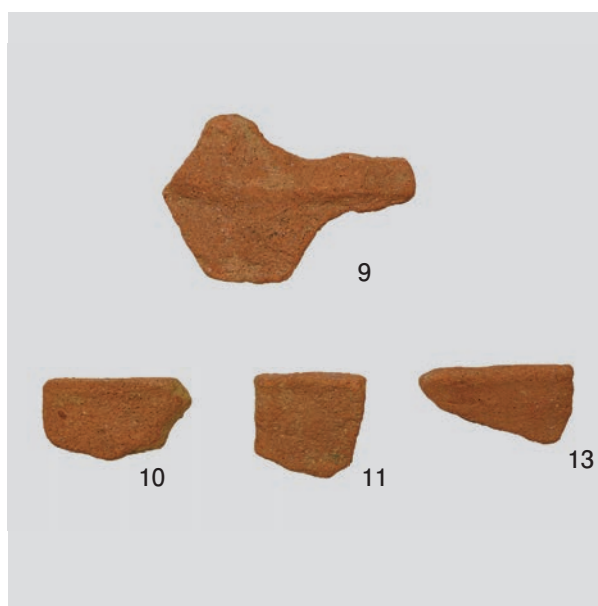
6. 後円部北トレンチ全景（北西から）



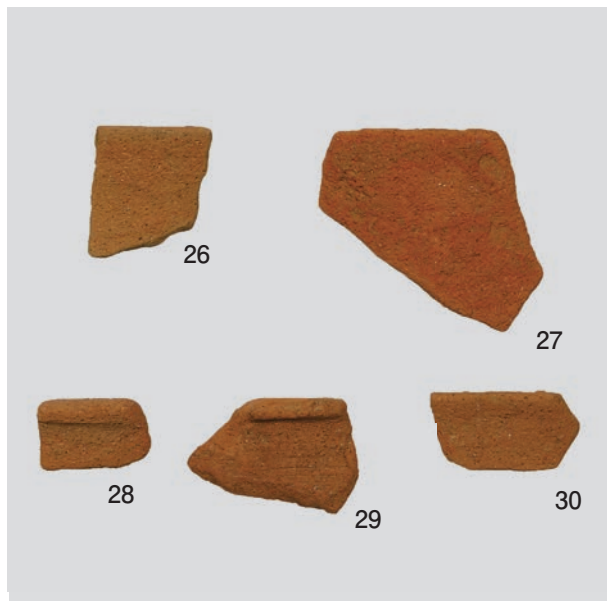
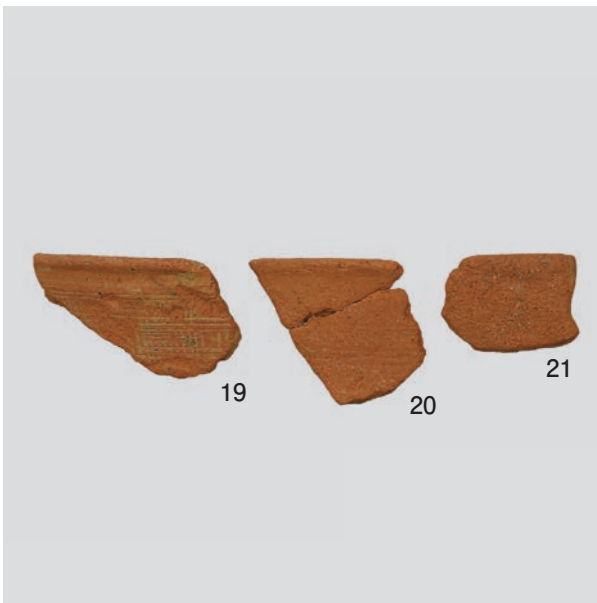
7. 墳丘主軸トレンチ 石室堀方及び裏込め検出状況



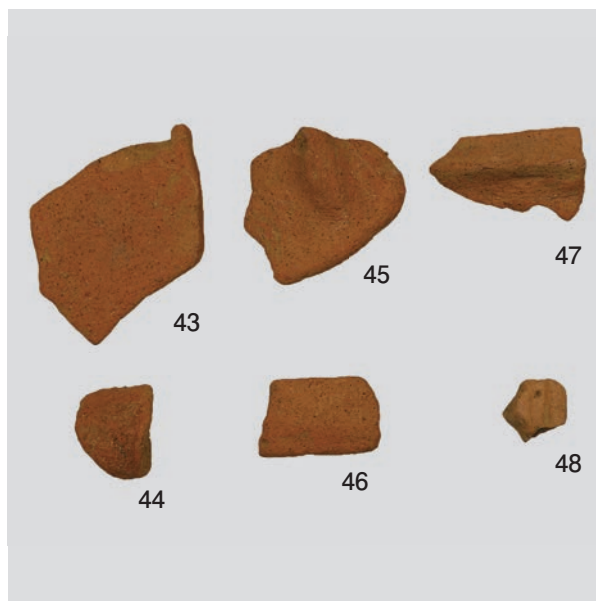
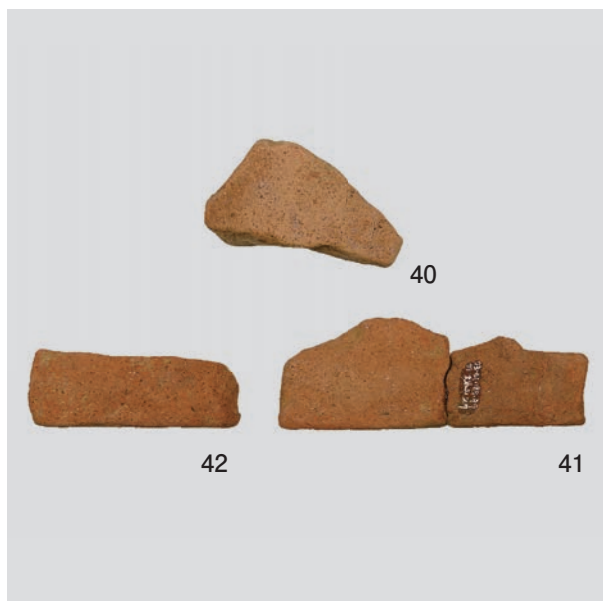
1. 大谷山 28 号墳 円筒埴輪①



1. 大谷山28号墳 円筒埴輪②



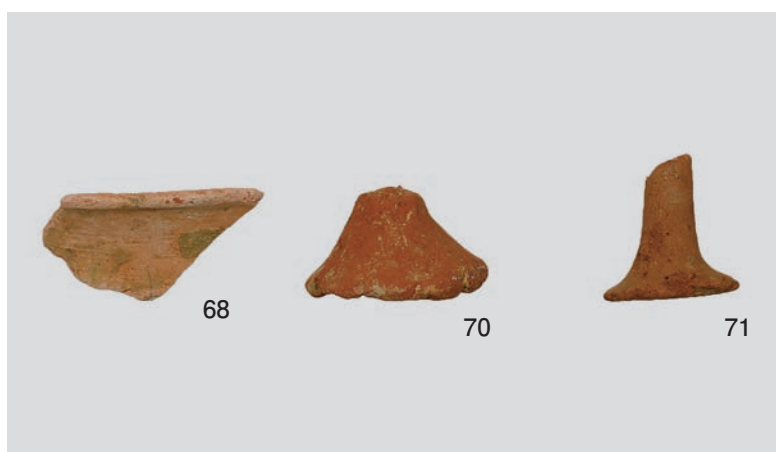
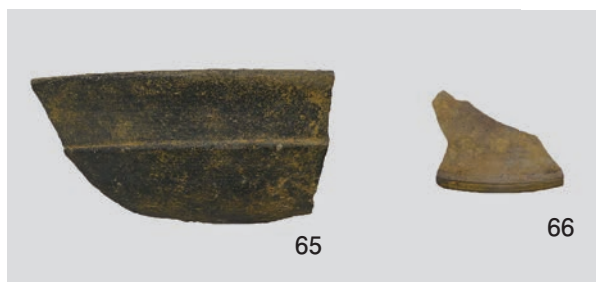
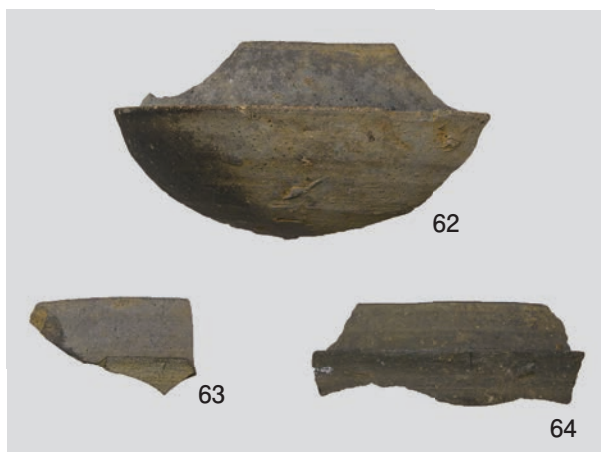
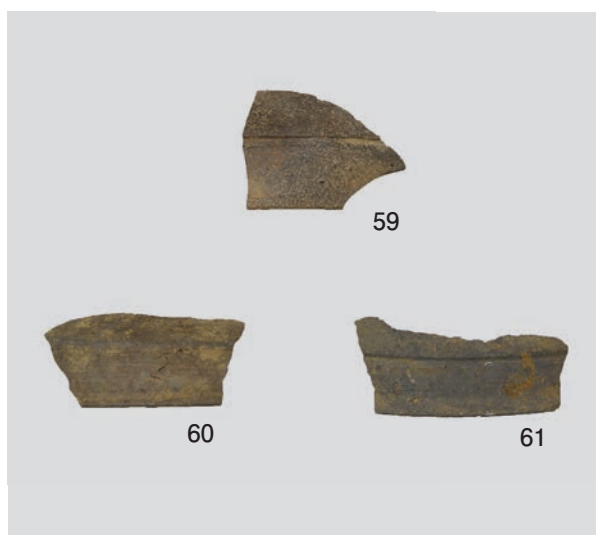
1. 大谷山 28号墳 円筒埴輪③



1. 大谷山28号墳 形象埴輪



1. 大谷山28号墳 須恵器



1. 大谷山28号墳 須恵器・土師器

報告書抄録

ふりがな	いわせせんづかこふんぐん-おおたにやま 27 号墳・28 号墳はつくつちょうさほうこくしょ-							
書名	岩橋千塚古墳群-大谷山 27 号墳・28 号墳 発掘調査報告書-							
副書名								
編集者名	萩野谷正宏/山本光俊・佐々木宏治							
発行機関	和歌山県教育委員会							
所在地	〒 640-8585 和歌山市小松原通一丁目 1 番地							
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いわせせんづかこふんぐん 岩橋千塚古墳群 おおたにやま 大谷山 27 号墳	わかやましいわせ 和歌山市岩橋	302015	185-99	34° 13' 46"	135° 13' 16"	1973.5 ~ 1973.8	-	土砂採取工 事に伴う記 録保存調査
いわせせんづかこふんぐん 岩橋千塚古墳群 おおたにやま 大谷山 28 号墳	わかやましいわせ 和歌山市岩橋	302015	185-100	34° 13' 45"	135° 13' 16"	1973.5 ~ 1973.8	-	土砂採取工 事に伴う記 録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大谷山 27 号墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 (横穴式石室)	埴輪、須恵器、垂飾付耳飾		岩橋型横穴式石室をもつ 6 世紀前半の前方後円墳。排 水溝検出。		
大谷山 28 号墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 (横穴式石室・箱式石棺)	埴輪、須恵器、土師器		岩橋型横穴式石室、箱式石 棺をもつ 6 世紀前半の前方 後円墳。排水溝検出。		
要約	土砂採取工事に伴い昭和 48 年に実施した岩橋千塚古墳群大谷山地区の緊急発掘調査報告書。大谷山 27 号墳・ 28 号墳は開発に伴い失われた。調査後、40 年以上が経過した平成 28・29 年度に再整理事業を実施し本報告 書を作成した。							

岩橋千塚古墳群
- 大谷山 27 号墳・28 号墳 発掘調査報告書 -

発行日 平成 30 年 3 月 31 日
発 行 和歌山県教育委員会
和歌山市小松原通 1 丁目 1
編 集 和歌山県立紀伊風土記の丘
和歌山市岩橋 1411
印 刷 有限会社阪口印刷所
和歌山県和歌山市中之島 1497